A Song For You

Cappuccino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ａ Ｓｏｎｇ Ｆｏｒ Ｙｏｕ

【Ｎコード】

Ｎ６８９９Ａ

【作者名】

Ｃａｐｐｕｃｃｉｎｏ

【あらすじ】

類稀なる経営の才能と知性。モデル並みのルックス。世界に名を馳せる地位と有り余るほどの資産を持ち、手に入らない物などない筈だったが、華やかに見える表の顔とは裏腹にその私生活は凍りついた大地のように人を寄せ付けない、誰よりも孤独な男関村堅。（せきむらけん）決して交わる事の無い筈だった二人が偶然に出会い、始まる若き実業家の片思い。

第1章　出会い

午後の夕暮れ時、聳え立つビルの間を縫うように走る道路、たくさんの車が
各々の目指す場所に向けて犇めき合っている。渋滞する車の中に真っ黒な
リムジンが他の車同様、身動きが取れず立ち往生していた。

「代表、このままですと時間までに到着は無理かと」
海外出張から帰る途中、天候不順で足止めを余儀なくされ予定に誤差が生
じたのだ。

ソファー調のシートが据え付けてある広い車内の片隅で、黒いスーツを着た
男がメガネのズレを右手で直しながらシート中央に足を組んで座っている男
に話しかける。がっちりとした体に鋭い眼差し氷のように冷たい瞳。どこか他
人を寄せ付けようとしないその男は顔を上げて言った。

「遅れるわけには行かない、電車で移動しよう」

「え?！電車ですか？しかし、代表が電車に乗るなど・・・」

スーツの男の声を遮るように男はこう言った。

「心配要らない」

「平尾。君はこのまま車で社に向かってくれ」

「はい承知致しました」

男は信号と渋滞で犇めき合う車の群れに飛び出だし直ぐに歩道に抜けると駅
の入り口へと足早に駆け抜けていく。スーツの男はそれを見届けると眉一つ動
かさずメガネを手馴れた手つきで直し上着のポケットから携帯電話を取り出した。
「平尾です。代表は電車でそちらに向かいました。駅まで迎えの車を用意するように」

用件を言うと電話を置いて静かにため息をついた。

駅の雑踏。色々な人たちが行きかい男は人ごみを掻き分け電車に飛び乗る。
座席は空いていたが座る気持ちにはなれずに出入り口付近に立つ腕時計を
何度も確認し目的地に着くのを待った。

背は高く電車のつり革の短いほうでも肘があまるほどで隣の乗客に触れないよう
身体を寄せた。床は汚れゴミが落ちていて光沢のある革靴がミスマッチに感じら
れるほど上質な身なり、膝に何かが当たり見下ろす。小さな男の子がよろめいて
ぶつかったのだ。顔色一つ変えない男に、慌てて駆け寄る母親は男の顔をチラッ
と見て謝ると子供を抱え関わりたくないといった感じで座席に戻っ

ていった。

駅に着くと急いでホームに飛び降り階段へと小走りに向かう。電車に乗る人降りる人がごちゃ混ぜになりホームは混雑している。何か肩に衝撃を受けたが混雑もありあまり気にせずそのまま先を急いだ。

「ちょっと！！！」

どこかで女の金繰り声が聞こえた。自分にだとは思わずそのまま階段の降り口へ向かう。

「ちょっと！そこの大男待ちなさいよ！」

そう聞こえたかと思うといきないり腕を掴まれた。振り返ると自分の肩位の身長の女が厳しい目つきで見上げていた。顔から下に視線を移動させると胸の辺りがジュースのようなもので汚れている。女の後ろで、片手にジュースを持った小さな女の子を抱きかかえた母親が困惑した表情で立っていた。先程の衝撃はあの母親に当たってこの怖い顔をした女がジュースをかぶったのだ。

ようやく呼び止められた理由に気がついた。こんな場所でジュースを持たせていた母親に対してムッとしたが、言い合う事も面倒だった。何も言わずにスーツの胸ポケットに手を入れると財布を取り出し女に札を差し出

した。クリー
ニング代にしては随分な金額だった。

「クリーニング代」

不躾に言うと女の手に無理やり押し込み先を急ごうと体の向きを変える。するとまた
手を掴まれた。約束の時間が迫っているのに追い討ちをかけるように面倒に巻きこまれる。振り向きざまにうんざりして言い放った。
「なんなんだ?!金なら渡しただろう先を急いでるんだ!」

女は頬がはち切れんばかりに顔を膨らました。
「ふざけんじゃないわよ!あなた人にぶつかっといて謝る事も知らない訳?!」

周りを行きかう人も何事か?とチラチラ此方を見ていく、しかし女は気にせず続けた。

「何その態度?冗談じゃないわ!あたしだって先を急いでるのよ?!」
「人を馬鹿にするのもいい加減にしてよ!こんな物要らないわ!」
そういい終わるか終わらないかのうちに女は金を男に投げつける。
「ったく!」と言い残し階段を駆け下りていった。

男はあっけに取られた。
(なんだ?!あの女は!)
一瞬カッとなったが(確かに急いでいたとは言え、あれは僕が悪か

ったな）
そう思いながら床に落ちた札を拾った。
「ふっ」
こんな状況で不思議と笑いがこみ上げた。
（あんなふうに怒鳴られる事。はじめてかもしれないな）
ハッとして腕時計に目をやる、急いでいた事を忘れていたのだ。子供を抱えた
母親に視線を向けると「すまなかった」そう言い残し先を急いだ。

第1章　出会い（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。完結後に修正を行いました。ストーリー等の大きな変更ではなく改行等の小さな変更です。完結作品ですが率直な感想を頂けたらうれしいです。

第2章　戸惑い（1）（前書き）

この物語は地名等出てきますが、完全にフィクションです。

第2章　戸惑い（1）

駅のトイレでため息が漏れた。
「はぁ～今日は最悪だよぉ」
そう言いながら女は濡らしたハンカチでブラウスを拭く。
（痴漢には逃げられるし、変な男と言い争いになるし）

「なんとか取れたかぁ」
田舎から東京に出てきて2年。彼氏とはすれ違い仕事もスランプでうまく
行かず挙句にさっきの騒ぎで仕事に遅刻しそうだ。慌ててバックから携帯
電話を取り出すと時計を見た。

「あぁまずい、完璧に遅刻だぁ」
そう呟くと電話を掛けた。

「すみません少し遅れます」
用件を述べると姿勢を低くしながら電話を切った。ふと、洗面所の鏡を見る
とお辞儀しながら話をしている自分に気がつく。トイレには誰もいないのに
急に恥ずかしくなる。何時までもこの癖が抜けない自分に腹がたった。

「あぁ！もぉ～何やってるんだろ！」

（しかし、さっきの男むかつく！なんなのあれ！って。痴漢にあった後で

ちょっと八つ当たりみたいになっちゃったしなぁ。怒鳴りすぎちゃったかな？
すごいキョトンとした顔してたし）苦笑いすると電話をバックにしまいトイレ
から出て先を急いだ。

「ただいま～」
女は家の中に入ると玄関の鍵を掛けた。６階建てのマンションで、ビルとビル
の間に建っている。日の差し込む時間が短く、立地条件は良くなかったが家
賃の安さに惹かれて越してきた。１ルームの部屋は８畳の広さ、帰りを
待っていた２匹の猫が鳴きながら擦り寄ってきた。猫に餌をやり携帯電話を
手に取にした。

（功ちゃんからメールきてないなぁ。もう丸一日経っているのに。
一昨日喧嘩
したっきり連絡も無くて幾ら彼の態度に腹が立ったとはいえ、あんなふうに言
わなければ良かったかな）
餌に夢中になっている猫の頭を撫でながら今日一日のことを思い出していた。
電車で痴漢にあって逃げられた事。仕事に遅刻して怒られた事。そしてふと
ホームの大男を思い出した。

（なんかむかついてきた）

「ほんと都会の人って常識ない人多いわ！思い出したら腹立ってきた」
（ヤメヤメ！ご飯にしよう）
「明日はお休みだし久しぶりにお出かけだぁ～功ちゃん来るのかな」
不安めいたものを感じながら窓の外を見た。

その夜夢を見ていた。彼が夢に出てきて優しく抱きしめてくれた。

「愛してるよ」

笑顔で語る彼に笑顔で答え手を繋いで二人で歩く。その場所は何処か分からないけれど、足元がフカフカの柔らかい絨毯で。辺りは明るく
柔らかな日差しが差し込んでいた。

（彼がこんなに近くに居る）そう思うと幸せな気持ちでいっぱいになる。

「こんにちは～～」
突然、若い女の声がした。どこかで聞いた声だ。二人はあたりを見回して
彼が繋いだ手を離して後ろを振り返った。気がつくと隣に居たはずの彼が
居ない。必死に探すが声がかれるほど叫んでも彼は見当たらない。
悲嘆に
くれてしゃがみ込むと、さっきの暖かくて柔らかな日差しは薄暗い地下室
のような冷たい空気に変わっていた。足元はまるで冬の湖に張った

薄い氷
体だが強ばって動かない。どうしようもない不安に襲われ涙が溢れ出して
目が覚めた。

猫が心配そうに枕元で顔を覗いている。
「大丈夫よ」と呟くと猫はホッとした様子で喉を鳴らした。天井を見上げ
て枕元に置いてある携帯を手に取った。受信ボックスを開きメールを見る。

「古川　功一　３２３件」
彼からのメールは全て取っていた。一番古いメールを読み返す。付き合い
始めて間もない頃のものだ。

Ｆｒｏｍ　功一
本文「ありがとう絶対に忘れないよそれとそばに居て欲しいって思っているよ」

次のメールを読む。

Ｆｒｏｍ　功一
本文「ただいま（＾０＾）やっぱり化粧しなくても、可愛いし綺麗だよ」

こみ上げてくる寂しさを誤魔化すように微笑むと、次のメールを開いた。

Ｆｒｏｍ功一

本文「些細な事で悲しませてごめんね僕が悪かった。毎回言うようだけどこれ
以上哀しませたり、苦しい思いさせないように頑張るからね離さないからね愛
しているよずっと」

携帯を置くと溢れ出る涙を拭いた。胸の中に蠢く不安で居た堪れなくなる時こ
うしてメールを読み返してどうにか自分を保てている気がした。半年前のメー
ルを読み思った。

（結婚を約束した彼。何時からだろう彼がこんな風にメールをくれなくなったの
「愛してる」毎日のように言ってくれていたのに、もうどのくらい聞いてないかな）

新しい洋服を買ったときも、ヘアースタイルを変えたときもせがまれて写真つき
メールを送っていたのに。今は自分から送ってもリアクションも薄いし、関心が
ないようだった。心の奥底に何かが蠢いていてそれに気がつきたくなかった。
認めたくない不安でどうしようもなくなって涙が溢れてくる。携帯電話の電源を
落として、まだ夜が明け切らない部屋で静かに息を潜めて瞳を閉じた。

（明日は彼に会える。仲直りできるといいな）
そんな風に考えているうちに何時しか眠りについていた。

「ん〜〜〜、いい天気だぁ！」

窓を見上げて僅かに差し込む日差しを全身に浴び急いで支度をする。
猫に餌を
やると玄関に向かいバックを片手に小走りに外に出た。携帯をチェックしながら
バスを待つ。
「やっぱり連絡無いなぁ」
そう思うと心に何か重く冷たいものが圧し掛かって来る様だった。
（彼の付き合ってやっているんだって態度が嫌で、いつも彼の都合に合わせて
いる私に当たり前のように接してくる。もぉ・・限界かな・・）
そう思うと涙が出そうになって乗り込んだバスで人目を気にして俯いた。
しばらく走るとアナウンスが流れる「次は〜〇〇」降りるバス停だ。
降車ボタン
を押しバスの中に立っている人の間を縫うように降り口に急いだ。
バスから降り
て待ち合わせ場所に向かう。信号待ちの交差点で立ち止まると直ぐ
横を見慣れた
車が通り過ぎた。

「巧ちゃん？！」

チラッと中を見ると助手席に女の子が乗っていた。後ろの座席にも
若い男の子
が乗っている。

（ユリちゃんだ）
親友の親戚でちょっとしたことがきっかけで親しくなった。人懐っこくて可愛らしい女の子だ。後ろの座席に乗っている男の子もユリの仲良しでいつの間にか
一緒に遊ぶ仲だった。

（拾って乗せてきたんだ）ふと数日前の出来事を思い出した。

「すごいなぁ、ユリちゃんと初めて会ったとき印象的だったんだよ」と笑顔で話す彼「ユリちゃんが笑いながら話しかけてきてさ」

そんな嬉しそうに話す彼に心がざわめく、動揺を隠しながら合図地を打った。そ
んな私に気が付かない様子で彼は続ける。

「最近さぁ良い事がなくてなさ、でもユリちゃんが就職内定もらえたって聞いたと
きには嬉しかったなぁ。相談受けてたんだけど最近連絡も無くてさ」
「報告してくれた事が嬉しかったな～」
彼が始めてユリちゃんにあったのは半年前だった。心に蠢く黒い塊のような不安を
押さえ込み、彼女より１３歳ほど年上の彼に「まるで娘が就職出来たみたいな心境？」
とぎこちなく笑って聞いた。彼は間を置いて「そうだな」と少し切ない顔をした。

（あの日私は、彼と喧嘩したんだ。それっきり連絡も無くて）
寂しくて情けない気持ちになった。また涙が出そうになり信号が変わると下を向

いたまま足早に交差点を渡った。待ち合わせ場所に着くと見慣れた顔が揃ってい
た。
「綾香、お久～」
前の勤務先で知り合った同い年の陸(りく)が近寄ってきた。功一はユリの少し離
れた場所に居てこっちを見ようともしていない。友達の中で世話好きまとめ役の陸
がみんなに話しかける。
「よし！今日は何処行く？」
「空中庭園いきたぁあい！」
ユリは功一に近寄ると満面の笑みで叫んだ。
「お～空中庭園ってあのビルだろ？」
陸が少し離れた場所に聳え立つひとつのビルを指差した。
高層ビルで２棟聳え立ちその間に円形のホールが繋がっている。以前から中心部に
も同じようなビルがあったが、その高さを遥かに凌ぐ２２０メートルの超高層ビル
を売りに３年ほど前にオープンしたビルだ。綾香達が立っている場所からは立ち並
ぶビルの間から僅かに見えた。東京に越す前に遊びに来ていたとき、高速道路の車
中から眺めて行ってみたいと思っていた。
（空中庭園かぁ私も行った事ないな、功ちゃんと一緒に行こうと話していた場所）
彼をふと見るとユリと笑いながら話をしている。私と喧嘩した後なのに気にも留め
ていない様子の彼。
「綾香はどこに行きたい？」

気がつくと覗き込むように陸が見ていた。

「あ、うん空中庭園いこう」

「そか、そんじゃみんな行くよ～！」
東京に来る前から友達の陸と奥さん。それと陸の親戚のユリ。ユリの友達の幸太。
綾香の彼氏の功一。計６人がぞろぞろと交差点を渡る。綾香と彼の事は陸と彼の奥
さんの由香しか知らなかった。なんとなくいつも気を使ってくれる陸たちに感謝した。
屈託無く功一に話しかけて笑い会うユリ。

（分かってる。ユリちゃんが悪いわけじゃないのに、でもどうして？こんな嫌な
気持ちになるの？）

目的のビルに入ると先を歩いていた陸が立ち止まった。
「あれ～工事中だよ」

ユリが驚いて陸に駆け寄り顔を顰めて言う。
「え～～うそぉ～」

「ほんとだ、改装工事中だって残念だなぁ」功一がユリに話しかける。
私たちも後から続いて看板を覗き見た。
［改装工事中のため展望室はお休みさせて頂きます］と直通エレベーター
の前に立ててある。

「それなら、如何する？」
「んじゃ昼も近いし飯でもいくか」
話がまとまり出口に向かって歩き出す。先を歩いている彼を見るとユリのそば
から離れないように歩いている気がした。（気のせいだよね・・）
ジリジリと
感じる苛立ちを押さえ込み歩き出した。

「君！」

後ろのほうで声がした。先を歩いていたみんなが振り向いて不思議そうな顔でこ
ちらを見ている。

「そこの君！まって！」
もう一度聞こえた。低くて大きな声が静まり返ったロビーに響き渡る。自分に声が
掛けられている事に気が付き振り向く。黒いスーツを着た若いビジネスマンが４メ
ートル位離れたエレベーターの前に３人立っていてその奥から走り寄ってくる一人
の男が居た。

スーツを着ていたが、磨き上げられた床に映り込むその姿はノーネクタイで仕立
ての良い服を身に纏いラフに見えるがとても洗練された姿をしていた。良く見る
と昨日の駅のホームの男だった。

「あ～！あの時の！」驚いて思わず声が出た。

「え？知り合いなの？」と陸たちがざわめく。

（あっちゃ～～。もしかして文句言いに来たのかなぁ）

そんな風に思うとなんだか逃げ出したい気分になった。

第2章　戸惑い（2）

男が目の前まで来て立ち止まると綾香は視線を逸らした。数秒の沈黙が気ま
ずい（どうしよぉ～一応言い過ぎた気もするし謝っておいたほうが良いのかも）
そう考え込むと思い切って声を出した。

「あのっ」

ハッとした。男も同じ言葉を同じタイミングで放ったのだ。思わず男の顔を見る。

「えっ・・」「あのっ」これも同じようにかぶってしまった。

二人は顔を見合わせると、お互いが何を言おうとしているのか分かった気がして
苦笑いした。笑いがおさまると男は少し落ち着かない素振りで口を開いた。

「昨日はすまなかった・・・」

「わっ、私こそ言いすぎたわ。昨日はちょっとイライラしていて言い過ぎたって
思ったけど止まんなくて」早口で言い訳のように並べ立てた。
（そんなに悪い人じゃないのかな？）
後ろで何が起きているんだ？と友達が不思議そうにしている。
「行かなきゃ」男に告げて後ろを振り返った。
「このビルに遊びに来てたの？」

背中越しに声を掛けてきた。
「うん、展望台に行こうと思ったんだけど工事中みたいで」
「少し、まっていて」と言い終わらないうちにエレベーターの前でメガネを光らせている黒いスーツの男に走り寄って何かを話しかけている。すぐに戻ってきてぎこちなく微笑む。
「上がれるみたいだから見てって」
その瞳は昨日と違って何処か優しい眼差しだった。
「え？だって工事中じゃ」
「え～～～～！ねぇねぇほんとうぉ？」
綾香の声を掻き消すように後ろから大きな黄色い声が聞こえた。ユリは男に走り寄る。
「本当に、良いんですかぁ？」と自分よりも３０センチは背の高い男を見上げた。
男は綾香から視線を外す事無く今度は氷のような冷たい眼差し、その表情に綾香は何処か違和感を覚えた。
「業者まだ入っていないし確認したら上がれるみたいだから」
戸惑い後ろを振り返るとみんなも喜んでいるようだった。ふと功一を見るとこっちを見ようともしない。（功ちゃん気にならないの？）そう思ったがこみ上げる苛立ちを抑えた。
「じゃぁ。お言葉に甘えて」

男は綾香の返事を聞くと展望室直通のエレベーターに向かう、後から付いてきた陸達
を先に乗せ最後に綾香は男と二人で入り口付近に立った。エレベーターはいっきに最
上階の展望室へと向かう。

「有難う」
横に立つ男に視線だけ上目で話しかけるとほんの少し戸惑った様子。
「いいよ、これなら受け取ってもらえるだろ？」

（？受け取る）
「え？」
「クリーニング代」

「あ！」昨日の事を思い出し急に恥ずかしくなった。男は綾香の態度を見て
「ふふっ」と笑いながら。

「なんだ、そうやって恥ずかしがる所を見ると以外に可愛い所もあるんだな」
「昨日はあんまり怒鳴り散らすから、どれだけ気が強い女かと思ったよ」意地
悪そうな顔でそう言った。男の言葉を聞いてムッとすると。（さっきは良い人か
もって思ったのに！）
「はぁ？何を言っているの？昨日は！・・・」

思わず喧嘩腰になっているのに気が付いて後ろを見た。みんなが不思議そう

に見ている。あわてて小声で言い返した。
「やっぱ、失礼なヤツ」
男はゴツゴツした堀の深い顔で「はは、ゴメン」とぎこちなく笑った。
横目で見上げると男の瞳はさっきの冷たい氷のような眼差しから、意地悪だけど優しい感じの瞳に変わっていた。エレベーターが最上階に着くとユリは走り出す。円形でガラス張りの展望室は中央にエレベーターやトイレが集まっていて景色が見やすい構造になっていた。
「うぁ〜〜〜何時見ても、良い景色〜〜」
子供のようにはしゃぐユリを見てみんなで笑う。功一は相変わらず綾香に視線を向けようとしない。そんな彼の態度を考えると苛立ちを隠しきれなくなりそうで綾香は黙って窓辺に立った。地平線の彼方まで街並みが続き、晴れ渡った空から降り注ぐ太陽の日差しが犇めき合うビルの群れに反射してキラキラ光って見えた。眼下に広がる景色を見下ろし大空を飛んでいるような錯覚に陥る。
眺めのよさに沈んでいる気持ちもどこかに吹き飛んだ。

「凄い景色〜綺麗」
山の中で育ったから幼い頃から都会の景色に憧れていた。（この街に出て来るまで夢にまで見たこの景色。雑然として居てビルがたくさん並んでいてだけどここに立つとなんだか落ち着く）

「ね〜〜古川さん、あれってなんだろぉ？」
功一に話しかけるユリの声が聞こえる。
「あぁ〜。最近出来たビルだな」
楽しげに話す功一の声、笑いかける彼の声が辛くて二人に背を向けた。ふと目
の前に男が立っていることに気がつく、ジッとこちらを見ていて目が合った。男は直ぐ
に視線をそらし反対側に一人歩いて行く（なんだろ？目があった気がするけど）少し不
思議に思ったがまた直ぐに景色に見とれた。

「ごめん、お礼言ってくるから先に下りてて」
景色を十分に堪能した後、移動する事になり男にお礼を言って展望室から降りようとし
たが見当たらない。陸達を先にエレベーターに乗せて下ろすといる筈の男を捜した。

（何処いったんだろ？反対側にまだ居るのかな？）

静まり返った展望室、密度の濃いフェルト状のカーペットが敷かれた床を歩くた
びに鈍い靴音が響き渡った。円形ホールのカーブを曲がると男が窓辺に佇み景色を
見ていた。歩み寄りハッとした。その横顔が凄く寂しげで悲しそうだったから。

（昨日は冷たくて見下すように人の事見ていたのに、今日は優しかったりあんな
顔していたり変な人）そう思っていると気配を感じたのか男は静かに綾香を見た。

一瞬戸惑ったが少し離れた場所から話しかけた。
「みっ、みんな下に降りたから今日はありがとう。それじゃぁ」
そういい終わると男に背中を向けてエレベーターに向かって歩き出した。

「あのさ」
「あのさ、名前教えてよ」
さっき意地悪に突っかかって来た声とは別人のように弱弱しく聞こえ驚いて振り向く。

「え？どうして？」
（名前？何でそんな事聞くんだろ？）
不思議に思って男の顔を見上げると、またさっきの意地悪な顔になっていた。

「いや、なんとなく」

「聞いて如何するの？」

「だから、なんとなくだって」と意地悪な顔でぎこちなく笑う。（なんだろこの人
でも展望台に上がらせてくれたし名前ぐらいなら）そう思ったが上に立ったような
言い方が気に入らなくて。
「あのね。人に名前を聞く時は先ずは自分から名乗るものでしょ？」

綾香が顔を膨らませていると男は目を丸くしてこみ上げる笑いを交えながら。

「ははは、そうだねその通りだ」

ゴツゴツした顔からは想像できないくらい可愛い顔で笑った。

「申し送れました。僕は関・・」

と言いかけて止めると一呼吸置いた。

「城川　けん」

「城川堅、宜しく」

「よろしくって・・・」

もう二度と会うこともないだろう男の言葉につい口に出る。堅は綾香の考えていることがわかるかのように苦笑いすると落ち着きなく付け足した。

「ほら、また何処かで会うかもしれないだろ？」

「わ、私は高橋綾香」少し俯いて呟くように言った。

「綾香ちゃんか」

「ちゃんって、なれなれしい友達でもないのに、普通は姓のほうで呼ぶでしょ」

男を見上げて思わず口にした。男は一瞬固まるとすぐに顔を緩ませた。

「あはははは。そうだな、ごめん高橋さんだね」と大笑いした。

冷たい瞳をしたり、子供みたいな顔で笑う堅を見て急に疑問に思った。

「でもどうして展望台に上がれたの？工事関係の人？」

堅は少し真顔に戻ると「まぁ、そんなところだね」と微笑んだ。

少し沈黙が流れる。

（なんだか気まずい）

「それじゃぁ、みんな待たせているから有難う。さよなら城川さん」

「どう致しまして」

綾香はその場に堅を残しエレベーターに乗って1階に下りた。

「みんなゴメンネ～。お待たせ」

走り寄りながら言うと陸が申し訳なさそうに歩み寄る。

「綾香悪いな。じゃぁ行こうかぁ～」

ユリが隣に駆け寄ってきて、綾香の顔を覗き込みながら満面の笑み。

「ねね、さっきの人ってぇお友達？」

「ううん、知り合い？かな・・？」

「なんかぁいい感じでしたよぉ～お二人」

「ユリ余計な事言わんの」と幸太がユリを宥めた。

（いい感じって、凄い喧嘩腰だったのになぁ）そう思うと綾香はユリの顔を見て

苦笑いした。そのまま視線が功一に移ったが、彼は知らぬ顔で感心すらない

様子、なんだか堪れなくなりながら歩いた。

第3章　揺らめき

「では、失礼いたします」

夕暮れの西日が差し込むオフィスから中年のサラリーマンが出て行く。広い部屋には書棚、重厚な机と革張りのソファー。大きな窓ガラスの片隅に観葉植物が置いてあった。仕事が片付きホッとして堅は煙草を口に銜え少し汚れたライターを手にする。母方の祖父が使っていた１９３７年製のビンテージ物だ。

Ｚｉｐｐｏのキャップを開けホイールを回す。着火石と擦れ合い独特な音が静寂な部屋に響き渡ると煙草に火をつけライターの蓋を閉じた。すると部屋にノックの音。

「失礼致します」

秘書の平尾が軽く一礼をすると堅の座るデスクの横に立った。

「代表、明日のご予定ですが・・」

そう言うと毎日の流れ作業のように、淡々と明日の予定を話し始めた。

時折、予定が書かれた手帳を持ち替えてメガネを直す。予定を軽く聞きながら煙草をゆっくりと吸うと今日一日起きた事をなんとなく思い出していた。狙ってい

た企業の買収契約が成立した事。その起業技術を生かして今後、事業展開へ
と枠組みを広げる計画。予定外の出来事に電車に乗った事。

（電車に乗ったのはどのくらいぶりだろうか、あれは母さんの墓参りに行こうと家出
した時以来だなそしてあの女）

今日出会った綾香を思い出していた。いきなり怒鳴られて驚いた事。
（そしてあのなんとも言えない顔。河豚みたいに顔膨らましておかしな女だったな）
そう思うと何故か笑いがこみ上げて来た。

「クスッ」無意識に笑っていた。

「代表？」平尾が堅の顔を不思議そうな顔で覗いていた。

「いやなんでもない」そう言うと片手で口元を隠し咳払いして平静を装った。

広い静かな部屋に入ると部屋のライトを付ける。薄暗い部屋の照明は家具を上
品に照らしていた。上着をソファーに掛けると冷蔵庫を開けベルギー産の瓶ビ
ールを片手に窓辺に立った。

ここは街の中心部にある高層高級マンションの最上階で1フロアー全てが堅の家
に改築してあった。部屋一面の窓は眼下に街並みを一望できて、庶民には手の

届かないほど巨額な費用が掛けてある。広くシンプルで一見殺風景な部屋だがグレーやブラック、モノトーンで調和の取れた家具は全てが最上級の素材で有名なデザイナーやブランドに特注で作らせたものだ。夜景に染まった街並みをみて静かに佇んでいた。

シャワーを浴びて寝室に入ると大人が４人くらい横になれる広いベッドに腰を下ろす。

「プルルッ・・・プルルッ」ベッド脇にある電話が鳴った。電話を取るのが面倒でそのままにしていると留守番電話に切り替わる。

「もしもし～？アタシ～行こうと思ってたけど居ないならいいやぁ、じゃぁ・・」

若い女の声が聞こえると、疲労の溜まった体を傾け受話器を取った。

「もしもし」静かに声を放つ。

「あ～居るんじゃないぃ、居留守ぅ。ひどぉい」女の声のトーンが急に高く聞こえた。

「今日さぁ行こうかなって、だめぇ？」

「いいよ、迎えをやろう」

「あ、マンションの前に居るのぉ。今行くね～ぇ」そう言うと一方的に電話が切れた。
チャイムが鳴りドアのロックを解除するとしばらくして若い女が部屋に入ってきた。
「堅～」抱きついてキスをする。無表情のまま女を抱きしめてそのままベッドに流れ込んだ。

夢を見ていた。幼い頃の自分。父親の背中、母親が直ぐ傍で泣き崩れている。
どうしたらいいか分からず戸惑う堅。そして、同じ仮面を付けて沢山の人間が自分を取り巻く。嫌気がさす程の謙り愛想笑い。
（あの憎い親父が死んでからみんな、僕をまるで腫れ物を触るみたいに扱ってきた。顔色を伺ってそして、女は僕を利用しようとして来た本気で愛していたあの女ですら）

その頃の記憶が夢に出てくる。

大学で知り合い、付き合っていた昔の彼女。結婚を考えるほど真剣に愛していた。
彼女もまた、堅の気持ちに応えてくれている様だった。屈託無く笑い美しく、くりくりとした大きな瞳がたまらなく可愛かった彼女、肩にかかるほどの髪の毛を人差し指で触りながら、うんざりした様子でこう言った。

「あ～ぁ、ばれちゃったぁ言っておくけどぉ～浮気じゃないの。彼とは大分前からの
付き合いでさぁ、堅と結婚出来るならぁ～ラッキーって思ってたんだよね～」

「どうして！？信じていたのに、はじめから騙していたのか？！」
大きな瞳の彼女は堅を見てあざ笑うかのように言った。

「あはは、気が付かないほうがどうかしているよぉ。まぁ～堅と付き合っているとさぁ
何かと便利だったしぃお金あるしね～。堅の彼女って言うだけで周りからも一目
置かれているっていうかぁ、でもそれだけかなぁ。その暗い雰囲気がもう耐えられ
ないのよね～なんか一人の世界って言うかさぁ」

真っ白な霧が立ち込めて夢の堅を包み込むと家に殆んど帰らず、他所に愛人を沢山作っ
ていた父親が現れて言った。

「この！若輩者！おまえは本当に出来が悪い母親そっくりだ！死んだものを何時
までも未練がましく」中学生の堅が言う。
「親父は母さんを愛していなかったのか？！」

「愛？！あはははは。妙な事を！愛など何の役に立つ！あいつはこの関村の家を
大きくするために結婚して、子供を産ませただけの女だ！産ませたのが出来の
悪いおまえだとは」やがてそのシーンは、霧と共に視界から薄れて

行き何も見え
なくなった。

いつも同じ夢を見た。

悪夢のように付きまとうこの感情は眠っている時も起きている時も、もう何年も堅
を苦しめていた。唯一この呪縛から逃れられるのは、仕事に没頭している時だっ
た。仕事の疲労や緊張感と引き換えにこの呪縛から逃れられる事が出来たのだ。
夢の中で何かが光る。１０歳の時に他界した母親の顔が見えた。

（いつも泣いていた。そして優しかった）

（時々怒られたけど、あの時の僕は母さんの胸の中で安心して眠れたんだ）

夢の中で幼い子供に戻っていた。気が付くと見上げた母の顔は、何処か見覚え
のある顔に変わっていた。
（誰だ？知っている・・・あんたの事。誰？）

その母に似た女は、優しく堅の頭を撫でてにっこり微笑んだ。不思議な気持ちだ
った。安らぐ気持ちとはこんな気持ちだったのかと思えた。夢一面に光が溢れそ
の女は静かに光の中に消えていく。幼少の堅が叫ぶ。

「まって、消えないで！」

切なくて悲しくて泣き出したい気持ちでいっぱいになりそのまま目を覚ました。
ぼーっとする意識の中で自分の部屋の天井を見ていた。

（あぁ・・・そうか・・夢だ。どのくらい振りだ？夢に母さんがはっきり出てきたのは）
そして夢に出てきた女の顔を思い出す。（誰だ？あ！あの女だ、そうかどこかで見
たことがあると思ったら、あのホームの女だ。あの女母親に似ていたんだ）右手で
頭を抱え、ゆっくり起き上がりベッドから降りた。裸で何もまとわない鍛え上げら
れたしなやかな体に朝日が当たるとベッドの中でシーツに包まった女が手を伸ば
した。
「ん～・・もう起きちゃうのぉ？」女が目を覚まし堅の足に触れた。それを振り払うよ
うにかわすと何処か冷めた目で女を見下ろす。
「もう出かけるんだ、悪いが帰ってくれ」そう言い残しシャワールームへと向かった。

シャワーを浴びながら夢の続きを考えていた。無意識に考えている自分に気が付
きどうしてこんなにも夢を気にするのか考えた。何年も見てきた同じ夢（あの女が
出てきたからだ。だからあんな気持ちに！あんな変な展開に）夢に囚われて居る
自分に腹立しくなり、シャワーヘッドを乱暴に戻すと体を拭きながらミネラルウォー

ターを口にした。部屋に戻ると女の姿はもう無かった。何処かホッとして空気が澄んだ明け行く街並みを窓から眺めた。

昼、所有する自社ビルの下見に来ていた。改装している展望室に合わせて眺めの良いレストランをオープンさせる為だ。

「代表。お車の用意が出来ました」

鋭い目つきで返事をすると、平尾と会社幹部2人を連れてエレベーターに乗り、そのままロビーに下りてビルの出口に待機させている車に向かおうと歩き出す。そのとき目の前を見覚えある顔が通り過ぎた。何人かが固まって歩いていたが最後尾を歩いていた横顔に見覚えがあったのだ。

（彼女だ！）

彼女を見つけると、自分でも信じられない行動に出ていた。

「君！」

その一声に自分でも驚いたが、もう自分を止める事も考えずに思わず声に出して

いた。

「そこの君待って！」

言い終わるか終わらないかのうちに走りだしていた。彼女が振り向く。正面から見る彼女は昨日の怒った顔とは全く違うあの夢のせいかどこか愛おしくも感じた。走りよって彼女の正面に立つといきなり緊張してきた。（どうしてだ？何ぜこんなに僕は緊張している？これじゃぁまるで、動揺しているみたいじゃないか！そうだ謝らなきゃ、だから僕は声を掛けたんだ）グルグルと自分に言い聞かせるように考えてからやっと声が出た。

「あのっ」

彼女と同じタイミングで同じ事を言っていた。慌てて「あっ」「えっと」また同じだ、なんだかおかしくなって笑いがこみ上げた。

「昨日はすまなかった」やっと言えた。

「わっ、私こそ言いすぎたわ。昨日はちょっとイライラしていて言い過ぎたって思ったけど止まんなくて」それを聞いて胸の痞えが取れた気がした。

「私いかなきゃ」

そう言って背を向ける彼女を、何故かそのまま行かせたくない気持ちになる。

（もう二度と逢えないかもな）そんな風に考えてから我に帰ったかの様に考えた。
（なぜだ？女なんて幾らでも居るのに！）気が付くとまた声を掛けていた。

「このビルに遊びに来ていたの？」彼女はまた振り返り少し戸惑いながらこたえた。

「うん。展望台に上ろうと思ったんだけど工事中みたいで」
それを聞くと堅は秘書に工事状況を確認しに戻っていた。

「はい。本日は午前中直ぐ下のフロアーで会議がありましたので、騒音を避けて
午後からの着工となっております」平尾は無表情で答えた。

「そうか」それを聞くと足早に彼女の元へと駆け寄る。どこかでドキドキしなが
らまるで朗報を聞かせたい気分で。平尾はそんな堅がいつもと違う事に気が付い
ていた。展望台に上れると告げると、彼女は戸惑った様子だったが少し微笑んだ。
エレベーターの中で「有難う」と彼女が言った。（いったい何をしているんだ？
こんなこと自分らしくない）堅は今の行動に対して自分自身への言い訳も含めて
言葉を発していた。

「これなら受け取ってもらえるだろ？」
彼女が不思議そうに返事をすると言葉をかぶせるように落ち着き無く言い放つ。

「クリーニング代」

それを聞いた彼女が遠慮せずに自分への感情をぶつけて来る。怒ったり、笑ったりする彼女を見下ろして思った。（違う、これはただの謝罪だ）そう自分に言い聞かせる。エレベーターが展望台に着くと、彼女は深く優しい笑顔で景色に見とれていた。

「凄い景色～綺麗・・・」

そう言いながら、展望室に差し込む光に染まる姿を見て夢の中で光に染まる彼女を思い出していた。次の瞬間、少しだけ泣きそうな顔をしたかと思うと堅の方に向かって歩いてきた。一瞬目が合うと堅はドキッとしたが平静を装った。コロコロと変わる彼女の表情に何時しか惹かれて行く。幼い頃、母親とよく行った遊園地の方角を眺めながら昔を思い出していた。その時。誰かが近づいてくるのを感じて横を見ると彼女が立っていた。

「あのもうみんな降りたし、ありがとう」そういい残すと、彼女は背を向けてエレベーターに向かい歩き出した。堅は彼女がもっと知りたくなった。突っかかるように言う喧嘩口調も新鮮な出来事だったから。彼女とこのまま別れてしまうのが惜しい気持ちになり声を掛けた。

「あのさ・・」

彼女の足が止まる。

「名前教えてよ」そう言うと、彼女が振り返る。

「え？どうして？」と不思議そうに堅を見る彼女。

「なんとなく。ほら・・また逢うかもしれないだろ？」と言うと彼女はこう切り返した。

「人の名前を尋ねる時は自分から名乗るのが常識でしょ？」

思わず笑ったこんな風に何も恐れず自然に接する人を母親以外知らなかったから。（こんな風に笑ったりするのも久しいな）名前を名乗る時、思わず母親の姓を名乗っていた。（本名を知ったら、この子も変わるかもしれない。あいつらみたいに）どこかで脅えていたのかも知れない。この自然な態度で接してくる彼女が変ってしまうのが怖かった。

堅は、幼稚園の頃から英才教育を受け。高校生の頃には経営学に興味を持ち貪欲なまでの好奇心で色々な分野に関心があった。大学卒業と同時に起業し、僅か数年で株式上場企業にまで成長を遂げる。父親が堅、２８歳の時に他界してから

遺産や事業を引き継ぎ、その経済力を生かし以前から事業で手がけていた科学
分野に力を入れ４年前未来の科学と言われた超伝導の実用化に成功。
そのシェアを全世界に広げ先進国はもちろんの事。軍事。発展途上国にも需要が高
いその技術は、堅を世界有数の大富豪にのし上げた。意見するものもたて付く者も、
もはや周りには存在しなかった。日本の技術や産業が薄れ行く今のこの時代、堅を
まるで英雄のように囁く人も少なくは無かった。何時しか１人の実業家の枠を超えて
他国の財界人とも繋がりがあり国交にも少なからず影響を及ぼすまでになっていた。

一見ワンマンで大胆な起業展開は、国内でもホテルやレストランからＩＴ関連、航空
会社まで所有する大企業だ。堅の冷静かつ緻密な計算による物だった。評論家で良
く語らないものも居たが、堅の前ではその批評もまるでインクが薄れて判別不能の
コピー用紙のように誰も耳を傾ける者が居なかった。

成功とは裏腹に大のマスコミ嫌いで公の場や、写真を公開するのを何よりも嫌った。
テレビや雑誌に出る回数も極端に少なく、それも科学雑誌や経済誌に限られていた。

政府。財界に大きく影響力を持つ堅を恐れ、マスコミ各社もトップの人間の指示で

堅のイメージダウンに繋がる報道はグレーゾーンと称され慎重を期して報道される
ほどだった。たとえ側近でも必要以上に近寄られる事を嫌った。人と話すことも接
する事もプライベートでは殆んど無く人に会わないように移動できるようにオフィス
や自宅には専用通路があるほどだ。その為。堅を見ただけでは彼が何者か気が
付く者が少なかった。

堅は誰よりも豊かだったが誰よりも孤独だった。

彼女と別れた後展望室から下を見た。
正面から団体で出てゆく彼女を見下ろして、その米粒ほど小さな彼女を見下ろし
て思った。（もう二度と逢う事も無いのにな）そう思うと寂しくもあり、なぜそん
なにまで綾香に自分が関わったのかと思うと戸惑いを隠せないで居た。
「失礼します。代表次のご予定が詰まっております」
その言葉に現実に引き戻される。

「あ、あぁ準備は？」

「専用機は既に待機済みです」

「分かった」そうこたえると展望室を後にした。

第4章　再会

あれから一月が過ぎ、移動する車の中で堅は窓越しに街を眺めていた。
夕暮れの街並み、ポツポツと灯りが灯り始め行き急ぐ人々。幾度もまた
同じ夢を見た。だがあれ以来少し変わったのは夢に綾香が出てくるのだ。
目覚めた後はホッとしてもう2度と逢えないかもしれない彼女を思い出
した。薄れ行く記憶の中で彼女の姿を思い出す。その都度我に返る
（馬鹿な！これじゃぁまるで！）とやり切れない気持ちになる。
この記憶は薄れてそして何時しか思い出さなくなるどうでもいい
出来事だ早くそうなって欲しいと思った。

綾香は仕事帰り街中の歩道を歩いていた。携帯電話が鳴るのに気が付きバック
から取り出す。急いで電話に出ると功一の低くて少しハスキーな声でいつもの
言い出しが聞こえた。あれから何事も無かったかのように連絡が入り不安なが
らもまた何時もの時間を過ごしていた。

【これから会える？】

「うん」

家の近くにある交差点で待ち合わせることにした。近くのデパートに入るとメイクを直す、待ち合わせ場所まで歩いて１０分程度、綾香は嬉しさでいっぱいだった。足早に待ち合わせ場所に急ぐ、踊りだしそうな心が足取りを軽快にしていた。

夕暮れの歩道橋を渡ると、待ち合わせ場所はもう直ぐそこだった。待ち合わせた場所に立つとドキドキしながら功一を待った。待ち合わせた時間が１０分過ぎて携帯電話をバックから取り出す。

（道が込んでいるのかな？）

３０分待った所で電話が鳴り急いで電話に出た。

「もしもし？功ちゃん？」

【綾香？急な仕事が入って行けなくなった】

その言葉に胸の奥底からこみ上げる虚しさや憤りが口を重くした。

（どうして？なんで何時も・・）

「そっか。うん・・仕事なら仕方ないよね」

無理に笑い声を作り明るく振舞うとその後1言2言話して電話は切れた。さきほどまでの胸いっぱいの嬉しさと同じくらいの寂しさが圧し掛かる。ここ最近功一は土壇場でキャセルしても喧嘩しても【ごめん】とすら口にしなくなっていた。まるで見下すように接してくる功一の態度に微かな焦燥感。その態度を問いた

だす事すら彼
を失いそうで怖く、そんな自分の置かれた立場にどうしようもない
ほどの虚しさを覚
えた。

（もっと早く連絡してくれたらいいのに）

ふと、街を見上げるとあの展望台を思い出した。

（まだ工事中かな？あれから一月だしもう終わってるよね？行って
みようかな）

なんだか部屋に真っ直ぐ帰りたくない気持ちだった。

（あの景色を見ると心が安らぐかも）そう思うと、無性に行きたく
なった。

（歩いていこうかな。ここからだと少し遠いけど）
週末に一人で過ごすのが嫌だった。このまま部屋に居たくなかった。
涙を堪えな
がら歩き出す。

楽しそうにカップルが行きかう。家路に急ぐサラリーマン。綾香は
まるで別世界に
居る気分になった。（自分はこの場所に居るのに・・なのに、どう
してこんな気持
ちになるんだろう）自分ひとりだけがこの場所に異質な存在のよう
に感じる。

俯きながら歩くと涙が溢れて何も見えなくなった。

行きかう人の視線も気にする余裕も無くそのまましゃがみ込んで膝を抱えた。
溢れ出る涙を両手で押さえながら声を堪えて泣いた。

「代表―・・・」

「代表?!」平尾の声にハッと我に帰った。

「あ」

「あぁ・・・」少し気の抜けた返事を返す。

「この後の幹部会議が終わりましたら本日は」
平尾は続けるが堅の様子が気になった。

「代表?お体の具合でも?」

「いや、少しボーっとしていた」

平尾にそう言うとまた窓の外に目をやった。信号で止まった車の外には、歩道で信号
が変わるのを待つ沢山の人が居た。

（!!）

堅は身を乗り出し一瞬息を飲む、綾香が居たのだ。

（見間違いか？）

歩道の信号が青になり、歩行者が流れ込むように車の前を歩き出す。目の前
を俯いて彼女が歩いていく今にも泣き出しそうに顔を歪ませていた。居ても立っ
ても居られずに腰を上げると車のドアを開けた。

「代表？！」

信号が変わり青になる。

黒塗りのリムジンの後ろからクラクションが鳴り響くと「後から連絡する！」そ
う言い残しドアを乱暴に閉めた。そして心の中のどこかで踊りだしそうな気持ち
と、今にも泣きそうな彼女を思い出しながら後を追った。
夕暮れの少し冷たい風が頬に当たる。
時々物陰に隠れてそして自分が寝た後に一人泣いていた母を思い出した。
（僕はどうしたら良いか分からずに、ただ胸が締め付けられる思いで母さんを見
ていた。あの時母さんを抱きしめていたら孤独なまま死なずにすんだかも知れないのに）

その日の夜、母親は誰も気が付かないうちに倒れ意識を失い帰らぬ人になった。
それ以来ずっと後悔してきた。母親に似ていた彼女が泣きそうな顔で歩く姿を見
た時。頭より先に体が動いたのだった。

（彼女を探さないと！彼女を見つけたらなんて言おう見つけてどうする？！）

そんな葛藤が心に渦巻くものの自分を抑えられないまま綾香を探した。行きかう人
ごみの中であたりを見回す。どの方角を見ても綾香は見当たらなかった。高鳴る気
持ちを静め息が荒い事に気が付く、取り乱している自分を冷静に見つめなおす。

深呼吸をして足を止めると息を落ちつかせ、乱れた髪を手で直した。

（何をやっているんだ・・僕は・・）

そう思って失笑した。どうしようもない虚しさが堅を襲っていた。
平尾に連絡を取ろ
うと携帯電話を胸ポケットから取り出す。歩道の片隅で電話を掛けた。

「はい。平尾です」

「私だ。このままオフィスに戻っ！」

そう言い掛けた時立っている場所から少し向こうでうずくまる女性を見つけた。良く
見ると綾香のように見えた。

「もしもし？代表？」平尾の声で我に帰る。

「あ、今日の定例幹部会議は取り止めだ。すまないが連絡しておい

てくれ」
「かしこまりました」
彼女から目を逸らさないで電話を切るとゆっくりと深呼吸をして近づく。一歩また
一歩と距離が縮まるとその女性が綾香であると確信していく。
全身を戸惑いと喜びが駆け巡る。
（なんて声を掛けよう。きっと泣いている）
逆行して道を急ぐ人々を避けながら綾香がうずくまる前に立ち止まる。
握り締めた手に汗をかいている事に気が付いた。雑踏の中に声を押し殺して
泣く声が微かに聞こえる。
堅は切なさと今の自分に戸惑いながら立ち尽くしていた。

第5章　確信

綾香はうずくまり泣いていた。涙が止まらずに溢れ出し泣き止もうとするが
どうしようもなく、こぼれる涙をハンカチでおさえてからうずくまった自分
の足を見た。

（歩こう。何処か人の居ない所に行こう）そう思った時また涙が頬を伝った。
ふと見ると直ぐ目の前に汚れた歩道には相応しくない光沢をはなつキャメル
色の革靴があった。ゆっくり上を見上げる。そこには仕立ての良いスーツを着
た背の高い大きな男が立ってこちらを見下ろしていた。長い足長い手、広い肩
そして日本人離れした堀の深い顔、その鋭い眼差しには見覚えがあった。

「あ！」

顔を下に向けて伝う涙を慌てて拭くと綾香は立ち上がってもう一度顔を見た。

「えっと、城川さん？」

綾香を見下ろす瞳がとても切なくて優しげで戸惑った。
（泣いている所見られちゃった。どうしようって、どうしてこんな所に居るの？！）

困惑しながら堅の瞳に釘付けになった。さっきとはまるで違う深く寂しい顔そして
優しく包み込んでくれそうな瞳の光。

「ぐっ偶然だな、なんか居ると思ったら高橋さんか」

その表情とは裏腹に堅が不躾に言葉を発する。綾香は驚き一度俯いてからまた顔を
上げて堅を見た。その瞳はまた意地悪そうな、それで居て見下したような顔に変わ
っていた。

「あ、そっ。居て悪かったわね！居るって失礼な」
と小さく呟くと途端に恥ずかしくなって顔を逸らした。

（こんな人に泣き顔見られて恥ずかしい！！）

「じゃぁさよなら！」
そう言って横をすり抜けようと歩き出した。その瞬間堅が綾香の右腕を掴んだ。
「？！」
驚き堅の顔を見ると少し仰向けに顔を上げていて鋭い眼差しは一瞬見下してい
るようにすら見えた。

「いっ、いきなり何？！」

堅は慌てて手を離して視線を彷徨わせる。
「あっすまない」

突拍子もない行動に出ている堅が一番戸惑っているように感じた。
「私に何か用でもあるの？」
堅は目を丸くさせると眉を顰めてまた視線が彷徨う。それを見て直ぐに言いな
おした。
「まっ、そんな訳ないっか」
（なんか変な人。突っかかって来るし。かと思えば寂しそうな顔するし）
そう思ってまた堅の顔を見た。
「車で通ったら！その・・泣いていたから・・」
少し大きな声で話し出したかと思うと口をこもらせて黙り込んだ。
（えっ何？車でって、車で私を見かけて？降りてここまで来たの？）
堅の言っ
ている事を頭で理解する前に、胸に熱い物がこみ上げてくるのを感じた。
堅は視線を逸らして照れくささを隠そうと口元に手を当てる。
（何を言っているんだ！僕は）恥ずかしくなり慌てた。
「いや、じょうだ」
冗談だと言い掛けてその瞬間口が止まった。綾香の瞳から涙が溢れていたから
堅はどうしようもなく切なくなった。（如何してだ！どうしてこんな気持ちに
なるんだ。彼女が泣いていると僕は）

この一月の間付きまとう得体の知れない感情にやっと気が付いた。
（始めは周りに居ないタイプで気になって、だがもしかして僕は彼女が）
複雑な心境で彼女を見ると、綾香は下を向いてハンカチで瞳を覆い少し間を置
いて顔を上げた。

「あはっ。たく！冗談が過ぎるよ！」
そう言いながら無理して笑って堅を見るとその顔がまた切なさで溢れていて一瞬
胸が突きあがり目を逸らす。
（やだ、なによこの人、意地悪言ったりするくせに）

「じゃぁ用が無いなら行くから」

どこか後ろ髪を惹かれる想いで背を向けて歩き出した。

「良かったら夜景でも見に行かないか？」

綾香の足がゆっくり止まり背を向けたまま黙り込む、数秒置いてから静かに
口を開いた。

「あの展望台ってまだ工事中？」

「うわぁ～すごい。綺麗～！」

薄暗いホールに綾香の声が響く。

「直ぐ下のレストランと共にあさってオープンするんだ」

夜景が凄く綺麗で、大きな窓に寄りかかり綾香ははしゃいでいた。

さっきまでの

泣き顔は何処かに消えうせ今はコロコロと笑っている。堅はホッとしていた。薄暗

い部屋とは対照的に眼下に広がる見渡す限りの夜景はまるで宝石箱を開けたかのように煌めいて綾香の顔をうっすらと照らしていた。

綾香は深呼吸すると堅のほうを見た。

「ありがとう」

堅の表情は優しくそしてまた何処か寂しげだった。

（幾ら母さんに似ているとは言え、こんな庶民的な女に惚れるなんて有り

得ないそれに・・どうせこの子も僕が関村と知ったら態度が変わるに決ま

っている）

（今までの女はみんなそうだった。だから割り切った付き合いしかして来

なかった）

（ある女は僕を退屈でただの図体のでかい男だと言った）

【お金が無きゃ付き合わないわよ】

そしてある女は【すごいでしょぉ？関村の御曹司よ？私の彼氏なの】
そう自慢する僕はステータスシンボルでしか無かった。
（そうだ、この女も同じなんだ。だからもうこんな気持ちは終わりにしよう）
心の中でそう決めると鋭い眼差しで綾香を見る。

綾香が夜景に見とれながら口を開いた。
「いい眺めだね～でも・・いいの？ここ・・入っても？」

「いくら工事関係者でも怒られない？」と心配そうに訊ねる。

堅は少し沈黙した後に表情が変わるであろう綾香から視線を外し、夜景を
見て静かに口を開いた。

「ここ自社ビルだから良いんだ」

「え？」
「僕の名前は関村堅、このビルのオーナーで関村グループの代表をしている。
君には城川と言ってしまったけど・・」

そういい終わると堅は瞳を閉じた。
（【え～～～ほんとぉ？！すごぉ～～～い】きっとこんな風に言うんだ）

「あはは、まさか！」

いきなり笑い声がした。瞳を開き横目で見ると綾香と目が合ってから
「ほんと・・？」と疑い深げに訊ねる彼女に黙ってうなずいた。
「へ～。まぁ身なりからしてお金持ちかなって思ってはいたけど？」
「まさか大企業の社長さんとはね～。関村グループって航空会社とかＩＴ
関連とかホテル、レストランとか。あとはぁ～海外でも事業している
しょ？よくわかんないけど」と苦笑いした。
綾香の反応に拍子抜けした堅は驚く。
（いつもならここで女ははしゃいで、僕に話しかけるのに【え～～～すご
ぉいうれしぃ～こんな人と知り合いだったんだぁ】媚びた眼差しで
下品な声で！）
「驚かないの？！」
予想外の反応にイライラした。
「え？驚いているけど？だから？」
その反応は拍子抜けするほどアッサリしていた。
「僕が車止めてまで、夜景に連れてきているんだぞ？」
（何を言っているんだ僕は！）そう言って感情を抑えようと口に手
を当てた。
「あは。そうだね～」にっこり微笑んだ。
「それはお礼言うけど」

「でも、お金持ちだから何？」
驚いて口を開けたまま立ちすくむ。綾香はそのまま続けた。
「私あなたとは比べ物にならないくらい一般庶民だけどお金持ちが一番偉いとか
思わないし自分に恥じた生き方してきた覚えはないから」淡々と答えた。

堅はその瞬間、頭を何かで殴られたかのような感覚に襲われた。

「なんてね、恥じた生き方は自信無いなぁ・・」

「さっきも泣いていたしね・・」ぎこちなく笑うと背を向ける。
「ねぇあれってさ、観覧車だよね？乗った事ないのよね～」

ビルの屋上に据え付けられた大きな観覧車が街のネオンに照らされて浮かぶよ
うに見えていた。彼女の頼り無さげな背を見て恥ずかしく思いながらもどこかに
潜んでいた迷いが吹き飛んでいた。

そして確信した。

（綾香が好きだ）

そう確信した時、臆病になっている自分に気が付く。

（今まで割り切って蔑んで付き合ってきた女達とは違う）
ゆっくりと綾香の背に近づくとどれだけの間感じていなかっただろ
うかドキドキし

た感情が溢れ出すのを感じた。

「夜景の中で乗る観覧車って綺麗だろうね～」

そう言いながら綾香が振り向くと思ったよりずっと近くに堅が居る事に気が付いた。

その瞳が夜景に照らされて優しく、そして何処か怪しげに煌めいて見えた。

その瞳に戸惑い俯く、視線の先に羅針盤がクラッシックな色をしている腕時計に思

わず見入る。針のさす時間を見て家で待っている猫を思い出した。

「あ！いっけない～！もうこんな時間！」

（あっちゃ～ドタキャンされて落ち込んで忘れていたよお。腹すかせているだろうなぁ）

「猫にご飯あげなきゃ～やっぱぁ～」

そう言い終わる前に展望室中央にあるエレベーターに向かって走り出した。

「帰るの？」

「あ、うん彼氏にドタキャンされてすっかり忘れてたの」と微笑む。

「関村さん今日はありがとう。バイバイ」

そう言いながらエレベーターの昇降ボタンを押した。

綾香が言った【彼氏】その言葉に足元が一瞬冷たくなるのを感じた。

深呼吸する。（恋人が居るのか、予測していなかった訳じゃなかったが）

そう思いながらゆっくり近づいて話しかけた。

「送るよ」

「え？」

「送るって・・いいよぉまだ電車あるし」

エレベーターが静かに上がってくる。ドアが開いたらまた会えなくなるかもしれない

そんな不安に駆られ堅は短い時間でどうしようか考えを廻らせたせた。

（後数秒で彼女は行ってしまう）そう思うと焦りが襲った。

「高橋さん。ここ気に入った？」

「うん眺めいいしね～また来るよ、一般公開のときにね」

少し沈黙してから堅は口を開く。

「時々さ、ここで話でもしない？」

綾香は目を丸くした。

「え？」

「話？話ってここで？でもこれからは開放しているしきっとカップルばっかりよぉ～」

綾香は冗談を聞き流すように笑ってエレベーターの階数表示に視線を向けた。

堅は自分が口走った言葉に納得しようと慌てて続ける。

「ここ公開２３時までなんだ、それ以降は閉まるし」
綾香は話しかける堅を見上げて笑いながら
「あはは。変な人！私と？！どうして？」
「お金もちなんだから、相手には困らないでしょ？どうせならもっと綺麗な
モデルさんとか」
仕事の時の計算高い冷静な堅は、まるで人が変わったかの様に言葉を並べ立てた。
「そんなの興味ない。君と、あ！いや、そのっ・・・だめかな？」
そして自分が発した子供のような言い分を理解しようと口ごもる。
「ダメとかじゃないけど、でもどうして？」
堅はすかさず言った。
「友・・・そうだ！友達になってくれないか？」声のトーンが不自然に上がる。
（何を言っているんだ僕は！）
もう何を話したら良いか分からなくなっていた。自分でも驚くほど必死に口を動かし
て戸惑いながら瞳を大きくして黙り込む綾香を見た。
「あはははは。面白い人！友達にって面と向かって言われたのは初めてかも」
「でも～、話合わないんじゃない？その、お金持ちの世界って良く分からないし」

突然友達になってといわれた言葉に戸惑いながらこたえた。
堅は冷静になろうと静かに綾香を見た。綾香もそんな堅を見て黙り込む。展望室に
エレベーターが到着しドアが開く、滑るように開いたドアの音が静まり返ったホー
ルに響きわたった。
（この人なんか寂しそう。私と同じ？まさか？！）

（お金持ちで何も不自由していない様なのに？）

（でも前から感じていた。この人の鋭い眼差し深い悲しみなぜかほっとけない気持
ちになる）

エレベーターのドアが誰も乗せないまま静かに閉まった。

綾香が口を開く。

「いいよ。友達になろっ」そう言って微笑んだ。

堅は平静さを保ったつもりでいたが、その言葉を聞いてゴツゴツとした堀の深い顔
は子供のように白い歯を出して微笑んだ。

思いがけない表情の変化に綾香は少し照れくさくなり俯き加減でまた昇降ボタンを
押しドアを開けた。エレベーターに乗り込むとドアを閉める前にこう言った。

「あのっ城川、あ、関村さん」

「堅でいいよ」

堅はさりげなくドアが閉まらないように外からボタンを押していた。

（返したくない。もう少しだけあと少しだけ話がしたい）

そう思うと感じた事が無いほどの切なさが堅の中で渦巻いていた。

「じゃぁ〜〜け、堅あはっ」そう言って笑う。

「えっと、あのさ。堅は笑った顔結構いいよ？なぁんかいつも怖い顔してる
からさ」

そう言って見上げた彼女の笑顔に堅は不意打ちを受けたかのよう高鳴った心が
揺さぶられた。照れくささを隠そうとぎこちなく笑う。

「え？あ・・ぁ、余計なお世話だ」

照れ笑いをしながらまた捻くれた様な事を言ってしまった自分に気が付いた。

綾香が微笑んで手を振ると堅はそっとボタンから手を離す、ドアがゆっくり閉
まって綾香の顔を隠すとそのままエレベーターは下に降りていった。

自分以外誰も居なくなった展望室で夜景を見下ろした。

黙り込んだその瞳からは何時しか寂しさが消えていた。詳しいことは何も知らな
いのに、不思議に彼女とはまた何処かで逢えそうな気がする。

「電話番号教えておけばよかったな」そう呟いてふっと笑った。

第6章　始まり

都心から離れ緑が残る街並み。閑静な住宅地から少し離れた高台に老人介護施設
【Ｇｒｅｅｎ　Ｈｏｍｅ】はあった。建物は2階建て、入居者４０人スタッフ１５人のアット
ホームな施設だ。入居者の為に少しばかり広く取られた庭には季節により緑や
花が咲き誇り小さな噴水の池もある。柔らかな春の日差しが芽吹いたばかりの
新緑に反射してキラキラと輝いていた。

真っ青な空の下で老女が車椅子に座りウトウトと居眠りをしている。

「華さん～お待たせ」
綾香は駆け寄って車椅子の老女の顔を見て話しかけた。

老女はゆっくりと目を開けた。
「あ・・あぁ・・あんまり暖かくてウトウトしてしまったわ」と皺を深くさせて笑う。
「今日は暖かいけど、風邪を引くといけないからね」

華の膝に持ってきたひざ掛けを掛ける。華はまた目を瞑りウトウトし始めたか
と思うと思い出したかの様に顔を上げて「来週の土曜日ね、孫が会いに来てくれ
るのよ」と嬉しそうに話しかけてきた。

「それは楽しみだね～」笑顔でこたえるとゆっくり車椅子を押して

歩き出す。
（華さんよっぽど嬉しいんだろうな、毎日何度も何度も同じ事言うんだもの）

ホームは楽しんで余生を送る老人も居るが、家族と過ごせるわけではないし自由
な外出も出来ない。楽しみや希望など日々過ごす中で極端に少なくこの老女のよ
うに笑顔で話しかけてくれることが嬉しかった。

「高橋さん！」

施設2階窓から同僚が叫んだ。
「コレットさんが！手が付けられないの、悪いけど来てくれる？」

華が綾香を見上げる。
「私はいいから、行っといで」
「ごめんね。華さん直ぐ戻るから」

駆け寄った同僚と交代して2階へと急いだ。

「よくまぁ～あの偏屈ばあさんに耐えてるよぉ。綾香ちゃんも」

同僚は眉を顰めると「コレットさんは。高橋さんにしか心を開いてくれなくて」
と苦々しく呟いた。

2階の部屋に駆けつける。広くない部屋は個室になっていて、介護ベッドが一つと
枕元に小さなチェスト、その上に小さなフォトフレームが1つ置い

てあり、中には
初老の男性が写った写真が入っていた。部屋の窓は開いていてカーテンが春風に揺
られベッドには体を起こし、顔を背け白髪を一つに束ねた老女が一人カーテンの隙
間から見える外を眺めていた。

「コレットさん」

綾香が近づくとようやく気配を感じて振り向く。しかめっ面で、口を一文字に結んだ
老女は綾香を見るなり顔を緩め青い瞳をキラキラさせて辛うじて聞き取れる日本語で
微笑んだ。
「アヤカ」

床には昼食にと用意された食事がトレーごと散らばっていて何が起きたかなんとなく
分かった。コレットの枕元に行きしゃがんで視線を合わせると両手を使って手話を始めた。

「コレットさんどうかしたの？」

「私を馬鹿にした。耳聴こえないから悪口言った」

コレットは興奮していて震える手で必死に訴えた。コレットの手を握ると青い目を見つめる。
「だいじょうぶだよ。ごはんダメになっちゃったね、今もってくるね」
優しく微笑みながら手話で伝えて床に散らばった食器を片付け始め

た。

４０年前フランスから日本に渡ったこの女性は両親の反対を押し切り日本人男性と
結婚。子供には恵まれなかったが、夫と幸せに暮らしていた。その後何度も両親に
理解してもらおうと、連絡を取ったが分かり合えないまま両親は他界してしまい訃報
を聞いて国に戻るが両親の残した遺産をめぐり親戚一同に追い返されてしまう。

日本国籍を取得した彼女は夫亡き今、病魔に蝕まれつつも異国の地で孤独な余生
を過ごしていた。頑なに心に壁を作り人と触れ合うこともしないコレットは、いつし
かホームでも孤立して同じ入居者にも煙たがれる存在になっていたが、献身的に介護
している綾香にだけは心を開くようになっていた。日本人にもなりきれず母国にも帰
れない。そんなコレットに綾香は心を痛めていた。せめてこのホームでは少しでも楽
しく過ごして欲しい。そんな気持ちが綾香を献身的にさせていた。

ファインダー越しに綾香を覗く一人の男が居た。ホームの向かい側に人の住まなく

なった2階建ての古い民家がある。手入れされていない敷地。土地の境界線には有刺
鉄線が張り巡らされ雑草が伸びていて「売り家」と不動産屋の看板が立ててあった。

民家の2階でカーテンの隙間からカメラのレンズを光らせ息を潜めシャッターを押す。

8畳ほどのその部屋は使い古され少し色あせた遮光カーテンから日の光が漏れて
薄明るく、舞い立つ埃が漏れた光に当たりキラキラと部屋の中に漂っていた。

無精ひげを蓄え、くたびれたシャツを着崩し煙草を吸いながら空気の悪い部屋で
男は夢中でシャッターを切った。

「しっかし、今度の女は随分地味だな」

ぼそっと呟くと男はカメラから離れ直ぐ横の壁にもたれ掛かり胡座を組んだ。畳の上
に無造作に置いていた携帯電話が鳴る。銜え煙草のまま部屋の片隅で電話の相手と話
し始めた。狭い部屋の中に電話の男の声がかすかにもれて聞こえる。

【伊倉君、順調かな?】

「これはどうも、ええもちろんですよ。女の所在は大体つかめました」と不気味に笑う。

【しかし下手な事をしてにらまれたら如何する?関村のマスコミ嫌

いは有名だぞ?!】
「なぁに心配要りませんよ、このネタがホンモノならスクープですからねぇ〜他所
では関村が怖くて手を出さないがすっぱ抜いちまえばこっちのもんですよ」

【失敗したら分かっているな?全てはフリージャーナリストの君がした事だ。私は
一切関係ない!私のことは口にしないでくれたまえよ】

少し脅えた様子で電話の男が念を押す。

「分かってますよ、その代わりスクープが取れたら高値でお願いしますよ。独占
契約ですからねぇ」そう言うと不気味にニヤリと笑った。

電話を切った後。不気味な笑みは消え何時しかぞっとするほどの鋭い眼光に変
わっていた。畳の上に散らばっている写真から堅が写った1枚を手に取る。鋭く
睨みつけると力いっぱい握りつぶした。

「待っていろよ!関村堅!おまえを叩き落してやる!」
眼光を緩めると男は床に散らばる綾香の写真に目をやる。

「ここ数週間張り込んだがいまひとつ決定打に欠けるな、もう少し様子を見るか」
そう呟くと短くなった煙草を吸殻が溢れた灰皿に押し込んで、またファインダーを
覗き始めた。

同じ時刻に都内のホテルの一室。昼間なのに部屋の窓はカーテンが閉められ、室内には灯りが付いていた。平尾が部屋の中央に置かれたソファーに腰掛け、その向かい側に座った若い女に話しかけた。

「これを預かってきました」

ガラスの丸いテーブルに厚みのある茶封筒を滑らせると若い女のほうへと差し出す。

女はソファーの背にもたれていたが、茶封筒を見るなり上半身を乗り出し勢い良く封筒を掴んだ。中身を取り出すとそこには封の切られていない札束が5つ入っていた。女はそれを見るなり無言で煙草に火をつけ平尾に向かって煙を吐いた。

「これが手切れ金って訳？」

「代表は何も申されませんでしたがそのように取って頂いて構わないかと思います」

「まぁ思ったより貰えたしぃ～。私も飽きた所だったから。もう少し面白味のある男だ

と思っていたんだけどね」女は笑いながら俯くと左手で髪を掻き分けた。

「分かったわ。これで手を打ってあげる堅にそう伝えて」

平尾は無言で頷いた。

「しかしさぁ～おたくも大変ね～ぇ天下の関村代表様の第一秘書がこんな事までさ
せられているなんて同情するわ」

皮肉タップリに言うと、顎をしゃくらせて煙を吐きながら笑った。

女が部屋を出た後平尾は無言で立ち上がり窓を覆ったカーテンを開けた。携帯電話を
取り出し電話を掛ける。

「平尾です。例の件は問題なく片付きました」

それだけ伝え終えると電話を切りゆっくりと空を見上げた。

一方オフィスで堅は電話を置くと、一昨日展望室で会った綾香を思い出していた。

（あの日から、綾香を知りたくてたまらない。今この時間彼女は何をしているの
だろう）調べようと思えば数時間後には平尾が全てを調べ上げて報告するだろう。

だがそんな事はしたくはなかった。壊したくない繊細なガラス細工のように綾香を

想っていたからだ。
（どうにかして彼女ともっと親しくなりたい）
堅は自分の地位や持っているお金では何も出来ないもどかしい気持ちを感じな
がら週末まで業務を片付けて全ての予定をキャンセルし半年ぶりに休暇を取った。

今まで仕事人間だった堅が土日休むなど会社幹部連中からしたら「最近の代表は
一体如何されてしまったのだ？」とざわめきが起こるほどだった。
休日の朝。夜が明け切る前に起きてシャワーを浴びた。どうにも興奮しているような
感覚に包まれて眠る事が出来ないで居たからだ。

（綾香に会いたい）
それだけが堅の頭を支配していた。

第7章　想い（1）

堅はシャワーを浴びてミネラルウォーターを口にすると鏡の前に立ち、自分の
体をジッと見た。忙しくても毎週プールで2キロは泳ぎジムにも通い健康管
理を怠らない、無駄な脂肪の付かないしなやかで筋肉質な体だった。
普段は服装などあまり気にしないが今日は違っていた。

（もしかしたら逢えるかもしれない）
そう思うと毎日作業的にこなしていた服選びも楽しく感じだ。

最高級のカシミアで出来たグレーのインナーはネックのVが深めに入っていて
個性的な襟があしらってある。堅の厚い胸板を覗かせる。それに洗いざら
し感のある上質の綿で出来た白に近いグレーのジャケット。パンツを合わせて
少し色の薄いブラウンが綺麗な光沢があまり出ない革靴を履いた。
身支度が
整うとリビングにある引き出しを開ける。

１０台ほどの高級車の鍵が並んでいる。鍵の上を人差し指でなぞるように迷わせる。
（今日は街の中を走ることが多いかもしれないな・・・）
その中でも比較的小回りの利くＢＭＷ　Ｍ５の鍵を手に取った。

住まいの地下には専用の駐車スペースがある。駐車場には堅以外の

人間が無
断で入れないように厳重な警備システムが備わっていた。
部屋から直通のエレベーターを使い地下に降りて車に向かった。駐車スペースに
はたくさんの高級車が持ち主が来るのをじっと待っているかのように整然と並ん
でいた。

静まり返った駐車場の壁は打ちっ放し加工が施してあるコンクリートで靴音が壁
に反響して響き渡る。目当ての車の前で立ち止まるとポケットの中から鍵を取り
出し運転席へと乗り込む。メタリックなボディと人間工学に基づきデザインされ
た車内。メリノの気品あるレザーシートが体を包み込むようにフィットした。

エンジンの音が鳴り響く（何処へ行こうか・・）車をゆっくりと発進させた。

専用の出入り口には１０ｍ間隔で2重の鉄の扉があり監視カメラが目を光らせている。

数年前、超伝導技術の開発が成功した際に他の企業スパイが家に侵入した事が
あって警戒のために取り付けたものだった。世界の歴史を塗り替えるほどの科学
技術の大きな進歩その開発に成功している堅には他の企業家よりも厳重な警備が
必要だった。街に出ると以前綾香に出会った場所へと車を走らせた。

（以前。綾香が泣きながら歩いていた場所。あそこならもしかして逢えるかもしれない）
街中でも一際輝きを放ちながら堅の車は優雅に走り抜けた。

（思えば名前以外何も知らないな。年齢も住まいも）
一瞬切なさを感じたが綾香を思うと自然に顔が緩んだ。

綾香は土日休みの交代勤務無しで働いていた。介護施設とはいえ勤めている会社
では夜間交代は男性スタッフが勤務するのが決まりのようになっているのだ。土曜
の昼過ぎ携帯電話を手にしてメールをチェックする。
（昨夜。とうとう連絡来なかったなぁ）
嫌になるほど静かな携帯電話を握り締めて功一の事を考えていた。
（あれからメールしたけど。結局連絡が無かったな）
そう思うと寂しくてたまらなかった。

（あ。メール！）
見ると功一からだった。

（功ちゃんからだ）そう思うと嬉しくなって急いでメールを見た。
Ｆｒｏｍ　功一
本文「今日夜、逢える？時間は１８時駅前で拾うから都合よかった

らメールして」

（ゴメンとか無いのかな、また一方的に時間とか決めちゃうんだ）
ふと思ったが、会えることが嬉しくて急いで返事を打ってから気分転換に本屋に行
こうと出かける支度をする。前回のような事が無いように猫に餌を多めに与えると
あの日の事を思い出した。

（あは。友達かぁ～）堅の笑顔を思い出して笑みがこぼれる。

（今思えば連絡とか全然知らないのよね。まっ、そのうち何処かで会えるかも）

ハチャメチャな事を言い出す堅を思い出すと相変わらずの彼氏とのすれ違いで疲れ
切った気持ちが安らぐのを感じていた。

膝丈のプリーツ加工のスカートを穿いて桜色のトレンチコートを羽織る。玄関を出
ると春の暖かい風が心地よく、クルリとカールしたセミロングヘアーを揺らした。
ゆっくり歩きながらマダムコレットの事を考えていた。何時だったかコレットは窓の
外を眺め寂しげに手話で語った。

「夫は優しかった。日本に来て彼の両親や親戚とうまく行かなくても何時も気遣って
くれたわ」
「夫の家族は私を見るなり。青い目をしている外国人だと、とんで

もない嫁を連れて
きたと」悲しげな目をしながらコレットは続けた。

「でも４０年間とても幸せだったわ。フランスに居る両親と分かり合えないのは悲しか
ったけれど」悲しそうな顔からほんの少し笑顔になる。

「寂しい時は歌を歌ったのよ」と楽しげに手を動かす。

綾香が優しく訊ねる「歌？どんな歌なの？」

マダムコレットは心の奥底に埋もれてしまった記憶を見ているかのように柔らかな
眼差しで手を動かした。

「ええ。母がね良く歌ってくれたのよ。私が生まれ育った町では古くから伝わる歌なの」
懐かしそうににっこり笑ったかと思うと途端に悲しそうな顔になる。

「歌いたくても、もうだめねこの耳じゃぁ何も聞こえないの」

「叶うなら。もう一度歌いたいわ・・」

彼女の耳は難聴と老化により補聴器を付けても僅かにしか聞こえなかった。自分
の声の音程すら確かめる事が出来ないのだ。そんなコレットの気持ちが痛いほど
伝わるのを感じ何と言ったら良いか分からず、彼女の手を握り締めて微笑む事しか
出来なかった。

なんとかコレットが歌を歌う術は無いか自分なりに資料や文献を探し始めた。

（私が歌を覚えたら一緒に手話で歌えるかもしれない）

フランス語の分からない綾香ではネット検索に限界があり最近では書店や図書館
に通うのが休日のコースになっていた。綾香の住まいは最寄り駅から徒歩１５分。
今日は近くの古本屋を訪ねてみようと通りに出てきたのだ。信号を渡り狭いにぎや
かな商店街へと入り込む。その直ぐ後に堅の車が通り過ぎるがすれ違ってお互い
気が付く事は無かった。書店に入るとフランス語の辞書や古い歌を題材にした文献
を探す。

（見当たらないなぁ～英語ならあるのに。）

年季が入った机に腰掛けて古ぼけた黒縁メガネを掛けた店主に訊ねる。

「あぁ～。少し前まであったんだけどねぇ学生さんが買って行ってねぇ～あ！あそ
こならあるかもなぁ、えっと・・」店主は丁寧に場所を書いた小さなメモをくれた。
その地図を見ながらバスに乗る。　思ったより車内は座席が空いていてすんなり
座れた。

【あの～最近出来たビルに入っている本屋ならその手の本の品揃えが良いと知り
合いが話していたよ】と笑顔で語る店主の言葉を思い出していた。
信号待ちでバス
が止まる。後ろのほうで高校生位の男の子達が騒いでいる。

「あれってＢＭＷのＭ５じゃね～？」
「お！すげーかっけーー」
「うぉー初めて見た！」

綾香は男の子の騒ぐ方を見た。バスの窓に張り付くように隣の車線を見ている。
片側３車線の道。バスの真横にシルバーメタリックの明らかに高そうな車のルー
フが見えた。

（そんなにすごいのかな？でも確かに高そう。車の事は良く分からないけどきっと
高級車よね）まさかその車に堅が乗っているなんて思いもせずに、
信号が変わると
シルバーの車はあっという間に加速して見えなくなった。

堅は車を走らせながら考えた。
（久しぶりのドライブも気持ちいいな。いっそ信号のジャングルから抜けてどこかに
ドライブに行こうか）

以前綾香に逢った場所を走ってみたが逢える筈も無く、諦めかけていた。

（頼んでいた時計を取りに行ってから、オフィスに寄って来週使う書類を取って
くるか）綾香に逢えない事でまた何処か仕事の事を考えていた。趣味の腕時計を
老舗の時計店に取りに行くと、オフィスのあるビルに向かう。

最近建てたばかりの３５階建てのビルは、５階まで雑居でテナントを入れそこから
３５階の最上階まで堅の所有する会社とグループ企業が使っている。最上階のオ
フィスには堅の仕事場があり、デスクワークはそこでこなしていた。
ビルの前の路
肩に車を止めると急いでロビーに入る。

オフィス専用の直通エレベーターが備わっており、警備員は堅の顔を見るなり
整列して敬礼した。１人の警備員が管理室から走り出てきて、路肩に止まっている
車の傍で警備を始める。堅は歩きながら警備員を一瞥すると右手を軽く挙げてその
まま止まる事無く通り過ぎる。ジャケットをなびかせながらエレベ

ーターに乗りオフィスに向かった。

綾香は目的地に着くとバスを降りた。春の柔らかな風にスカートを揺らしながらゆっくりと歩く。先ほど古本屋で書いてもらった地図を見ながら真新しいビルの前に辿り着いた。一面ガラス張りの入り口は歩道から中を安易に窺う事が出来た。白の磨き石がピカピカの床は立っている警備員を映し込んでいて、エレベーターがいくつか左奥にある。見るとビル入り口すぐの右側に大きな書店が入っていた。

「ここだ」

本が沢山あって、ここならあるかもとワクワクした。目的の本を探すとすぐに見つかり中を開いてみる。フランス語の説明文と日本語に訳された歌や古い歴史が載っていたが、マダムコレットの住んでいたブザンソンの歌には音符が付いていなかった。

（あぁ。これじゃぁ音が分からない。でもやっと見つけた本だし一応買っておこう）

フランス文学と辞書数冊を手に取りレジに向かう。分厚い本を買ったのでかなり重たい。

入れてもらった厚めの紙袋でさえ破けそうな気がする。重さを我慢してビルを出る
と深い紺色の制服を着た警備員が外に立っていた。
歩道に寄せて止められた車はシルバーメタリックが太陽の光を上品に反射し高級
感を漂わせている。車の直ぐ横にぴったりと張り付くように立つ警備員は眉を吊り
上げて近寄ろうとする不審者がいないか辺りを見回していた。

（あれ？あの車さっきバスで見たやつに似ているかも）
そう思いながら帰り道に体を向けると背中に衝撃が走った。

「きゃっ！」

鈍く突き当たる衝撃に思わず声が出た。手にしていた紙袋が本の重さに耐え切れ
ず紙紐の付け根から破けた。分厚い本が床に散らばる。
「あぁ！」

後ろを振り向くと怪訝そうな顔をした中年のビジネスマンが立っている。ビルから
出てきたビジネスマンとぶつかったのだ。

「ご、ごめんなさい」

ぶつかってきたのは向こうだが、ボーっとしていたのもありお互い様だと思いとっ
さに謝ると大切な本が汚れないように慌てて本を拾い始めた。ビジネスマンは本を
拾う素振りも見せないで綾香を見下ろすと自分が着ているジャケッ

トを見てあから
さまに肩の埃を払った。

「気をつけてくれよ！ったく！」

（なんですって？！）
文句を言おうとカッとなって勢い良く顔を上げて声を荒げた。

「人に！」
「人にぶつかっておいて謝る事も知らないのか？！」

（え・・？！）
声をかぶせる様に男の声がビルのロビーから聞こえた。
振り向くと3メートルほど後ろのほうから見覚えのある男が歩いてくる。

（え？堅？）

「あ！」驚いて声が上ずった。
（どうして堅がここに？）

ビジネスマンは堅を見るなり姿勢の悪い猫背を勢い良く反らせた。
蔑む様に
綾香を見ていた顔が見る見る青ざめる。
「あ！ぁあああ、もっ、申し訳ありません！！」

そう言うと堅に向かって膝に頭がくっつくんじゃないかと思うほど
深々と頭を下げた。
「謝るのは僕じゃないだろう？」
見下したような視線で男に言う。

「気をつけてくれよ、彼女は僕の大切な友人なんだ」と堅が冷たく微笑んだ。

（大切・・？）

その言葉が心に響くと先ほどまでカッとなっていた綾香の心が急に穏やかなる。

（ビジネスマンの態度が変わった。今まで意識していなかったけど堅は私の想像を遥かに超える権力を持っているんだ）ビジネスマンは訳が分からないといった風に戸惑い綾香と堅の顔を交互に見た。堅の言葉を理解したのか、綾香にくるっと向きをかえる。

「ごめっ、あ！いやっ！すまない！すみませんでした！」とパニックになりながら頭を下げた。足元に落ちていた最後の一冊を慌てて拾い付いた埃を手で払うと綾香に手渡した。それを受け取るとビジネスマンは後ろ向きでペコペコしながらエビ反りの様な姿勢で去って行った。

「最低、あんな風に人に態度変える人って好きじゃない」

そう言うと重たくてバラバラな方向に重なった本を持ち替えて堅を見た。思いがけず会えてなんだか嬉しくなる。

「ありがとう」

堅の顔は穏やかで優しい瞳をしていた。微笑むような柔らかな眼差しを一瞬逸らす
と綾香を見た。
「ふっ。誰かさんの受け売り」

「また逢えたな」
（また逢えた）
意識すらしていなかったのに何故か心が温まる気がした。

「うん」大きくうなずいてにっこり笑う。

「でも・・どうしてここに？」

「ここはオフィスがあるんだ」と微笑んだ。
（ここも。堅の会社のビルなんだ）そう思うと苦笑いした。

「重そうだな。持つよ」

「あ。平気もてるから」と微笑みまた持ち替えようと本を動かした。
本が手から滑り落ちそうになり慌てて声が出た。

「あっ！」
瞬間、頬に伝わる温もりを感じると綾香は堅の胸に顔をうずめている
とに気が付いた。温もりが包み込まれた体にゆっくり伝わると、微
かにメンズ
の物の香水のような香りがした。感じたことの無い暖かさに胸に何
か突き落と
されたような衝撃を感じて、本を渡すと急いで離れる。予測してい

なかった出来
事に戸惑いながらも平静を装った。
体が離れると堅は手渡された本を見る。
「フランス文学？意外にまじめな本読むんだな」と少しからかうように言った。

「読むよぉ私だって！もぉまたそう事言うんだ」と頬を膨らます。

「あはは。冗談だよ、ごめん」

（なんだろう？なんか私変に意識しすぎ）
普段香ってくる事の無い香水のような香りが胸いっぱいに広がっている。なんとな
く気まずい心境になり俯いて何を話そうか考えた。ほんの少しの沈
黙が続くと静か
なロビーに心地よく堅の声が響いた。

「これから予定あるの？」慌てて顔を上げる。
「あ。ううん本も買ったし重いから帰ろうかと思って」

「それなら、これからお茶でもしない？」
優しい眼差しに一瞬戸惑ったがうなずいていた。

（お茶くらいなら良いよね）

「じゃぁ　移動しようか」と言うと本を左手で持ち右手でさりげな
くエスコートされる。

「車あれだから」と目の前に止まっている車を指差す。

（これってさっきの車。堅のだったんだ）

堅が助手席のドアを開けて優しく促すとシートに腰を下ろした。気品のあるレザーが張られたシートが優しく綾香の体を包み込む。

（うぁ～凄い。高そうな車）

そう思って中をキョロキョロ見た。ウォールナット製のインテリア。最高級の素材で細部まで完璧に作り上げられた内装は綾香を別世界に居る様な気分にさせる。

（なんか、私乗ってもいいのかな？）

戸惑い考えているうちに、堅が運転席に乗り込んで車は静かに走り出した。

第7章　想い（2）

堅は静かなオフィスに入ると部屋の照明をつけて足早に自分のデスクへと
向かう。パソコンを立ち上げると書類の入ったメモリーステックを手際よく取
り出して電源を切った。きちんと片付けられた机の端っこに腰掛ける。

ブラインドを下ろした窓を見ると僅かに光が漏れて室内に入ってくる。

無意識に綾香の事を考えていた。

（逢いたい）

胸のポケットに入っている携帯電話に手を伸ばす、一瞬平尾に調べさせよう
と思ったのだ。太くて長い指先が電話に触れると思い直した様に手を取り出
した。

（いや、ダメだ！こんな事をしたら。街を出てどこかに気晴らしに出かけよう）
思い直してメモリーステックを上着のポケットに押し込むとオフィスを後にした。
エレベーターを降りると警備員がまた堅に向かって敬礼をする。それを一瞥し出
口に向かうと見覚えのある背中が一瞬目に飛び込む。

「！」

我が目を疑った。

鼓動が一気に早くなる。ビルの外側に居る彼女は降り注ぐ日差しに照らされていて透明なガラスを隔てて夢の向こう側に居るかのようにすら感じた。

あんなに逢いたかった綾香が前方に居る。声を掛けようと思った瞬間テナントオフィスのエレベーターから降りた男が勢いよく出て行き綾香にぶつかるのを見た。

（あ！）体が強張った。

堅は思わず走り出し駆け寄りたい衝動に駆られた。良く見ると怪我はしていない様だ。思い直して心の中で両足を押さえ込むと綾香を見つけてほんの数秒で心拍数が極限まで上昇した位の胸の高まりを抑えた。

深呼吸する。息を深く吸い込んでゆっくりと足を動かした。

（こんなにも緊張している自分を悟られたくない）

ゆっくりと近づくとぶつかった中年の男が綾香を怪訝そうに見ている。数メート

ル離れていた堅に聞こえるくらいの大声で怒鳴った。綾香の頬が膨らんで男を睨
んだのを見て走馬灯のように、初めて出会った日の事を思い出していた。

（彼女はきっと言うな）
綾香の口が開いた瞬間。堅も口にしていた。
「人にぶつかっておいて謝る事も知らないのか？！」
驚いた様子で綾香が堅を見た。足を踏み出すたびに心臓から血液が体内に
押し出される瞬間の音が全身に響き渡る。

綾香と目が合う。

この瞬間がビデオのスロー再生のように瞳に入ってくると何とも言えない喜びと
切なさでいっぱいになる。一歩また一歩ゆっくり近寄ると心拍数は驚くほど早く
なっていた。（逢えた。目頭が熱くなりそうになる。こんなにも僕は綾香が）

まるであの日からの1週間が1年にも2年にも長く感じた。

「また逢えたな」

態度には表さないが彼女がどんな反応をするのかまるで見えない触手が全
身から綾香に向かって伸びているような感覚に陥っていた。

綾香は大きくうなずく。
「うん」
満面の笑み。声もしぐさも、一つ一つが愛しい。
綾香の手から本が零れ落ちそうになり、とっさに綾香の手を包み込むように支えた。
必然的に距離が縮まり彼女が腕の中にいる。胸に当たる綾香の体が冷たく固くなって
いた堅の心に暖かく響いた。
抱きしめているような錯覚を振り払いながらも伝わる温もり。そしてかすかに
髪からシャンプーの匂いがした。鼓動が一層強く早く脈打ち音が聞こえないかそれが
凄く心配になる。胸の中で綾香が微かに声を出すと我に帰り本を受け取った。
少し離れて綾香は目を逸らす。治まりそうにない胸の高鳴りを意識しながらど
うしたら良いか分からなくなり手元の本に目をやった。
（フランス語？文学？？）
この状況を何とかしようと口を開く。
「フランス文学？意外にまじめな本読むんだ」
（また捻くれた言い方をしてしまったな・・）自分にイライラした。
（普段はこんな風に口にしてから後悔する事なんて無いのに綾香の前だと何故こんな
風になってしまうんだ？！）

すると綾香は頬を膨らました。
「読むよぉ私だって。またそういう事言うんだ」と堅を見上げる。
綾香の顔は少し笑顔交じりで頬が膨らんでいる。その表情が可愛くてたまら
なかった。

「あはは、冗談だよ、ゴメン」

お茶に誘うと心は躍りだすような心境だった。
（少しでも長く彼女と話していたい）
綾香を車に乗せて運転席に乗ろうと車の後ろから回りこむ。ドアに手を掛け
て深く息を吸いこみ運転席に滑り込んだ。狭い車内で思いのほか距離が近く、また
心拍数が上がるのを感じた。

第8章　安らぎ（1）

車は滑り出すように滑らかに加速する。Ｆ１直系のＶ１０大型エンジンが付いている
とは思えない静けさで車に乗っている事を忘れさせるほど体に掛かる負荷も殆ん
ど無かった。堅は優雅とも思えるほどの手つきで運転をしていて片手で軽く綾香の
顔を包み込んでしまうほどの太い指。大きな手のひらが驚くほどしなやかにギアを
操作している。

綾香は妙な緊張感に包まれていた。

（なんかこうしていると私。堅の事本当に何にも知らなかったなぁ〜）

チラッと視線だけ堅に向けた。

（私の知っている堅はまるで固い鉄の鎧を着込んでいるみたいに無表情で人を寄
せ付けないような目をしたり、そうかと思えば意地悪で凄く悲しそうな目をしたり
優しかったり）

運転している堅の横顔が無防備に見える。信号で車が止まると堅はチラリと綾香を見た。

「何処かお勧めのカフェある？」

「え、カフェ？ん～」
（スターバックスとかドトールとか。考えてみるとここだ！って思い当たる場所が
無いなぁ。お洒落なカフェなんてあんまり行った事ないし）
「お洒落なカフェとか良く知らなくて、堅が何時も行く所は？」
「カフェってそう言やぁもう7、8年行ってないな」
「え～？珈琲とか何時も何処で飲んでいるの？」
「いつもはオフィスで専用の給仕が入れてくれるし、あとは食事の時にシェフが入れ
てくれるから」
「あは。そっ、そうなんだ」
（シェフってオフィスに専属給仕ってうぁースターバックスとか言わなくて良かった～
珈琲一つでレベル高すぎ～）と苦笑いした。モヤモヤ考えていると仕事の昼休みで
天気の良い日にお弁当を食べる丘を思い出し車内のフロントガラスから空を見上げる。
（今日は雲があるけど青空も覗いているし）
「ねぇ。じゃぁ～さ、少し離れた場所だけど」
緑が多く残る狭い道幅の住宅街を登ると突然開けた景色が広がった。
堅の車を停めた空き地から「Ｇｒｅｅｎ　Ｈｏｍｅ」が少し離れた

場所に見える。

「あそこに勤めているの」と車から降りると指差して話しかけた。

「何かの施設？」堅は車のドアを手元の操作ボタンでロックしながら訊ねた。

綾香の隣に立つと、その場所から見える「Ｇｒｅｅｎ　Ｈｏｍｅ」を見る。

「お年寄りがね、余生を送る場所なの」

と呟くと春風がカールした髪とスカートを揺らす。ふと、マダムコレットの事を考

えた。視線を感じて堅のほうを見上げると堅がこちらを見ている。日差しに照らさ

れ陰った目元が優しげで戸惑った。

「こっち。いい場所があるの」

空き地から今上ってきた狭い道路を挟んで向かい側に、高さ１．５ｍほどのヨーロ

ッパ調の白い柵で囲われた公園のような場所がある。足元に柔らかい芝生が敷き

詰められ歩く場所に敷いてあるレンガタイルが中に続いていた。

入り口はバラの木が植えてあり、まだ花の時期ではなかったが葉が茂り綺麗なル

ープを描いて二人を春の直射日光から優しく守るように招き入れた。

堅がその大きな体を少しか屈ませて入った狭い入り口からは想像できないほど中

には花や緑が咲き誇っている。中央には白く塗られた木製のテーブルと長イスが

置いてあった。白い外側の柵に絡むようにツル科の植物が覆い、綺麗な緑の垣根
のようになっている。イスに腰掛けると頭上に藤の棚が掛かっている
るのに気がつい
た。日差しが藤の木の隙間から零れ落ちてテーブルの周りを優しく
照らす。キラキ
ラと白いテーブルに反射して心地よい風が緑や花の香りを纏いながら二人の間をす
り抜けた。

「良い場所だね」辺りを見回しながら一緒に長イスに座る。
「でしょ？」緑に反射した柔らかな日差しで照らされた綾香が笑顔で返事をした。

「ここね。前にホームに入居していた方の娘さんが手入れしているの」

「近所の人に開放してくれているんだよ」
黄色い小さな花が群れて咲く場所を見つめて微笑む。

微かに芝生を踏みしめる足音が聞こえると緑の柵が入り組んでいる奥のほうから
一人の女性が現れた。年は５０歳～６０歳くらいで小太りの中年女性。髪は金色で
白髪が混じり白人のハーフの様に感じた。薄いブラウンの瞳にチャーミングなそばか
す。一瞬女性は驚いた様子だったが堅の体に隠れていた綾香を見つけると満面の
笑みを浮かべる。
「あら～アヤカ。今日はお休み？」と流暢な日本語で話しかけた。

「蓉子(ようこ)さんこんにちは」
堅が見たことも無いような無防備な笑顔で挨拶をした。堅も軽く蓉子に向かって会
釈をする。蓉子はにっこり笑って堅を見るとゆっくりした足取りで
二人の目の前のイ
スに腰掛けた。

「めずらしいこと、アヤカが男性をここに連れてくるなんてボーイフレンド？」
と柔らかな口調で声を弾ませた。
綾香は堅の顔をチラッと見る（やだ。蓉子さん誤解しているかも）
何故か恥ずかしくてたまらなかった。

「蓉子さん。お友達の堅よ」微笑んで言う。

「こんにちは」とぎこちなく挨拶をする。

「こんにちは。アヤカにはとてもお世話になっているの」
にっこり笑うと春風が蓉子の白髪を揺らした。

「父が生きていた時に本当に親身になってくれて、娘みたいに思っているのよ」
「うれしいわぁ、ここにボーイフレンドを連れて来てくれるなんて」
と笑顔で返した。
綾香は蓉子の口を閉ざすように慌てて名前を呼んだ。
「よっ、蓉子さんっ！」蓉子はほんの少しにやけた顔で綾香を見て

いる。

（蓉子さん。やっぱり誤解してるよぉ）

「おほほほ。分かったわアヤカ。ボーイフレンドね」
少し意地悪に微笑んだかと思うと思い出したように綾香に訊ねた。

「ところでアヤカ。コレットの体調はいかが？」それを聞いて綾香は少し寂しそうに
蓉子の顔を見た。
「うん、あまりね・・・よくないの」

「そう・・」

蓉子は父親が施設にいた頃。コレットと何度か話をしたこともあり気に掛けている様
子だった。沈んだ顔を上げると堅を見て「あら。私ったら肝心のお茶がないわね」
と、ふくよかな顔でにっこり笑う。イスから立ち上がり「まっていてね」さっき出てき
た通路のほうへと消えていった。
堅は訳が分からないと言った風に瞳を大きく開いて綾香の顔を見る。

「あ、ごめんね。堅になら話してもいいかな」
「あの施設にね・・」とコレットの事を話した。

「そうか。じゃぁさっきの本はそのために？」

「うん。やっと見つけたんだけど肝心の音符が付いていなくて」
とちょっと残念そうに笑う。

「でも。もう耳が聞こえないなら、手話でもだめなんじゃ？」
「あは、うん。そうかもしれない」と少し寂しそうに目を伏せた。
「コレットさん癌なんだ。進行は遅いんだけど、体力が無いから手術も
出来ないの。担当医は老衰か、癌かどちらかが死因になってもおかしくないって
・・もうね、あまり・・彼女には時間が無いの・・」
一瞬強く吹きつけた風が綾香の髪をなびかせる。
「同僚も同じ事言っていたの。確かにその通りだと思う。手話じゃ音は伝わらない
もの」そういうと寂しそうな顔をして堅を見た。
「でも諦めたくないんだ。少しでも可能性があるならそれでもし、コレットさんが安ら
ぐ事が出来るならそれに賭けてみたいの」
堅の瞳が優しく綾香を見つめると堅から視線を逸らし頭上の藤棚を見上げた。
「あは。私ってホント３２にもなって無駄に一生懸命だったり、いつも迷いっぱなしで
だから嫁の貰い手も無いのかなぁ～あはは」
「堅はすごいね。私とそんなに年変わらないのに全然違うもん。きっと堅から見たら
私のしている事って無駄にしか見えないよね」と少し寂しそうに微笑んだ。

「いや。そう言う優しさって有ってもいいんじゃないかな」

「優しいのかな？自分が安心したいだけなのかも・・目の前で孤独なまま人生を終わらせてほしくないって。私の偽善なのかも・・・」

そう言う綾香の瞳が潤んで見えた。

「あは。ダメだね私って」と笑うとまた堅の顔を見た。堅の彫りの深い顔は木漏れ日に当たってその目を陰らせていたがその奥から覗く瞳は、春の柔らかな風が綾香を包み込むかの様に見つめていた。

その瞳があまりのも優しげで、さきほど堅の腕の中で感じた衝撃を思い出した。

（やだ、なんだか今日の私変。きっと蓉子さんがあんな風に言うからだわ）

そう思うとちょっと頬を膨らませた。風が緑を撫でると葉が擦れ合う音と新緑の微かな香りがゆっくりと二人の間を通り過ぎる。

（堅。なんだか無口）

「おまたせ」

奥から華やかな声が聞こえた。蓉子がティーセットを運んでくる。木製のトレイの上でティーカップとセットになっている銀のスプーンがカチャカチャと音を立てている。

綾香は立ち上がり蓉子を手伝ってテーブルに本格的なティーセットを並べた。

「わぁ～スコーンまである～、ありがとう蓉子さん」

「蓉子さんの焼いたスコーンはその辺のお店でも食べられないくらい美味しいのよ」
「そうなんだ。有難うございます」と堅はぎこちなく蓉子にお礼を言った。

「おほほほ。アヤカのボーイフレンドですもの取っておきの紅茶を入れたのよ」
とゆっくり笑顔でこたえた。

「だからぁ、蓉子さんお友達なの！」と慌てた様子で頬を膨らまし蓉子に訂正を入れる。

「あらぁ～オトモダチね！分かったわ」綾香に意地悪そうにウィンクする。

蓉子の態度に恥ずかしくなって堅の顔を見られないで居た。

「ゆっくりしていって頂戴ね」にこやかに笑うと先ほど出てきたほうへと帰っていった。

再び二人きりになった公園で綾香はティーポットからカップにお茶を注ぐ。
「蓉子さんね、イギリス人のハーフで紅茶には凄くこだわっているんだ」
と語り紅茶を注いだカップを堅の目の前に置いた。華やかな紅茶の香りが漂う。

「ありがとう」ぎこちなく微笑むと紅茶を口に含み、驚いた様子でカップから口を離す。
「う、旨い」と呟いて綾香を見た」

「でしょ？すごく美味しいの、蓉子さんの紅茶」なんとなく恥ずかしさも消え打ち解けた気がして二人は微笑んだ。

第8章　安らぎ（2）

車を走らせると緊張で綾香のほうを見られず運転に集中する振りをして平静を装
った。閉ざされた空間の中でほんの少し手を伸ばせば触れ合える距離、綾香から
漂う香水でもない彼女自身の柔らかな香りが緊張を一層高めた。
緑の丘に着くと春風に揺れる綾香の髪がとても綺麗に輝いて見え一瞬ドキッとした。

「こっち。いい場所があるんだ」

案内された公園は緑がとても綺麗で普段整然と並ぶ高級家具やオフィスのデスク
に囲まれて生活している堅は新鮮で懐かしい感覚に包まれていくのを感じた。

（なんだ？この感じ。こんなに緑に囲まれる事なんて、ずっと昔母さんが庭いじり
していた時以来だな）母はガーデニングが趣味で、使用人にも触らせないほど庭に
はこだわりを持っていたものだった。

（不思議だな。安らぐ）

「いい場所だね」

「でしょ？」

と少し得意げに笑顔で話す綾香が可愛らしく花を見つめている彼女の顔に木漏れ
日が当たってキラキラと輝いて見える。綾香に逢えるかもしれないと街を車で走っ
ていた、逢いたくて切なくてさきほどの心境と無意識に今の状況を比較してしまう。
（こんなに近くに綾香が居る）
そう思うと（こんな気持ちを悟られたくない）とどこかで平静を装う。

顔には出さないが、幸せな気持ちでいっぱいになった。

蓉子が現れて二人を恋人同士のように言いお茶を振舞ってくれた。
堅は少しぎこ
ちなく挨拶するたびに不思議な気持ちになった。

（こんな風にお礼を言ったり、挨拶する事なんて無かったな）
蓉子に冷やかされて堅は心の中で照れくさくも（周りから見たら恋人同士に見えて
いるんだな）そう思うと嬉しくてたまらなくなった。コレットの話しをする時綾香
が悲しげでたまらなく切なくなる。そんな彼女に自分が何か出来ないか堅は考えていた。
蓉子が去ると綾香は目を合わせてくれなくなる。

（もしかして、さっきあんな風に冷やかされた事不愉快だったのかな・・）

そう思うとなんだか不安になった。立場上。誰かの顔色を窺う事も無く堅の発言は

絶対的な効力を持っている。告げたり計算したりして人を動かし仕事をしてきた。
誰かの心の動きをこれほどまでに敏感に感じ取ろうとする事など今までに無かった。

綾香が注いでくれたお茶を口に運ぶ、紅茶はあんまり飲まなかったが母親が
好きだった事を思い出して口に含んだ。

（母さんに付き合わされて、良く飲んでいたけど渋くてあまり美味しいと思った事
ないな）その味は想像していたのと全然違う。深くて渋みの無い茶葉の香りが口に
広がった。

「う、旨い」思わず口にする。

「でしょ？凄く美味しいの、蓉子さんの紅茶」と綾香が微笑んだ。
堅も綾香を見て自分でも不思議なくらい自然に微笑んでいた。
そよ風に髪を揺らした綾香が呟く。
「凄く贅沢なカフェね」

その瞬間。春風が堅の閉ざされた心の中に強く吹き抜けるような感じがした。

（・・なんだ？この気持ち）

堅はティーカップに注がれた紅茶を見つめた。

（僕は、巨万の富と何一つ不自由の無い生活を生まれた時から送っ

てきた。この
環境も当たり前であって贅沢だとか不自由なんて感じた事すらなかった・・・）

（成長して大人になり事業が成功し、がむしゃらに実績で親父を追い越して、思う
ままに過ごす日常、手に入らないものなど何一つない筈だったのに）

（何処か物足りなさを感じていた。もっと高い場所に上り詰める事なのか？それと
も世界中でもっとも価値のある物を色々集めて、人々に自慢する事なのか？その足
りない物が何なのか、ずっと考えてきた。でもそれは・・・）

堅は静かに綾香を見た。彼女の一言でなんとなく分かった気がした。

（僕は全てを手に入れて、全て知り尽くした気持ちでいたのに。何も分かっちゃ居な
かったのかもしれない。僕に足りないものが何なのかを・・・）

綾香は功一の事で孤独や不安な事ばかり考えていた自分がこんなにも安らいで
いる事に喜びを感じていた。

（こんなにいいお天気で、お茶も美味しくて幸せ）
美味しい紅茶を飲みながら「ふふっ」と笑いがこみ上げた。

「どうかした？」

くすぐったくてさらに笑顔になった。
「あは、あのね良く考えたらさ。今日と言いこの前と言い、待ち合わせした訳じゃない
のに良く堅と逢うなぁってそう思ったらなんだか可笑しくて」
「そうだな、そう言えば」
言い終わらないうちにくすぐったくなって笑い混じりでこたえた。

「凄い確立じゃない？この広い東京でさ」と顔をくしゃくしゃにして笑った。
「あ、アレかな？偶然に生活で行動する場所が少しかぶっているとか？」

「そうだとしたら。不思議よね～堅とは生活環境がまるで違うのに」と藤棚を見上げていたかと思うと、瞳をキラキラさせて堅を見た。

（確かに凄い確立だな。逢いたいと思うと逢えてしまう）現実主義で効率や利益優
先の自分がこんな風に綾香と出会い話している事が不思議だと思った。

その後二人は話題が尽きる事無く話をした。綾香の事が色々分かって距離が近く
なり以前とは比べ物にならないほど親しくなれた気がして嬉しかった。
ふと風が冷たくなってきたのを感じて時計を見た。
（もう夕方かあれから2時間以上話をしていたのかあっと言う間だな）

藤棚の隙間から空を見上げると雲行きが怪しくなっている。話に夢中になっている

綾香の肩にさりげなく脱いだジャケットを掛けた。
綾香は驚いた様子で見たが直ぐに笑顔になる。
「ありがとう」

（この服。堅の香りがする）
脱いだばかりのジャケットからは、まだ暖かい堅の温もりと微かにいい香りがした。

「この後。予定ないなら食事でもどう？」
綾香は少し戸惑った様子で。
「あ　ごめんね、ちょっと予定があって」
聞いてはいけないと思いながらも頭の中を過ぎった嫌な想像を口にしていた。
「彼氏とデートか」
からかう様に口にして綾香の反応を窺ってしまう。
「あはは」照れくさそうに笑うと黙り込んでしまった。

（否定しないんだな）
無性に切なくてたまらなくなると、そんな気持ちを断ち切るように立ち上がり言った。

「じゃぁ。そろそろ送るよ」

綾香も立ち上がりテーブルの上を片付ける。
「蓉子さんに挨拶してくるね」と微笑み柵の入り組んだ公園の奥へと走っていった。
綾香の背中を見てまた切なくなる。そんな気持ちを知られたくなくて必死だった。

第9章　距離（1）

車を走らせ帰路につくとフロントガラスに雨がポツポツと当たって弾けた。

「あ・・雨だぁ」助手席の窓を見て綾香が呟く。

「降って来たな」

（この後、綾香は男と会ってどんな時間をすごすのだろう）心の中に湧き
上がる不安。全身が冷たく硬くなる様な行き場の無い自分の気持ちを押さ
え込んだ。

（いっそ、何もかも壊してしましたい。嫌われてもいい力ずくで彼女を手に入
れてしまおうか？）そんな事考えて堅は綾香を見た。これから会える事を楽し
みにしている様子を見るとそんな風に考えてしまった自分に罪悪感を覚える。

（車を停めたくない。停めたら綾香は・・）ふと何か振動する音が聞こえた。
耳を澄ませると綾香のバックから聞こえているようだった。

「電話じゃない？」

気がつかない様子の綾香に言う。慌てた様子でバックから携帯電話を取り出す

綾香は着信を見て一瞬ためらった様子だった。

「出なくていいの？」

「今車の中だし。後でいいよ」

なんとなく落ち着かない様子でこたえる彼女を見て。

「いいよ。気にしなくて」と無理に笑う。

「ごめんね、ちょっと電話に出るね」急いで携帯を耳に当てた。

【もしもし、お疲れ～】狭い車内で男の声がもれて聞こえた。

胸が締め付けられる気持ちだった。ハンドルを持つ手に無意識に力が入る。

「お疲れ様」

【あのさ～】

「え？」

【急な仕事が入って、ちょっといけそうに無いんだ】

綾香は少し沈黙すると「そっか」と泣きそうな顔。

【会社の部下がな。どうしようもない仕事取ってきてさこれから頭下げて断りに行かないと、今日は遅くなりそうだし】

「うん・・・大変だね。頑張って」

微かに震える声で笑うと電話を切った。折りたたみ式のピンクの携帯電話を閉じる

とすぐさま助手席の窓を見た。堅はどこかでホッとしてハンドルを握りなおした。

気がつくと綾香が窓を見たまま不自然な格好でこちらに背を向けていた。

綾香が今どんな表情をしているのかと想像したら、ホッとしていた自分が恥ずかしくなった。（涙を堪えているのか？）その背中が寂しそうで顔を背けた綾香を思うと車を停めて引き寄せたくなる。何と言ったらいいのか言葉が見つからなかった。

気がつかない振りをしながら運転を続けた。

綾香は少しするとゆっくりと体制を戻して笑う。

「あは。またドタキャン」

その顔は悲しげで無理をしているのが痛いほど伝わってきた。

「彼氏。仕事忙しいの？」

「うん。小さい会社だけど社長さんだし、色々大変みたい」

膝の上に置いた携帯電話を両手で握り締めて言った。

「仕方ないの、仕事だしね。土日も殆んど休まずに働いているみたい」

「会社経営って私には分からない苦労も有るだろうし、逆に体が心配なくらい」

ぎこちなく笑った瞳が潤んで見えた。堅は何と言ったら良いのか分からないまま

「そうだな」と呟くように言った。

雨が強まる。フロントガラスに叩きつけるように降りしきる雨にワイパーが忙しそうに動いている。規則正しく動くワイパーをじっと見つめて綾香は黙り込んだ。何か言葉を掛けようと必死に考えを巡らせたが、綾香の気持ちを推し量ると軽々しい事は言えないと思った。

「あのさ、よかったら飯でも食べて帰らない？」

続く沈黙、落ち込んだ様子の綾香が心配で声を掛けた。綾香は少し黙る。

「・・・うん」雨音にかき消されそうな声で答えた。

「どっ何処で食べようか？あ、良く行くフレンチの美味しい店があるんだ」

不自然なほど明るく振舞うと、綾香の視線を横顔に感じる。妙に緊張している自分を必死に隠そうと運転に集中した。

「ごめんね・・・」

その言葉にチラリと見ると綾香は一瞬泣きそうな顔をしてすぐに微笑んだ。

「空気重いよね～～。あはは。なんだか気使わせちゃってごめんね」

健気に笑う彼女を見て愛おしくてたまらなくなった。

「ん？あぁ何？そんな事気にしていたのか？」わざと気がつかない振りをした。

「それじゃぁ。何処行こうか」

と訊ねると泣きそうな顔が少し和らいで見えた。人差し指を唇に当てて少し考え

込み何か思いついたように微笑む。

「じゃぁ〜。堅が行った事の無い美味しいお店行こう！」と笑った。

（ん？美味しい？僕が行った事がない？面白そうだな）

世界中の有名な高級店を渡り歩く堅はその言葉を聞いてワクワクする気持ちを感

じながら笑顔で返した。

「じゃぁ。道案内よろしく」

第9章　距離（2）

車が大通りから少し道幅の狭い通りに入り込むと綾香は瞳を輝かせて一軒
の店を指差した。

「あ、ここ！」

店の前を通り過ぎてから車を路肩に寄せてゆっくりと停め、助手席側の後部に
身を乗り出して「あの店？」と間口が狭くて薄汚れた暖簾の掛かるラーメン屋
を見た。

綾香は振り向いて「うんうん」と満面の笑み。

堅は言葉を無くした。

（ラーメン？嫌いじゃないが上海の中華料理店でしか食べた事無いぞ？！そ
れになんだかこの店、古くて汚れているし大丈夫なのか？）
「あ～～！ラーメン屋だって馬鹿にしているんでしょぉお」
「ここはぁ！本当に美味しいんだからっ」
と、得意気に白くて柔らかそうな頬をパンパンに膨らませた。さっきまでの沈ん
だ顔が嘘のようにその顔があまりにも可愛らしく思わず笑いがこみ上げる。

（今まで、女を食事に誘うとフレンチなんて言ったら飛びつくよう

について来たのに）
「ぷっ！」
「あははは。面白いなぁ～ホント最高だよ」堪えきれずに大笑いした。
「もおぉ～～っ！やっぱ馬鹿にしてるぅ。食べたら分かるってば！」と自信満々。
そんな綾香が愛おしくてたまらなかった。
「あはは・・・」ふと顔の距離が凄く近い事に気がついた。僅か２０ｃｍくらいの距離、堅の鼓動が一気に早くなる。
（このままキスをしてしまおうか）
堅の顔がいきなり真顔になったのに気がつくと綾香が堅の顔を見た。
ほんの数秒間見つめあう。
激しく降りしきる雨音を一瞬忘れてしまうほど綾香の表情が余りにも無防備すぎて、どうしたの？と言った感じでじっと見詰めてくる。このまま唇を重ねるのは簡単だったがその顔を見てそんな風に考えている自分に罪悪感が襲う。
綾香はそんな気持ちに気がつかない様子でバックを取り降りる準備をした。
「雨すっごいね～」
フロントガラスを覗き込むように薄暗い空を見上げると思いついたようにバックから

何か取り出す。
「まってね」ニッコリ微笑むとドアを開けて勢い良く車を降りた。
「え？おい！」呼び止めたが遮るようにドアが閉まる。
降りしきる雨の中飛びだした綾香が心配で外に出ようと運転席のドアを開け驚いた。
「え？」
目の前に折り畳み傘をさして得意げに立っている綾香が居た。堅の顔を見るなり
「あは。折り畳み傘持ってきて良かったぁ～」と笑う。
堅は車から降りるとドアを閉めた。肩が濡れているのもかまわずに良く見ると堅が濡れないように必死に背伸びして傘をさしている。
「堅、背が高い事忘れてたっ」と笑っていた。
堅が傘の柄を持つと小指と綾香の人差し指が触れた。その瞬間心臓の鼓動が全身
を揺らす。綾香の指が傘から離れると傘を綾香に引き戻し小さな傘に二人で入った。
車から店まで１０メートルほどの距離。
雨脚が強いこんな日は傘をささず全力疾走してもびしょ濡れになりそうだった。
小さな傘に肩を重なり合わせるように二人で入る。肩が触れ合い堅は緊張した。店

の前に着くと軒下に入り傘を閉じた。右側に立つ綾香を先に店に入れようと左手でガラス戸に手を掛けた。建物は使い古されその戸を走らせているレールが磨耗していて指先を掛けて引くとカラカラと軽い音をたてて拍子抜けするほど簡単に開いた。

綾香は堅を見てにっこり微笑む。

「ありがとう」

照れくさくも傍に居られる事に喜びを感じていた。暖簾をくぐり店内に入ると傘を店の入り口にある傘立てに差し込んで綾香の後に続いた。厨房から伝わる熱気と麺を茹でる大きな鍋から蒸発した水分が入り混じり不快なほど湿度が高く感じる。思ったよりも狭い店内は厨房を挟んでカウンターがあって、１０客ほどのイスと後ろに通路があり2人くらいが座れるテーブルが４つ並んでいた。

薄汚れた壁紙と色あせたビールのポスター。狭い店内は客で混雑していた。

厨房から身を乗り出すように店主と思しき男性が

「へい！いらっしゃい～」と、威勢よく叫ぶ。

綾香を見ると中華なべを手際よく振りながらゴツゴツした顔を緩ませる。

「おお！綾香ちゃんじゃないか久しぶりだなぁ。元気にしてたか？」

「おっちゃん。こんばんは～元気だよ。お客さん連れてきたの～」
とまた無防備に笑う。

（綾香は人に好かれているんだな）と少し嬉しくもなんとなく寂しい気持ちになる。
（僕はこんな風に誰かに好かれて居るなんて実感した事もなかったし、必要性
すら感じた事は無かった）

「お～～い。綾香ちゃんがきたぞ」
奥から調理服の上にエプロンをつけた。中年で恰幅の良い女性が現れて
「おやぁ～綾香ちゃん。久しぶりじゃないのぉ～元気にしてた？」
堅を見るとにんまり
笑った。
「あら、恋人連れてきてくれたの？座って座って」
「おばちゃんっ！お友達なんだってば」
カウンターの中央に丁度２客のイスが空いていて二人は狭いスペースに詰め込まれるよ
うに座るとまた距離が一段と近くなり肩と肩が触れ合った。
堅は熱気や古ぼけた店の内装の事はどうでも良くなっていた。
「何にしようかぁ～堅は何食べる？」メニューを見ながら語りかける。
「何がお勧めなの？」綾香の横顔を見て言った。
「えっとね、鳥だし中華美味しいよ」微笑んで堅のほうを見た。

顔がくっつきそうになるほど近い距離だった。ドキドキする気持ちを悟られまいと平
静を装って返事をした。

「じゃぁそれにしようか」

「私も同じのにしようかな」

と言ったのを聞いて二人を覗き込むように見ていた店主に注文する。
綾香はまる
で警戒心のかけらも無く堅を全く意識していないようだった。

（こんなに近くに居るのに彼女は僕の事。意識すらしていないのかな）
そんな子供が拗ねたような事を考えている自分を一瞬冷静に見てしまう。

（僕は何を考えているんだ?！こんな風に考えるなんて）
そう思うとまた切なくなった。

第１０章　決壊（１）

「鳥だしお待ち！」

カウンターにラーメンが運ばれてきた。堅はゆっくり割り箸を割ると覚悟した
様に口にしてみる。

（ん？なんだ？以外にいや、うまい！）

横から食い入る様に見つめていた綾香は堅がラーメンを口にして顔が緩んだのを
見てからホッとして食べ始めた。

「うまいな」

「うんうん」

（何だろう。上海で食べているラーメンとは違うけど確かにうまい）
癖になりそうな味だった。

「おっちゃんはね。中国の人で香港の有名なお店で料理長していたの」

「そうなんですか」

厨房がひと段落した店主が白い布巾で手を拭きながらこたえた。
「ええ。うちのが病気しましてねぇ治療の為に家内の地元に帰ってきてそのまま

ついてしまったんですよ」
隣で食器を洗っていた奥さんが豪快に笑った。
「今ではすっかりこの人も東京の人間ですよぉ」
「いや～。よっぽど故郷の水が合うらしくてすっかり良くなりましてねぇプクプク
と太ってからに、厨房が狭くてね～」と笑う。
「おっちゃんが病気の奥さんの為に考えた料理いっぱい作ってあげたんだもん」
と笑顔で話す。
「あはは。まぁ一応な」と照れくさそうに笑う。
「そんな、いいもんじゃないわよぉ」と奥さんが照れた。
「おっちゃんの作るご飯は愛情の味がするよ」と笑った。
そんな綾香を見て堅は心が温まるのを感じた。

激しい雨が降り続く中、車は綾香の家へと向かっていた。助手席に乗った綾香は
ラーメンを食べる前の泣きそうな顔が嘘のように可愛らしく笑い。
「ラーメン美味しかったね」と堅を見た。

「そうだな、確かにうまかった」と降参したように笑った。
店でのやり取りを思い出していた。
食事が終わり清算する時の事だ。綾香が当たり前のようにレジにお金を出す。今ま
で女性と食事する時は自分が払うのが当然と思っていたし女性達の態度もそれが
常識と言った風だった。
眉を顰める堅に「ワリカンでしょ？」と不思議そうに言う。
「いいよ。誘ったのは僕だし」
「え～いいよぉ」
遠慮している風ではなくそれが当たり前と言った極自然な態度。
（たかがラーメンでそんなにきっちりしなくても）
そんなやり取りを見ていた店の奥さんが
「ご馳走になっとけば？彼氏に払ってもらうもんでしょぉ～」と言
ったのに。
「え？堅は友達だもん」とにっこり笑った。
【友達】と念を押したかのように口にする綾香の言葉を聞いて今日
一日すごく
近くなれて嬉しかった気持ちに冷や水を掛けられた気持ちになった。

（それが彼女のいい所でもあるんだが。しかし、たとえ友達感情を差し引いたとしても、僕は関村グループの社長で彼女の何十倍も何百倍も収入があって、それを知っていたら普通は自分から払おうなんて思わないんじゃないか？）

車に戻る途中、店の軒下でまだ戸惑う堅。

（友達。確かにそうだけどそんなに僕は距離を置かれているのか）

そう思うと寂しくてたまらなかった。

「どうしたの？」

綾香が顔を覗き込むように聞いてきた。

「いや、なんでもない」

「もしかしてさっきの事気にしてる？」

「いや。別に」

「私ね、自分よりお金持ちだからって理由無しにご馳走してもらうのとか嫌なんだ。

そういうのって、なんか友達として違うと思うし」

堅は黙って綾香の横顔を見た。

「何て言うかさ、うまく言えないけど堅は大事な友達だからそういうのは嫌なんだ。

あは。へんな言い方でごめんね～」

その言葉を聞いて手に持った傘を握り締めると自分でも理解できな

い言葉を口に
していた。

「それなら、僕が関村グループの社長じゃなくても、友達になっていた？」

綾香はキョトンとした顔をしたかと思うと大笑いした。

「あはは。変な事聞くね」

「友達になるのに相手の社会的立場がどうとかで判断するのは可笑しいよ」

「じゃぁ～何で僕と友達になってくれたの？」と捻くれて笑った。

（僕は何を言っているんだ）

怖かったのかもしれない。本当は彼女になんて思われているのかが、自分の口を押
さえることが出来ずに困惑していた。

綾香が少し沈黙した後に一瞬俯くと堅のわき腹に衝撃が走った。

「うっ！」

痛くは無かったが意表を突かれて声が出た。見ると綾香が右手を握り締めてわき
腹を突いていた。すぐさま見上げて頬を膨らませてこう言った。

「そんな事言う堅好きじゃない！私は友達になりたいと思ったから
友達になったの！」

少し睨んだかと思うと瞳をくりくりさせた。

「じゃぁ、堅はどうして私と友達になりたいって思ったの？」

そう言われて初めて綾香に逢った日の事や展望室で感じたあの気持ちを思い出し
ていた。（最初は気になって興味があって。そして気が付いたらどうしようもな
いほど好きになっていた）そんな事を口にできるはずも無く。

「友達になりたいと思ったから」

「でしょ？友達になるのに立場とか関係ないんだよ」とにっこり微笑む。

ハンドルを握りながら考えていた（今日は行く先々でいろんな人に彼女が好かれて
いると思った。【友達】分かっていたつもりなのに。彼女のあの言葉を聞いてなぜ
人から好かれているか分かった気がする）

胸に溢れ出す綾香への想いは勢いを増し全身を包み込んでいく。

（どんどん好きになる。彼女を知れば知るほど。今この気持ちを伝えたら僕から離れ
ていってしまうだろう。たとえ友達に向けられた笑顔だとしてもこの笑顔を失うくらい
なら友達に徹しよう）心に溢れる想いを封じ込めるように自分に思い聞かせた。

綾香がフロントガラスに当たりはじける激しい雨を見ながら圧倒されたように笑った。

「すごいね～全然弱まらないよ。この雨」

そう言って堅を見た綾香と一瞬目が合う。大きな瞳を見るとたった今、封じこめた筈
の気持ちが揺らぐのを感じた。
「そうだな」

すれ違う車のライトが薄暗い車内を一瞬明るくする。その光が堅の大きな瞳を照らし
して潤んで見えた。
（さっきの堅、なんだか変だった。どうしてあんな事聞いたのかな？堅はすごいお金持
ちで私はメチャメチャ庶民で。そんな事当たり前で別になんとも思わなくて）

（確かにすごい車に乗っているし、関村グループの社長って知るとあんなにも態度変
える人居るし、さりげなく凄く高いもの身に付けているし。今日一日で堅が凄い人だ
なって分かったけど）

（【友達になりたかったから】それはそうだけど、どうして堅みたいな人が私と友達に
なりたいなんて思ったのかな？）
お茶を飲みながら今日二人で話した事を思い出した。
（ご両親も亡くなっていて兄弟も居ないって言っていた。もし堅の権力が凄すぎて
今日のビジネスマンみたいな人しか周りに居ないとしたら？）

（最初から気になっていた。時々悲しくて凄くさびしそうな目をしていた事。そして鋭く
て突き刺さるような冷たい眼差し。こんなに恵まれて成功している
人なのに?!でも、でも・・・もしかしたら本当は、凄く孤独な人
なのかもしれない）

そんな風に思ってしまう自分に綾香は戸惑いを感じていた。

第１０章　決壊（２）

大きな交差点を過ぎた所で綾香はハッと我に帰る。

「あ！今のところ！ごめんなさい。間違えたみたい」

（ボーっと考えていたら間違っちゃったよぉ）

自宅に送ってもらうのに綾香は道案内をしていたのだ。

堅はブレーキをゆっくり踏みウィンカーを点けて路肩に寄せる。

「ごめんね」申し訳なく思い堅を見た。

「いいよ、気にするな。迂回して戻ろうか」

「さっきの道から左だったの」後部座席の窓のほうに体を傾けて指差すと堅も同じ方向を見た。

「あの信号から？」

そう訊ねると綾香は後ろを見たまま何かを見つけたように歩道を行き交う人をじっと見ていた。

「どうした？」

少しして綾香は態勢を戻す。その顔は強ばって唇が微かに震えていた。シートベルトを強く握り締め、何かを覚悟したかのように外すと顔を向ける事

無く呟いた。

「堅ごめん。ここでいいよ、ありがとう」

声は明るく聞こえたが確かに震えていた。

声を掛ける暇も無く綾香は車から飛び降りて勢い良くドアを閉め、
さっき見ていた方
向に走って行った。

これ以上、堅に迷惑を掛けたくなかった。取り乱すかもしれない姿を見られたくなかった。
バックから携帯電話を取りだした。
【謝りにいかなきゃ遅くなるから】功一の言葉を思い出す。
（もし早とちりなら今、電話を掛けるのは止めよう）電話を握り締めて走る。

（間違いであって欲しい）

いつもなら自分に言い聞かせられてきたのに不安も蠢きも今は押さえが効かなくなっ
ていた。何かとても嫌な予感が脳裏を過ぎっていたからだ。

（見間違いだよね？だって功ちゃんの筈が無い！）

息を切らし降りしきる雨を避けるように走る。
（確認するだけ。人違いって分かったら安心するから、きっと良く似ている人）
そんな風に考えながらさっき車の横を通り過ぎた二人組みに声を掛けた。

「功ちゃん?！」

雨が激しく振っていたが2人組みにその声が届いたようだった。1つの傘に2人で入って腕を組んでいたそのカップルが傘を少し上げて後ろを振り返る。

綾香は言葉を失った。

仲良さそうに体をくっつけて腕を絡ませて歩くその2人組みは功一とユリだったのだ。

（嘘・・・）

体が強張り全身が一気に冷たくなるのを感じた。

雨が容赦なく体に降りそそぐ、声にならない声で話しかけた。

「どう・・して・・?」唇が震えてうまく声が出ない。

足元から、凍りついてそのまま動けなくなるような錯覚に陥ると、まるで過呼吸症のように息が荒くなり気が遠くなった。

「功ちゃん?」

（どうして?今日は仕事だからってだから会えないって）

信じられず功一を見る。ユリは綾香を見て笑いを堪えながら功一に目をやった。

功一は一瞬驚いた様子だったが無言で蔑むような視線を綾香に向けるとそのまま背を

向けて歩いていった。

雨が叩きつけるように体を濡らしていく。

功一と会えるとおもって綺麗にセットした髪が雨に打たれて水分を含み顔と首に張り付く、震える体を抑えながらしゃがみ込んだ。

声にならない声で泣いた。

周りの通行人が綾香を不思議そうに見て通り過ぎていく。涙が溢れて体を支える事も出来なくなりその場に崩れるように座り込んだ。

飛び出した綾香の様子がおかしかった。堅は綾香が忘れた傘を手に取り車を降りて後を追った。綾香に追いつくとゆっくりと近づく、目の前に立ちつくしてカップルに話しかけている。

その2人になんとなく見覚えがあった。

（確かあの時、綾香と一緒に居た・・・）

綾香の肩が小刻みに震えているのが分かった。その2人は堅に気が付かない様

子で傘に入って腕を絡ませている。女が綾香を見て含み笑いをしたのが見えた。

2人が去ると綾香が崩れるように座り込んだ。

堅の胸は締め付けられるようで痛みを感じ、その場面で彼女がなぜ飛び出したのか

そしてなぜ泣いているのか分かった気がした。一瞬カッとなった。

体を流れる血液が

瞬間で沸騰するような感覚が全身を駆け巡る。

（今すぐにあの男をボコボコにしてやりたい！）

自分の地位も立場も忘れ功一を追いかけようと足を踏み出すと目の前の綾香を見た。

ずぶ濡れになっていて、まるで消えてしまうんじゃないかと思うほど肩が小さく見えた。怒りを堪え、手をきつく握り締める。

綾香の傍に近づき肩を支えるように立ち上がらせると直ぐ横にあるショップの軒下に

連れて行き雨を凌いだ。歩道を水溜りに変えてしまうのでは無いかと思うほどの雨粒

が地面に当たって弾け2人の靴を濡らす。

（体が震えている）

綾香は堅に寄りかかるようにもたれるとそのまま力なくしゃがみ込んだ。必死に声を

堪えて肩を震わせていた。こんな時でも自分を抑えて精一杯耐えて

いる気がして堅の
胸が痛く締め付けられた。

ふと力なく綾香の手から携帯電話がすり落ちる。

折りたたみ式の電話は落ちた弾みで半分開き待ち受け画面が光った。
雨粒が当た
り濡れてしまうと思いそれを拾うと、光った待ち受け画面が薄暗く
なった街中で目に
痛いほどまぶしく感じた。

見るとメール画面だ、どこかで見てはいけないとブレーキが掛かる
も見ずには居られ
なかった。

Ｆｒｏｍ　功一

Ｓｕｂ　最愛の人へ
本文「些細な事で悲しませてごめんね、僕が悪かった。これ以上悲
しませたり、苦しい
思いさせないように頑張るからね。離さないからね。愛しているよ
ずっと」
携帯画面を見ていた堅に綾香は声を震わせて言った。

「ほんとうは・・ずっと不安だったの・・」

綾香は呼吸が荒く胸を震わせて必死に息を吸い込みながら声を出し
ている。

「仕事に忙しい彼に理解あるように振舞っていたけど」

「週末にドタキャンされても・・仕事なんだって、我が儘言ったらいけないって」

抑えていた感情を吐き出したかのように声が高まる。

「だけど！・・・不安で・・」

「だから・・そんな時はメール見て不安鎮めていたの。本当はー・・」

綾香の声が上ずる。

「本当は・・不安で寂しくてそれでも信じて居たかったの・・」

声にならなくなってまた泣き声が聞こえた。

「ばかだよね・・私」

そう言って唇を震わせて無理に作り笑いする頬に涙が流れた。支える手に力が

入る。震える体を気使いながらも痛いほど伝わる悲しみを受け止めたいと思った。

第１０章　決壊（３）

傘を差して、精根尽き果てた様な顔で力なく歩く綾香を車まで連れて戻った。
助手席のドアを開けて背中をかばうように促すと綾香は足を止めて黙り込む。

「どうした？」

綾香の髪から水滴が滴り落ちると、大きな瞳に涙を溜め込んで堅を見上げ唇を
震わせた。
「車汚れちゃうよ？」

その瞳が潤んでいてたまらなく切なかった。

「いいよ、気にしなくて」

背中を軽く押すと車に乗り込み俯いた。堅が運転席に戻ると綾香は腕を抱えるよう
に体を震わせている。

「どうした？」心配になり肩に手を掛ける。

綾香の体が驚くほど冷たい。

「寒いのか？」

訊ねると体を震わせながらゆっくりとうなずいた。

（このままだと風邪を引くな、ここからだと僕の家のほうが近いか。早く体を温め
ないと）堅は自分の家へと車を走らせ駐車場に着くと助手席から綾香を下ろし直通
のエレベーターに乗る。綾香の目は虚ろで今にも崩れそうなほど疲れ切った様子だった。
エレベーターから降りるとそこはもう堅の自宅でグレーの毛足の長い絨毯が敷かれ
た広いエントランス。綾香は我に帰ったかのように足を止め、震える瞳で辺りを見回し
てから堅の顔を見た。

「大丈夫だから、濡れた服を乾かしたほうがいい」
綾香の手を引いてその奥にある厚いガラスの扉から中に入った。
静まりかえった真っ暗な部屋は足を踏み入れるとセンサーが感知して足元に据え付
けてある小さなライトが付く。足を踏み出す先で小さな灯りが付き、今通ってきた場所
から追うように消えていく、小さなセンサーライトの光が床から漏れて辺りを照らすと
暗い場所が綾香の部屋の何倍も広いリビングだという事が分かった。
堅は綾香を広いパウダールームに通した。奥はバスルームがある様だった。

広く取られた洗面所は大きな一枚の鏡がはめ込まれていて、カウンターはグレーの大理
石。足元は暖かく、床には外気温と室温を感知して自動的に温まる暖房が入っていた。
部屋の片隅には綾香の背丈ほどの観葉植物が置いてあり間接照明が

照らしていて磨き上
げられた内装はまるでショールームのようだ。

「これ、タオルね。バスローブはこれ」

「ドライヤーはそれ使って」それだけ言うと堅は部屋から出て行った。

置かれた環境に驚き戸惑ったが今は何も考えたくなかった。体が冷えて指先の
感覚が無い、震える指で濡れて体に張り付いた服を脱ぎ体にバスタオルを巻くと
床を濡らさないように服を畳んで洗面台に置いた。
そのまま部屋の奥に繋がっているバスルームに入るとシャワーを浴びた。

大理石や磨き石が綺麗に光っていてシックにまとまっているが、その一つ一つが最
高級品であることを感じるほどバスルームは豪華だった。

頭から熱いシャワーを浴びる。

功一の顔もユリの含み笑いも頭を離れない。

「苦しいよ」

涙を抑えようとシャワーを浴びながら呼吸を整えると冷え切った体が少しずつ温ま
るのを感じた。涙を抑えて体を拭くとバスルームから出る。用意されていたバスローブ

を着込み、髪を乾かしているとノックの音がした。

（堅かな？）

「あの、入って宜しいでしょうか？」不思議に思ったが返事をすると扉が静かに開き
四十歳くらいの事務服を着た女性が顔を覗かせた。

「あの、サイズが合うか分かりませんがこちらを着てください」
そう言って幅の広い布紐の付いた紙袋を手渡された。

「下着のほうもサイズちょっと自信ないので」

「え？」

袋を覗くと中にはヨーロッパ製の高級ランジェリーの袋が入っていた。紙袋を見ると
有名イタリアブランドの袋だった。

「代表が中くらいの女性としかおっしゃいませんでしたので、中にバックが入ってい
ますからそちらに脱いだ服を入れてお持ち帰りください」

「あの、これわざわざ買ってきてくれたんですか？」

驚く綾香に女性は優しく微笑み軽くお辞儀をすると、すぐにパウダールームから
出て行った。

袋から服を取り出して見ると、スモーキーピンクの上品なワンピー

スにレースが
綺麗にあしらってあるニットジャケットだった。サイズは丁度良く
足元を見ると可
愛いミュールが用意してある。一緒に入っていたビニールバックに
濡れた服を入
れパウダールームから出るとルームランプが付いている薄明るいリ
ビングに出た。

部屋は広くシックな家具がまるでインテリア雑誌のお手本のように
綺麗に配置され
ている。大きな窓ガラスが雨模様の夜景を映し出して滲んで見えた。

ソファーやテーブルがあり必要最低限の間接照明が計算されたよう
に配置してある。

広い部屋の奥にはバーカウンターがあって堅はカウンターのイスに
座り窓の外を
眺めていた。
その瞳は依然見た深く寂しい瞳だった。

堅は綾香に気が付くと振り向いてゆっくりイスから立ち上がった。

「堅。なんか迷惑掛けちゃってごめんね」

「この服・・・」

そう言い掛けて目の前に居る堅の顔を見た。
（堅の顔を見ると泣きそう）
ホッとしたような気持ちになるのを抑えながら下を向く。

堅は顔を見てくれない綾香に切ない気持ちがあふれ出していた。悟られないよう
にカウンターの中に入る。

「いいよ、気にするな」と微笑んだ。

「何か飲むか？暖かいものがいいな。そこ座って」と不自然なほど明るく振舞う。

手際よくホットワインを作った。

「アルコール度数低いし、甘いから飲みやすいよ」

グラスをカウンターテーブルに乗せて滑らせるように静かに差し出した。

綾香は少しためらった様子だったが「ありがとう」と小さな声で言ってグラスを
手に取り、ゆっくり口に運んだ。

「美味しい」

その顔が笑顔になり堅はホッとして微笑んだ。

ずっと付きまとう切なさ、どうしたらこの切なさから逃れられるのか綾香をみて考
えていた。

綾香は一瞬目が合うとグラスを口から離し俯いた。

取り乱し泣いた顔を見られた恥ずかしさも。そして、戸惑うほどの
堅の優しさを感じ
ていた。（堅の瞳が優しくてその瞳を見ちゃうと泣きそう。頼りそ
うになる・・）

そんな自分を否定するように、またワインを口にした。

街の灯りが窓ガラスに映りこみ雨が当たって灯りが滲む、ほんの少
しの沈黙が気
まずくて何とかしようと綾香は口を開いた。
「なんだか」

そう言い掛けると唇が震えた。

（やだ。泣きそう気が付かれたくない）
グラスをカウンターに置くとゆっくりと立ち上がり窓辺に向かった。

堅に背を向けて外を眺める。

綾香の背中はまるで泣いているように感じて、堅は黙ったまま傍に
歩いた。

綾香の横顔は瞳が潤んで今にも泣きそうだった。

（僕は綾香を愛しいと想うたびに、肩を引き寄せて抱きしめたいと
想った。だがその
感情を抑えてきた）

綾香は雨に滲むガラスを見つめながら静かに口を開く。

「堅には・・・」

そう言い掛けると無理に作り笑いをして。

「情けない所。見られてばっかりだね」

言い終わると綾香の瞳は涙でいっぱいになり今にも頬を伝わりそうだった。

堅の頭の中が一瞬真っ白になる。

「け・・・ん?!」

驚き戸惑うその声が聞こえたのは腕の中からだった。綾香を引き寄せて強く抱きしめていた。堤防が決壊するかのように感情があふれ出す。刹那が爆発してもう自分を抑えられない。綾香の暖かい温もりと柔らかな香りが堅を包み込む。

堅を見上げるとその瞳は優しく夜景が照らして怪しく光っていた。

顔が凄く近く強く抱きしめられて、先ほどまでの堅と違う事に驚きを隠せないで居た。

（いつもの堅と違う）

「堅?」

綾香の声が震えていた。　瞳が揺れ動き堅を見つめる。

（堅どうして？）

綾香の震えを抑えるように堅はそっと唇を重ねた。綾香の唇は強張っていた。だが強
く想う気持ちだけがただそれだけが頭を過ぎって、全身を支配していた。綾香の唇が
離れようとすると追いかけるように捕らえて逃さない。

「け・・・ん・・」

重ねた唇から声が漏れる。嫌われる事も、この先の事も考える事が出来なかった。
綾香の唇から伝わる温もりが堅の心を一層熱くする。

「堅・・やめ・・て」

唇の隙間から吐息が漏れるように言うと、綾香が腕を振り払い離れた。気が付くと
その瞳から涙が溢れていた。
「ひどい！どうして？こんな事をするの？！友達だと思っていたのに！堅は私と！私と・・！」

最後まで言葉にならず心の中で叫ぶ。

（そんなつもりで付き合っていたの？！）

声にならない声でそこまで叫ぶと泣きながら荷物を掴みそのまま部屋を飛び出した。

第１１章　変化

エントランスに出るとエレベーターのボタンを押す。乗り手を待っていたかのように直ぐにドアが開いた。

（ボタンが２つしかない。Ｆ１とＢ１）

Ｆ１を押すと到着した先はビルの玄関だった。床の白い大理石が磨きあげられまるで鏡のように壁やドアを映している。目の前には厚いガラスの自動ドアが２枚ありその向こうには別のエレベーターがある。

どうやら降りてきた場所は堅専用の出入り口の様だった。

目の前の自動ドアを抜けると人が何人か入れる程度の間隔を置いてもう１枚のドアがあった。今通ってきたドアが閉まるのを待ってから目の前のドアが開く。

綾香は焦れったさを感じて人が１人通れるくらいの隙間が出来ると滑り込むようにロビーに出た。

外を見ると雨が小降りになっている。タクシーを捕まえて飛び乗った。

綾香が出て行った部屋で堅は黙り込み仕事とは違う冷静さを失う自分に苛立ちを
感じながら、犯してしまった過ちの重大さを噛み締めていた。

（僕はなんて馬鹿なんだ！）

窓を拳で叩くと、小ぶりになった雨を窓から眺め立ち尽くした。
薄暗い部屋で外から入り込む柔らかな灯りが堅を浮き立たせるように照らす。

（アルコールを浴びる様に飲んで酔ってしまえたらどんなに楽だろう）

だがそんな気分にもなれずにいた。綾香にしてしまった事を悔やみ
（今日の事で。もう僕とは会ってくれなくなるかもしれないな）
屈託無く笑う綾香の笑顔を思い出す。

（自然で思いやりがあって優しくて。そしてあのなんとも言えない怒った顔。頬を
膨らまして眉を吊り上げてもうあの笑顔を見ることも出来なくなるのか？）

（想いが通じなくても、近くであの笑顔を見ていられたら幸せだったのに僕は！
僕は・・・綾香を傷つける事しか出来なかった）
唇に残る感触が堅にどうしようもない喪失感を与えていた。

綾香はタクシーを降りて部屋に入ると腰位の高さの靴箱の上に部屋の鍵を無造作
に置いた。擦り寄ってきた猫の頭を撫でて餌を与える。

暗い部屋に入っても部屋の明かりをつける気持ちになれずそのまま
座り込んだ。
今日一日いろいろな事がありすぎて頭の中で処理しきれないでいた。

（堅と街でバッタリ逢って蓉子さんのところでお茶を飲んでそこま
で凄く楽しくて）

（この半年間。不安で不安でたまらなかった。仕事でうまく行かな
い日そして孤独だと
痛感する事が多くなって、彼に話を聞いて欲しくても功ちゃんは何
時も一方的で）

（自分の都合で言いたい事だけ言って、私の事は何も聞いてくれな
くて友達と会っ
ていても楽しくなくて・・・何時しか一人で居る事が多くなって。
今までも仕事っ
てドタキャンした後ユリちゃんと会っていたのかな）

悔しくて情けなくて無意識に涙が溢れてくる。

突然、堅を思い出した。

（堅はどうして私と友達になりたいなんて・・・言ったのかな？ど
うして抱きついてきた
りしたのかな・・そして・・・）そう思うと涙が止まらなくなる。

（堅はどういうつもりで私と友達で居たのかな。あんな風にするために？）
膝を抱えて必死に声を堪えて泣く。
（堅のバカ・・・）

気が付くと朝で日曜のテレビは退屈以外の何物でもなかった。ベッドに横になることも出来ずにその場に座ったまま時間を過ごしていた。

目がヒリヒリと痛い。泣きすぎて腫れぼったさを感じていた。

テレビをつけて直ぐに電源を切るとシャワーを浴びて近所のクリーニング店
に向かう。昨日の雨が嘘のように晴れ渡り朝の空気が冷たく澄んでいた。

クリーニング店はチェーン店で祝祭日もお構い無しに営業している。朝出して夕方
受け取りが売り文句の店だ。堅が昨日用意してくれた服をクリーニングに出して家
に帰る途中で功一に思い切って電話を掛けた。

（たとえあの時、偶然に居合わせたとか、やましい事が二人に無かったとしても私は
彼のあの顔もそして嘘をついていた功ちゃんが許せない。信頼できない）
電話がつながりコールが鳴る。留守番電話に変わるかと思うくらいコールは鳴り続けた。

「もしもし」低いトーンの声が聞こえた。
少し間を置いてから口を開いた。
「昨日の事なんだけど」不思議なくらい冷静だった。
功一は息を潜めるように黙り込んでいる。如何言い訳しようか考えているのかそれ
とも話すことすら面倒なのかその沈黙に苛立ちを感じる。

ドアを開けるような音が電話の向こうから聞こえた。
「ねぇ〜〜、功ちゃん何しているのぉ？電話？」とかすかにユリの声。

慌てたように電話から布を当てたような雑音が響く、綾香は体が冷たくなるのを感じた。
（朝まで一緒だったんだ）
目を閉じて深呼吸をする。

「さよなら」

そう告げると耳からゆっくり離して電話を切った。自分でも驚くほど冷静だった。
もはや涙も出なかった。

朝の冷たい空気が頬から浸み込み指先まで体が冷えていくのを感じる。

昨日の雨が嘘のように晴れ渡る空を見上げ、二人が自分を裏切った怒りとそして
そんな彼を信じ続けた自分への苛立ちを押さえ込んだ。
真っ直ぐ前を向いて自宅の方を見るとゆっくり息を吸い込む。

「歩こう」
静かに踏み出したその足取りは迷いを感じない。力強くそして確りと地面を捉えて蹴
りだしていた。

（あれから2週間になるな。綾香が部屋を飛び出してから）

分刻みのスケジュールをこなしながら堅は移動する僅かな時間でふと綾香を思い
出していた。

あのあとなんとなく日曜、家に居るのが嫌で休日を返上して慌しく働いていた。
体を動かして整然としたオフィスで仕事の事を考えていると、その身をジワジワと
焦がされるような居た堪れない気持ちから逃げ出せているようで楽だった。

だが泣き顔を思い出しながらも綾香に逢いたくてたまらないでいた。
【彼女が尋ねて来たら、至急連絡するように】と自宅ビルの管理会社に連絡を入れて
いたことを思い出し（来たら・・・か、来るはずもないか）都合よく期待してしまっ
ている自分を恥ずかしく思った。
（逢いたい。でもどんな顔をして逢えばいいんだ？）
（どんな顔をされるのだろう。謝らなくてはいけないのに）
勤務先も分かる。何度も逢いに行こうと思っただが逢いにいく勇気

が無く逢いに
行って決定的に綾香から拒絶されるのが怖かった。

仕事から帰宅すると綾香は部屋の灯りをつけ、着替えをしようと狭い部屋に据え付
けられてあるクローゼットを開いた。片隅に立ててある紙袋に目が行く。クリーニン
グから戻ってきた服を返せないで居た。

（返しに行こうか。行かなきゃ）

そんな風に思いながらも着替えを済ませて、まるで目に入らなかったかのように紙
袋から目を逸らしクローゼットを閉めた。ベッドに腰掛けて無意識に考え込む。

（あれから2週間）

功一の事を考える暇が無いほどわざと予定を入れ、仕事でも残業を引き受けて
働いていた。功一に対する怒りはまだどこかに有ったが不思議と悲嘆にくれる事も
無く日々淡々と過ごしていた。何時も気持ちを張り詰めていないと崩れてしまいそう
だった。

功一に悩まされる事も無くなり体が空っぽになったかのように感じる。それは虚しさ

とは違う不思議な心境だった。

ふと、堅を思い出す。

（あれから、逢う事も無くてこのまま堅は私の事忘れちゃうのかな？あの日の
堅は優しくて）優しい笑顔を思い出した。

（一緒にいると楽しくてずっと友達でいられると思ったのに）
（堅の権力も、立場も私には別世界で私はどうして友達で居たのかな？堅は優
しくて話をしていると不安な気持ちも忘れる事が出来て）いきなり抱きしめられて
キスをされた事を思い出す。
（いきなりで驚いて、それで訳が分からなくなって、強く激しい堅が一瞬怖くて）
ハッとした。自分がどういうつもりで今考えていたかと思うと、心の片隅に湧き上が
った感情を振り切るように立ち上がった。

（違う！服を！返さなきゃって、だから堅のこと考えていたのよ！）

（堅はただ気まぐれで友達になりたいと思っていただけかもしれないのに）

そんな風に考えると、自分を納得させるつもりで思いついた今の言葉が不意打ち
のように胸を締め付ける気がした。

（明日。返しに行こう）

第12章　願い（1）

休日の朝、ゆっくりと起きて身支度を整えた。頭は動いているのに服を返しに
行くと思うと体が重く感じる。朝の日差しが窓辺のフローリングに当たって部
屋を暖め、朝ごはんをもらったお腹いっぱいの猫が気持ち良さそうに日に当た
りウトウトとしていた。

部屋を出ると外の空気がまだ冷たく感じ、歩きながらどうしたら服を返せるか考えた。
（2週間前に会ったあの本屋さんのビルに、あ。でもあそこは偶々居ただけかもし
れないし。やっぱりあのマンションに行くしかないのかな）

今まで偶然に堅に逢っていた事で考えもしなかったが電話番号やメールアドレス
を交換していない事を思い出した。

（堅とは今まで本当に偶然に逢っていたんだ。不思議）
そう思うと堅の笑顔を思い出し胸がチクリと痛んだ。

街の中心部に向かうバスに乗り、あの日飛び出したマンションの近くで降りる。

綾香の心は複雑だった。

（逢うのが怖い。あの時の堅の顔、友達を見る顔じゃなかった）

「このビルだ」

なんとなく見覚えのあるビルに広いエントランス、磨き上げられた白い大理石の床。
正面のエレベーターホールの横に仕切られた堅専用のドアがあった。
天井の到る所に監視カメラが設置されている。

（あの時は、訳も分からず飛び出したけど。改めて見ると・・・）
その豪華なエントランスにたじろいだ。

ビルに恐る恐る足を向けると自動ドアが開く。そこには部屋の番号を押すインターホンが設置されていた。目の前には厚いガラスのドアが立ちはだかる。

（どうしよう。部屋の番号分からないよ）
もちろん自宅の電話番号など分かる筈も無く途方に暮れた。
すると正面のエレベーター横のドアから事務服を着た女性が現れた。
良く見ると2週間前に服を届けてくれた女性だった。彼女は軽く会釈をするとガラスの向こうの壁に設置されている受話器を取り何かを話し始める。
直ぐ横の小さなスピーカーから女性の声が聞こえた。

「あの、何かご用でしょうか？」

綾香は慌ててインターホンのボタンを押しながら話す。

「えっと、あのっ、このビルにお住まいの関村さんに用があって来たんですが」
何て話したら良いか分からずに口走っていた。

「少しお待ちいただけますか？」
事務員はそういい終わると受話器を置き奥の扉に消えていった。
しばらくすると戻ってきて受話器を手にする。
「あの関村は只今、業務の方に就いておりまして。お急ぎでしたら折り返しご連絡
差し上げますが？」

それを聞いてホッとした気持ちになれる筈の心に寂しさが吹き付けた。
（もう私の事忘れたのかもしれないのに、やっぱり堅はただの気まぐれだったのか
もしれない）心がチクチク痛む気がした。

こんな風に感じる自分を振り切るように女性に話しかけた。

「あのこれを渡して頂けませんか？」女性に紙袋を見せた。

「あ、はい構いませんが。お預かりして宜しいのでしょうか？」

「はい。お願いします」

女性が目の前の自動ドアを開けると袋を受け取ろうと手を差し出す。
（これを渡したら、渡したらもう堅に・・・）
袋の布紐を握り締めて動かない綾香を事務員は不思議そうに見た。
少し背の低い女性が顔を覗き込む。

「あの～？如何なさいました？」

その言葉に一層強く力を込めて紐を握った。

「あ、すみません。やっぱりいいですっ！」

そういい終わると勢いよくお辞儀してビルから飛び出た。

小走りにビルから遠ざかる。しばらく走ると息を切らして立ち止まり、さきほど感じたチクチクした胸の痛みが錯覚では無い事を思い知った。今こうしている間も心の中でその感覚が次第に強くなる。両手で袋を提げて歩道の真ん中で俯いた。

（どうして？あの人にこれを渡したら、そしたらもうわずらわしい事なんて無くなるのに！そうしたら全部終わるのに、どうしてこんな気持ちになるの？！）

唇を噛み締めた。

（もう。誰かに振り回されるのは沢山、返そう・・返してしまおう）

そう思い切ると、何も考えないように気持ちを押さえ込みビルに引き返した。

オフィスビルの２０階にある会議室の重いドアが開く、堅は足早に会議室を出た。

廊下は広めに幅を取ってあり大人が5人ほど並んで歩けるくらいだった。少しして
後ろからゾロゾロと他の役員が出てくる。堅は役員とは逆方向の廊下に曲がると突
き当たりのエレベーターに乗った。

着いた先は堅のオフィスの中で黒い磨き石が敷き詰められ重厚な机と一体化した
かのような統一感を出している。部屋の窓側に置いてある自分の机に向かって歩
き出した。胸ポケットに入れてある携帯電話が鳴る。イスに座る前に電話に出た。

「平尾です」
「あぁ、平尾か」

秘書室に詰めている平尾が携帯に電話を掛けてくる時は私用電話が決まりごとの
様なものだった。
「代表、先ほどご自宅の管理部から連絡がありまして１０分ほど前に女性が紙袋を
代表に渡して欲しいと訪ねて来たようです」

それを聞くと胸の高鳴りを感じた。

携帯電話を左手に持ち替えると右手で机の一番上の引き出しを開ける。シルバー
の携帯電話を握ると上着のポケットに押し込み乱暴に引き出しを閉めた。

「わかった、急いで車をまわしてくれ！」
慌てる堅とは対照的に落ち着き払った声で平尾が言う。
「直通出口に待機しております」
「！あぁ、ありがとう」
今まで無表情だった平尾の眉が動く。堅に仕えて初めて「ありがとう」と言われた気
がした。今まで自分が堅の為に色々するのは堅を尊敬し、そして仕事として当たり
前で何の疑問も持たないで来たが堅の言葉を聞いた瞬間心が温まる気がした。
（あの女性の事になるとなぜあんなにも。今まで、代表が相手にしてきた女性は
皆美しく華やかで、だが代表が女性達に入れ込むことなど今まで一度も無かった）
平尾は綾香の顔を思い出した。
（お世辞にも、美人とは言い難い。だがあの女性に出会われてから代表は変わら
れた。会議もオフィスからのモニター参加ではなくご自分から出向かれるし、話し
方も表情も柔らかくなった気がする。あの女性の存在があるからなのか？）

機転の利く平尾に堅は感謝した。電話を切ると今降りたばかりのエレベーターに飛び
乗る。１Ｆの一般ロビーの１つ下に下りると堅専用の通路が延びていた。

出口に待機しているリムジンのドアに運転手が立ち、堅が走ってくるのが見えると
ドアを開けた。

「急いで自宅に向かってくれ！」

綾香がビルのドアの前に立つとエレベーターホールに先ほどの事務員の姿は無か
った。事務員がついさっき出てきた扉に向かって叫ぶ。

「あの！すみません！！」

厚いガラス戸に遮られ声が届くはずも無く、どうしたら良いか考えた。

するとさっき事務員が出てきた扉から白いワイシャツにニットのベスト、グレー
のスラックス。白のソックスにサンダルと言った格好の中年男性が現れた。優し
げな顔でドアに近づくと、目の前に立ちはだかる分厚いドアを直ぐに開けた。

「あの、さっきここで・・」

言い終わる前に「こちらへどうぞ」と今出てきたドアのほうへ手を向けにっこり
と微笑んだ。恐る恐る男性に付いてビルの中に足を踏み入れる。ドアの中に入ると
中は狭い管理室だった。

黒いビニールが貼ってあるソファーと茶色いテーブルの応接セットその後ろに事務
机が窮屈そうに並んでいる。机の上には書類やファイルが広げてあった。男は部屋
の入り口に佇む綾香に「どうぞ座ってください」と促すように手でソファーを指
差し優しく話しかけた。

綾香はその場から動かずに手にしていた紙袋を見せた。
「あの、これを預かって欲しいだけなんです」

「はい。お預かりしますよ、でもお預かりする場合は手続き上、書類に記入して頂か
なくてはいけないものがありまして」

綾香は仕方なく黒いビニールが張ってあるソファーに腰掛けた。

第１２章　願い（２）

硬い座り心地で押し込むように体がソファーに沈んだ。何処か落ち着かなくて
部屋を見回していると目の前にお茶が置かれる。横を見上げると先ほどの事務
員がにっこりと微笑んだ。

「先ほどはすみませんでした」

と謝ると事務員は「いいえ、私の方こそ不手際で申し訳ありませんでした」
と優しく微笑む。部屋に案内してくれた男性が机の上に並べてあるファイルから
何かを探しているようだった。

（なんだろう。遅いなぁ～）

そう思い事務室に掛けられた時計を見る。あれから２０分も経っている。

「あの。まだですか？」
痺れを切らし男性に話しかけた。

「あ、申し訳ありません。書類がねぇ～見当たらなくて」
とゴソゴソと机の引き出しの中をかき回している。

時間が経つにつれ決心が鈍るようで焦りを感じた。

自宅に向かう車中で堅は落ち着き無く足を組みかえると外を眺めた。
（逢ったら何て言おう。綾香はなんて言うのだろう？逢いたい、綾香に逢いたい）

謝る事も、自分を嫌いになってしまったのかも知れないと思う不安も大きく渦巻いて
いたが逢いたいと思う気持ちが堅を支配していた。
（綾香に謝ろう。そして自分の気持ちを伝えよう、このままじゃ耐えられない）
祈るような気持ちで堅は窓の外を眺めた。
自宅マンションの前に車が停まると運転手が降りる前に車から飛び出す。お抱え
運転手は焦って駆け寄った。

「ここで待っていてくれ！」
そういい残し慌ててマンションの中に走り出した。

綾香は妙な焦りに包まれていた。
（これ以上ここに居たら私・・・）
思い切って勢いよく立ち上がる。

「あのっ！これ置いていくだけですから、お願いします」
そう言い終わると腰掛けていたソファーの横に紙袋を置き部屋を飛び出した。
後ろのほうで男性が呼び止める声がしたが一刻も早くこの場を立ち去りたかった。
胸に渦巻いていた何かを押さえきれなくなりそうで怖かった。
ビルのエントランスに飛び出るとスーツにノーネクタイの男が駆け込むように入ってきた。
「！」
（堅だ！）
綾香の心臓は一瞬大きく躍動してその鼓動は全身を強く揺らした。
（どうして。逢っちゃうの？）
少し離れた位置でドアを隔てて見詰め合う。堅はドア越しに綾香を見下ろすと
そのまま横に設置されているインターホンに近づきなにやらボタンを押した。
分厚いドアが滑る様に開く、堅はゆっくりと綾香の前まで歩くとそのまま黙り込む。
綾香は堅を見上げた。優しい瞳でも、怒っている様子でもなくほんの少し顔を仰向けにして綾香を見下ろす。沈黙する二人、綾香は耐え切れずに下を向き、顔を逸らすと

口を開いた。

「借りていた服返しに来ただけだから。あの事務室に預けたから」

早口で言うと、顔が見られないまま目の前に立ちはだかる堅を避けるように横を通り過ぎようとした。

あのチクチクが強くなる。

どうしようもなく苦しい気持ちが膨らみ喉を圧迫しているようで痛くて早く逃れたかった。通り過ぎる瞬間。堅が綾香の手を掴む。

「！」

驚いて堅を見上げた。

少し眉を顰めていたけれどその瞳は力強さを感じない優しい眼差し、綾香は直ぐに目を逸らす。

（堅の顔見ていると苦しくなる）

「は・・放して」

そう言うと堅の指が少し動いたがそのまま綾香の手を引いてビルの中に入る。

「堅！？」

堅は綾香を見るでもなく先週綾香が降りてきたエレベーターのドアに足を向けた。
痛くは無かったが手は力強く引っ張られる。
透明な分厚いドアの横にある四角いカメラに堅が顔を近づけると「認証しました」
と音声が流れドアが開いた。手を引かれるまま中に引っ張り込まれ2枚目の自動ドアをぬけ、そのままエレベーターに乗ると一気に上昇した。その間黙って手を握りこちらを見ようともしなかった。

（胸が苦しいどうして？）

エレベーターが止まり、ドアが開く。

堅はゆっくりと動き出し綾香をエレベーターから降ろす、そこは以前来た堅の家のエントランスだった。綾香の部屋の3倍はある広い玄関にはグレーの密度が高く毛足の長い絨毯が敷かれている。

堅は背を向けたまま綾香の後ろでエレベーターのドアが閉まると手をゆっくりと放した。
堅が振り返り綾香と目が合う。綾香はとっさに逸らすように俯いた。顔を見ると何かが溢れ出しそうで、それを抑える事で必死だった。

（服を返して終わりにするじゃなかったの？早く言わなきゃ）
俯いたまま言葉を発した。

「私・・・」
そう言い掛けて、心の中で何かが遮るように口を重くした。

堅は今迄感じたことの無い焦りをどうしたら良いのか考えていた。
（私？綾香。なんて言いたい？今何を考えている？こっちを見てくれ）
心の中で焦りが募る。そんな自分を落ち着かせようと平静を取り戻したつもりで口を開いた。

「それで、何？」
その声は整ったテンポで落ち着き払い冷たく聞こえ綾香の心に突き刺さるような気がした。

（堅の顔が見られないよ。今どんな顔しているの？）

下を向いたまま口を開く。

「私もう振り回されたくないの・・」綾香の視線が彷徨う。

「堅は、友達になりたいって言ったのに・・なのにもうわかんないよ」

堅は心臓から血液が押し出される瞬間の鼓動が全身を揺らす感覚に包まれた。ずっと
逢いたかった綾香が目の前に居る。

愛しくて切なくて嫌われてしまったのでは無いかと不安で2週間過ごしてきた。

（綾香違うんだ！僕は）

表情が見られない事で心の中に不安が押し寄せる。綾香に出会って今迄感じたこ
との無い感情や経験ばかりで戸惑い焦りを感じていた。

（何て・・切り出したら良いんだ！）

「服ありがとう。下に預けたから」
堅に背を向けてエレベーターのボタンに左手を伸ばした。

その瞬間！その手を掴まれ綾香は後ろから堅に抱きしめられていた。
驚いて頭が真っ白になる。ゆっくりと堅の力強く暖かい温もりが伝わってくる。

「綾香」

綾香の耳元で囁くように言うその声は少しかすれていて、何かを押さえ込むように押
し殺した声だった。

「綾香、好きだ」
夢の中で聞く言葉のように体の中で反響して揺れ動くような感覚に陥る。堅が綾香の
左手を放し両手で体を包みこむと心臓がまた強く躍動するのを感じた。

堅は抱きしめながら心の中で強く思う。
（失いたくない。どこにも行かないでくれ！）

「好きだ！」

もう一度聞こえた、はっきりと響いてきた。包み込まれた腕から暖かい温もりが伝
わってくる。綾香はゆっくりと顔を後ろに向けると堅と目が合った。
堅は驚くほどあっさりと抱きしめている腕を解くと綾香は振り返り
二人は向かい合う。
彫りの深い堅の顔はその瞳が揺らめいていて切なさが溢れていた。

「け・・ん」
見つめ合うと瞳から視線が外せなくなる。吸い込まれるようにその
大きな瞳を見て
いた。ゆっくりと口を開く、気が付くと指先が震えていて手を握り
締めた。

「この2週間ずっと考えていたの、堅みたいな人がどうして私と友
達になろうって言
ったのか。気まぐれだったんじゃないかって・・・だから、あれ以
来もう堅は私の事忘
れちゃったんじゃないかって」
堅は静かに綾香を見ていた。

綾香はまた俯く。
（私・・・堅に逢いたかったんだ）

そう心の中で強く感じた。

「堅が本当はどう思っているのか怖かったの」
そう言うと胸の中で何かを圧し止めていた感情が涙と一緒に溢れ出す。苦しい感情の
正体が何なのかやっと分かった気がした。堅は綾香の顔に右手を差し伸べ頬にかかった髪の毛を優しく直す。
綾香はゆっくり堅を見上げた。
吸い込まれるように見詰め合う。
「堅に・・・逢いたかった」
堅の左手が綾香の体を優しく引き寄せ見詰め合ったまま顔が近づく。
瞳をゆっくりと閉じると、そのまま唇を重ねていた。その存在を確かめ合うように唇が
触れ合う。柔らかな綾香の体、そして微かにシャンプーの香りが堅の全身を包み込み
愛しい綾香を抱き寄せて、二人の鼓動が一つになったかの様に体に反響していた。

第13章　温もり

唇が離れると堅の胸に顔を埋めた。身体を包み込む腕に暖かくそして強く
抱きしめられ、ほんの数分そのまま腕の中に居た。

（暖かい。堅の腕の中ってすごく安心する）

顔を上げると堅は優しく綾香を見ていた。その瞳の光は今迄感じた事の無い深い
優しさで満たされているようだった。

「綾香」

優しく名前を呼ばれ、返事をしようと口を開いたが瞳の光に心を奪われて声が
出ない。
潤んだ瞳で見上げる綾香を見詰めて堅は強く思う。
（あぁ！離れたくないな。このまま一緒に居たい）
仕事を放り投げて飛び出してきた事を思い出し、詰まっているスケジュールが頭を
過ぎる。もどかしく焦れったい気持ちを押さえ込んだ。

「綾香この前はすまなかった」

綾香は堅の言葉を聞いて少し頬を膨らませた。

「ほんとだよ！強引なんだもん。驚いちゃうよ」そう言って微笑んだ。

「綾香その・・僕と付き合ってくれないか？」
その言葉に驚き綾香は少し黙り込んで口を開いた。
（でも堅と私は住む世界が違いすぎるよ）
「うれしいでも私」
そう言うと最後まで言葉に出来ず俯いた。
綾香の態度を見て焦れったくなる。
「綾香。僕が好き？」
少し間を置いて照れくさそうに潤んだ瞳で堅を見上げた。
「うん、堅が好き」
「じゃぁ、何も問題は無いよ」
優しい微笑み、その自信に満ちた言葉に何処か安心した。
（堅とは住む世界が違う・・でも、堅が好き。出来る事なら一緒に居たい）
微笑みあう二人の心は幸せで満たされていた。
「綾香すまない。仕事が残っていて、その、飛び出してきたから」
とぎこちなく笑った。
その言葉を聞いて、どうしてここで堅と逢えたのかなんとなく分かった気がした。
（もしかして連絡とか入れていたんだ管理室の人）そんな風に思った。

「うん。私も帰るから仕事に戻って」

「送るよ」

「え？いいよ。忙しいのに」

堅は綾香の髪を撫でるとニッコリ微笑む。

「これは彼氏の特権だろ？送らせて、そうじゃないと心配で仕事が手につかない」

と意地悪な顔で笑った。綾香はそんな堅を見て嬉しさが胸いっぱいに広がり満面の笑みで頷いていた。

マンションの玄関を出ると黒塗りのリムジンが待機していた。全長8メートルもあるリンカーン・タウンカー。運転手がドアを開けると堅は綾香を先に乗せた。

車内に入り上質な黒いレザーが張られたソファー調のシートに腰掛ける。

足元はフカフカの絨毯、頭上には大きな液晶モニターが2台設置されていて車内の内装は黒で統一されていた。シャンパンを飲めるようにグラスやクーラーがセットになったカウンターまでついている。リムジンに乗った事のない綾香には想像が

つかないほど車内は広く豪華だった。堅が乗り込んで隣に座ると、ドアが閉められた。

優しく綾香に話しかける。

「この前の交差点から左でいいの？」

あまりの豪華さに、少し驚いたがぎこちなく頷いた。

（映画とかテレビでしか見た事ないよこんな車）

そんな風に考えて車内をキョロキョロ見た。

堅が運転手に場所を伝えると手元で何かを操作する。後部座席と運転席を分けるパーテーションが閉まった。運転席と区切られた事で車内は個室になり堅はまた少し緊張した。

車内をキョロキョロ見ている綾香。

「乗るのは初めて？」

「うん・・・」

「気に入った？」優しく訊ねる。

「二人で乗るのもったいないね～。広いもん」瞳をくりくりさせて堅を見る。

思ってもいない反応と子供のように瞳をくりくりさせて答える綾香が可愛くて笑み

がこぼれる。

「あはは。そうだな」

後部座席の窓はスモークガラスで外から車内が見えないようになっている。昼でも強い日差しが差し込まない分、少し薄暗い車内は天井に小さなライトが４つ付いていて上品に内装を照らし、外の喧騒とは全くの別世界。

柔らかなシートに身を沈め、落ち着かない様子の綾香の横顔を見てポケットの携帯電話を思い出した。

「綾香。手を出して」

「え？手？」

不思議に思い戸惑いながら自分の手のひらを見た。堅はジャケットのポケットに手を入れてシルバーの折りたたみ式の携帯電話を取り出して綾香の両手にのせた。

「え？携帯？」

「うん、今度逢ったら渡そうと思っていたんだ」

「でも、携帯なら持っているよ？」

堅はニッコリ微笑む。

「携帯開いて、真ん中のボタン押してみて」

言われるままに携帯電話を開いて真ん中のボタンを押した。

アドレスと出たその画面に【関村　堅】と、あり電話番号が何件か載っていた。

「え？これ」

「一番上の携帯って書いてあるのが僕の携帯でその下が自宅。次のが僕のオフィス専用だから、次のページ開いてみて」

言われるままにボタンを押した。

「それが、僕のメールアドレス」

「堅・・」綾香は嬉しくて微笑んだ。

「アドレスに平尾　修平とあるだろ？それは僕の秘書だから何かあったら連絡して」

とゆっくりとした口調で優しく微笑んだ。

「それとデーターフォルダってあるだろ？そこ押してみて」

「う、うん」ボタンを押すと音楽ファイルとあった。

「押してみて」

戸惑いながら堅の顔を見てボタンを押すとメロディーが流れてきた。その歌詞には

聞き覚えが有った。２週間前から暇さえあれば何度も練習していた古いフランスの

歌だった。あれほど探していたメロディーと共に携帯から美しく流

れてくる。

「これ」

「あれから探してその、見つけたから」と照れくさそうに真顔になる。

綾香は堅の気持ちが、優しさが伝わってきて胸がいっぱいになる。

「け・・・ん」そう言うと俯いた。

（ヤダ、私ったら泣きそう）

2週間の時間が長く不安でその間がお互いどんな気持ちで過ごしてきたのか、そして堅の気持ちを感じることが出来て嬉しくなった。

「ありがとう、嬉しい」

堅は潤んだ瞳の綾香が愛しくてたまらなくなった。

「まだあるんだ、シャープボタンの下に小さなボタンがあるだろ？」

もう一度携帯電話を見た。そのボタンは地球マークが付いていて青く可愛いボタンだった。

「なに？これ」

「それはＧＰＳ機能でうちの衛星経由で僕にコールするように設定してあるから。もし綾香が道に迷ったり、何かあったときはそれ押して。僕と警備会社に居場所が届くようになっているから。そしたら直ぐに駆けつけられるだろ？」

言い終わると慌てて付け加える。

「もちろん。それ押さないと居場所分からないから安心して」

綾香はあっけに取られるとくすぐったくなって笑いがこみ上げた。

「あはは。駆けつけるって正義のヒーローみたい」笑い混じりで堅を見た。

「僕は海外に居る事も多いから海外にも繋がるようにしてあるんだ。メイン携帯にしても良いし僕専用でも良いよ」

いきなり携帯を手渡されて驚いたが、堅なりの優しさを感じ嬉しさでいっぱいになる。

「ありがとう。凄く嬉しい」

堅の座る横で何かが光る。車内の側壁に小さなランプのようなボタンがあった。

堅がそれを押す。

「目的地に到着しますが、如何なさいますか？」

直ぐ横のスピーカーから声が聞こえる。パーテーションで仕切られた運転席からだった。

綾香は慌てて窓の外を見る。

「あ、この辺りで良いよ」

堅がボタンを押して「止めてくれ」と言うと車は静かに停車した。

「ここでいいの？」

「うん、この先から入った上り坂だけどこの車だと入れないから」
とニッコリ微
笑んだ。

「そうか」
静かにドアが開いた。外からの日差しが車内に差し込んで綾香の顔
を照らす。
「送ってくれてありがとう」

「後で連絡するよ」と言うと少し寂しそうに微笑む。

車を降りて、ドライバーに軽く会釈をするとドアから離れた。

ドライバーは二人の様子を窺うようにゆっくりとドアを閉め、その
まま左ハンドルの
運転席へと小走りに戻っていく。スモークガラスに街並みが映し出
され外から車
内を見る事は出来なかったが寂しい気持ちになり黒い窓をじっと見
詰めた。

すると静かに窓が開きぎこちなく堅が手を振って照れくさそうに笑
う。

綾香もくすぐったい気持ちになって手を振り返すとそのまま車は静
かに走り出し
やがて見えなくなった。

この後降りかかる不穏など知る由も無く、二人は胸いっぱいの嬉し
さとほんの少し
の寂しさで満たされていた。

第１４章　繋がり（１）

晴天の青空。心地よい春風が優しく吹き抜けるＧｒｅｅｎ　Ｈｏｍｅ。庭の中央にある小さな円形の噴水の淵に綾香が腰掛け車椅子のコレットと膝を突き合わせ手話で話をしていた。楽しそうに話が弾む。コレットの体調が最近良いのだ。

綾香がコレットの右手を手に取り自分の喉に当てるとコレットは不思議そうに顔を顰めた。口話でゆっくり語りかける。

「コレットさん聞いて」

と微笑むと春風に髪を揺らす。深呼吸するとコレットが綾香の口元を読み取れるように大きく口を開きゆっくりと声を出した。

たどたどしいフランス語は声帯を震わせ喉に当てたコレットの手に音程が伝わる。

フランス語の歌詞や発音は難しかったが綾香は歌が得意だった。毎日時間を見つけては練習していた。

コレットの顔が次第に緩み記憶を辿る様に青い瞳を輝かせた。

３分ほどの短い歌を歌い終えると、コレットは興奮した顔で手を動かす。

「凄いわ！アヤカどうやって覚えたの？」

「コレットさんと一緒に歌いたくて、コレットさんに歌って欲しくて覚えたの」
と手話で返した。もう一度コレットの手を取り喉に当てるとコレットは左手を自分
の喉に当てた。目で合図すると二人で歌いだす。

静かに語るように歌い始めた二人の歌声は手を伝わりお互いの声が共鳴する。

2度3度歌い繰り返すと綾香が手話で言った。
「コレットさん。歌えているよ！ちゃんと声が出ているよ」
満面の笑みでコレットに話しかける。コレットは青い瞳にうっすらと涙を浮かべ
「歌えた・・・歌えたよ！アヤカの音が伝わるのよ！」と必死に手を動かす。
綾香は嬉しさで言葉にならず深く微笑んで頷いた。

「アヤカありがとう」

そう言うと皺の深くなった頬に涙が伝う。綾香はニッコリ微笑むとポケットか
らハンカチを取り出しコレットの頬にそっと当てて涙を拭いた。

「おや、なんだい随分たのしそうだね」

同じホームに入居している華が、同僚に車椅子を押してもらい近づいてきた。
「華さん」
「あんまり綺麗な歌が聞こえてきたから」

コレットは華を見ると、さっきまでの笑顔が消え途端に顔を背けた。二人はホームの中でも特に仲が悪い、綾香と同僚は顔を見合わせて苦笑いした。

「コレットさんのふるさとの歌なんだよ」

「へ〜、そうかい綾香ちゃんがあんまり楽しそうに歌うからついつい聞き入っちゃったよ」

顔を背けていたコレットが何かを見つけて綾香に指で合図をした。

気がつくと華も同僚も綾香の後ろを見ている。不思議に思い振り返ると3メートルほど離れた噴水の横に堅が立って此方を見ていた。その顔は深く優しい笑顔で目が合うと右手を軽く上げてニッコリと微笑んだ。

（え、堅？）

突然、堅が現れて驚いたが途端に嬉しさがこみ上げ笑顔になる。

「おや、綾香ちゃん旦那さんかい？」と華が茶化すように聞いた。

「ち、違うよぉ私独身だしっ」

「アヤカのボーイフレンド？」と、手話でコレットが聞くと綾香は恥ずかしそうに頷くと「行っておいで」優しく言ったがコレットが心配で戸惑った。

すかさず華が横から言う。

「この偏屈ばあさんは、私が見ておくから大丈夫だよ」
すると口話で聞き取ったコレットが自分の喉に手を当て。
「偏屈ばあさんはあなたでしょ！」と辛うじて聞き取れる発音で言い返す。

「なんだい、聞こえてたのかい？」と白々しく言うと
「聞こえているよ！」とまた声を出す。二人の口調は荒かったが楽しそうに
も感じた。

綾香と同僚は顔を見合わせると、最近は顔も合わせ様としなかった二人が言い争う
も生き生きと楽しそうに話すのを聞いて苦笑いした。綾香が笑っているのを見て華
もコレットもお互いの顔を見合わせて笑った。

「ごめんなさい、ちょっと行ってくるね」

同僚は優しくうなずいて「ゆっくりで良いわよ」と言ってくれた。

一昨日逢ったきり堅の仕事が忙しくてまだ食事すら出来て居なかった。堅の顔を
見ると言葉には出来ないほどの喜びが湧き上がって笑顔になる。目の前まで歩くと
綾香を見つめて申し訳なさそうに呟いた。
「仕事中にすまない」
「ううん」
と微笑むと少し照れくさくて恥ずかしくなる。

ふと、堅の後ろに隠れるようにスーツを着てメガネを光らせている

男がいる。目が
合うと男は会釈をした。綾香も戸惑いながら会釈する。

（あれ？この人前に堅と居た人だ）

「平尾、車で待っていてくれ」

「はい」お辞儀をするとホームの目の前の道に停めてあるリムジンに歩いていった。

（あ、秘書ってあの人なんだ）

「堅どうかしたの？」

「急遽ニューヨークに行く事になって5日間帰ってこられないから発つ前に逢いたくて」

綾香はそれを聞いて少し驚いた顔をしたがくすぐったくなって。

「うん。私も堅に逢いたかった。あのね、コレットさん歌えたんだよ」と瞳を輝かせて微笑んだ。

綾香が高いキーで楽しそうに流れるように歌い、日に照らされて輝く後姿。堅の瞳には天使のように映っていた。愛しくて引き寄せて抱きしめたい気持ちだったが空港に
行く時間が迫っていた。

（もう行かなくては、離れたくないな）

綾香の手を握ると名残惜しい気持ちを堪える。

「帰国したら休暇が取れるから、そしたら一緒に過ごせるかな？」

とぎこちなく話

しかけた。

少し間を置いて「うん」と笑顔で答える。キラキラと輝く綾香の笑顔を見てこのまま手を引いて一緒に連れて行きたい衝動に駆られる。

「じゃぁ行って来る」

そう言うと少し切ない瞳を覗かせて振り向き車に歩いていった。綾香は堅の後姿を見送りながら、広い背中を見て少し寂しい気持ちを抑え（気をつけてね）と心の中で呟いた。

第１４章　繋がり（２）

数日後の昼下がりに綾香は町の中心部のカフェで友達の陸・由香夫妻と会っていた。
共通の友人が結婚するのでお祝いに贈る物を相談するためだ。最近出来たビルの１階
にあるオープンカフェは開放的でお洒落な雰囲気だった。

「じゃぁ～みんなで贈る物はあいつらが欲しがっていたＤＶＤレコーダーで決まりだな」
「うん」陸・由香にはまだ功一と別れた事を話せていなかった。
由香が突然思い出したように聞いてきた。
「綾香。最近古川さんと逢えている？」
綾香はあの日の事を思い出す。
（別れた事、言っておいたほうがいいよね）

「あのね、実は」
「あは、こんにちは～～」
歩道に背を向けて座っていた綾香の後ろから聞きなれた声がした。
楽しそうに話
しかける声は今一番聞きたくない声だった。ユリが功一とテーブルに近づいて何事も
無かったかのように二人は席に座る。とっさに二人の顔を見たくなくて顔を逸らした。
（どうして？ここにいるの？！）

ユリが綾香の顔を見る。
「あは。今朝、由香さんに電話したらぁ。今日ここで綾香さんとお話するって聞いて来

ちゃった」と無邪気な顔で微笑んだ。
（私と功ちゃんが付き合っていたこと知らないの？功ちゃん話していないの？！）

功一は綾香の顔も見ずに何事もないかのように振舞っていて怒りがこみ上げる。
（信じられない、どういう神経しているの？！）

ユリと功一が二人揃って現れた事に陸夫妻も場の雰囲気がなんとなくおかしい
事を察した様子だった。
「ごめん、ちょっとお手洗い」
立ち上がり化粧室に入るとこみ上げる怒りを如何したら良いか分からずに鏡に
向かった。後を追うようにユリが化粧室に入って来くる。顔を合わせないように化
粧室を出ようとドアに手を掛けた。

「綾香さん。まだ気にしているの？」
「え？」

「あは、だって～顔怖いんだもぉん、功ちゃんがぁ～ユリを選んだからって当たらな
いでほしいなぁ～」と前髪を直しながら鏡を見て微笑んだ。

「・・・当たってなんていないわ」

（この子知っててここに来たの？！）

「あはは。綾香さんがさぁ～どんな顔するのか見てみたくってぇ。

こう言うのって何
回しても楽しいのよねぇ～」その可愛い顔からは想像も出来ないよ
うな言葉がユリの
口から出た。

「なんですって？！」

綾香の足の先から顔まで舐める様に横目で見ると笑い混じりで言う。

「功ちゃんがさぁ～３０過ぎたおばさんよりも若い子が良いってぇ、
ユリのほうが良
いって言うんだもん」

「何て思おうと勝手だけど、私にはもう関係の無いことよ！あなた
達だって好きだ
から付き合っているんでしょ？」と言うとユリは弾ける様に笑った。

「きゃはは。好き？！功ちゃんは確かに嫌いじゃないけどぉ」
「このバックね。ヴィトンの新作なんだぁ～。おねだりしたら買っ
てくれたのぉ。功ち
ゃんて社長さんでしょぉ？だから付き合ってるの。お金持ちだしね
ぇ～。理由も無しに
わざわざおじさんと付き合うわけ無いじゃん」

ユリの口から出る言葉が信じられず、あっけに取られた。

（何でも買う？！こんな子に、そんな事の為に私！）

ユリの顔を殴りたいと思った。感情に任せて振り上げようとした手
をきつく握り締める

と無言で化粧室を出た。

（この子と言い争っても無駄だわ。終わった事だもの、そう終わった事！）

自分に言い聞かせて怒りを抑える（もう帰ろう、これ以上ここに居たくない！）

そう思い陸たちが待つテーブルに戻った。事情をまだ知らない陸たちに心配

を掛けたくなくて功一から目を逸らす。

「ごめん、ちょっと用事があってそろそろ帰るね」

バックを片手に席を離れようとした。

「あ、じゃぁ俺らもそろそろ帰ろうか」陸と由香も立ち上がる。

お金だけテーブルに置いて席を離れようとしたがタイミングを逃してしまった。

功一とユリの前にいるとジワジワと怒りが蠢くのを感じる。会計を済ませようとレジに

向かうと途中で携帯電話の着信音が聞こえた。綾香のバックからだった。見ると堅がく

れたシルバーの携帯電話が鳴っている。

（あ、音消すのを忘れていた）慌てて取り出す。

「ごめんちょっと待ってて」と陸に話し電話に出る。

【もしもし】

堅の優しく柔らかい口調が聞こえるとさっきまでの苛立ちが嘘のように消し飛び、何

処か安心するこの声は心を暖めた。

【今帰ってきて、社に向かっているんだ】

「そっか。おかえり」
と微笑んで答えるとユリが後ろから覗き込む。
「あれぇ～？もしかしてぇ～綾香さんもう新しい彼出来たんですかぁ～？」
電話の向こうの堅にも聞こえるような大声でユリが言った。陸たちはもちろんの
事、周りの席に座っていた知らない客も何事か？と言った顔で一瞬
此方を見た。

ユリの態度に我慢が出来なくなりそうで黙りこむ。綾香の顔をみるとユリはさらに
声のトーンを上げて笑い始めた。
「嘘ぉやだぁ～ほんとぉ～？」
【綾香？今何処？】
その声を聞いて我に帰る。
「あ、えっと堅のオフィスの通りに新しいオープンカフェが出来たの。そこにいるん
だけど」
【そうか、じゃあまたな】

とそっけなく電話が切れた。（堅に変な風に思われたかな？）
そんな風に思うと悔しくて泣き出しそうな気持ちになり電話を切った後俯いて会計
を済ませた。ユリの顔を見ると怒りを抑え切れなくなりそうだった。

（幾ら頭に来たからって、こんな所で怒鳴ったら陸と由香が驚く）

自分に言い聞かせ早くこの場を離れようと陸たちの後に続いて外に出た。

先に出た陸たちがざわめき、何かを話していた。

「すげーリムジンだよ」

「あ、ほんとうだ。なんでこんな所に停まっているんだ？」

「すごぉ～～い・高かそうな車ぁ～いいなぁ～」とユリが功一を見た。

功一はユリを見て「高いよ目が飛び出るくらい」と笑う。

綾香には見覚えがあった。

ドライバーが降りてきてドアを開ける。

（このドライバーさんもしかして）心臓が大きく脈打つ。

ドアがゆっくりと開くと長い足が見えた。

薄暗い車内から体を屈ませて降りてきたのは堅だった。姿を見た途端、驚きとホッとした気持ちが入り混じり、涙が出そうになる。

（け・・ん）

黒っぽいスーツに光沢のある深いグレーのシャツ、いつものノーネクタイで革靴を

履きさりげなく身につけている時計はスイスの一流職人が半年以上掛けて部品か

ら作る1点物のクォーツだ。
堅が降り立った歩道は一瞬にして空気が変わるように感じた。その上質身なりは
内側から放たれている知性が映し出されている様だった。

綾香の目の前居る陸たちがざわめく。
堅に一度会っている筈の彼らも、だいぶ前のことで「どっかで見たことあるよな？」
と言った感じだった。堅はゆっくりとした足取りで綾香に向かって真っ直ぐ歩いてきた。

陸たちの間を通り過ぎると目の前に立つ。綾香は堅に逢えた喜びとさきほどまで
の泣き出したいくらいの苛立ちは何処かに消え、ホッとする気持ちで胸がいっぱいに
なった。堅は鋭い視線を緩ませいつもの優しい顔で微笑み静かに口を開いた。

「偶然だな」

あふれ出しそうな嬉しさを堪えて言葉にならず綾香は笑顔になる。

「あは・・堅」

「でも、どうしてここだって分かったの？」
と聞くと意味あり気に目配せをしてニッコリ微笑んだ。
（もしかして、このビルも堅の・・・）
「おかえりなさい」
直ぐ横でざわめく陸たちを見て綾香と堅は顔を見合わせた。

「あ、えっと。紹介するね」
そう言ったものの、なんて言ったら良いのか考えた。
「綾香さんとお付き合いしている。関村堅です」
（え?!関村って名乗って大丈夫なの?）驚いて堅の顔を見る。
陸が驚いた顔で大きく目を開くと何かを思い出したように口を開いた。
「あれ・・そういえば関村ってこの前、あ!まさか!関村グループの社長!さん?!」
と叫ぶと周りの客のざわめく声が聞こえた。
「え?!関村社長?!うそ!どこ?」
（こうなる事分かって名乗ってくれたんだ）
何の躊躇も無く恋人と名乗ってくれた堅に嬉しさを感じていた。
「あ〜〜〜!もしかしてぇ前に空中庭園で逢った事あるぅ」
耳を突くような大きな声がしたかと思うとユリが堅に駆け寄り瞳をキラキラさせて
見上げた。
「私、綾香さんの友達のユリって言います。覚えていますかぁ?」
とニッコリ微笑んだ。
ユリの態度にムッとしたが、さっき化粧室でユリが話していた事を思い出し堅の顔が
見られない気持ちで目を逸らした。
（【だってぇ〜、おばさんより若いユリが良いって言うんだもん】）
ユリは若いだけじゃない、同性から見ても綺麗で可愛かった。

「綾香。今日はこれから予定あるの？」と優しく綾香を見た。

（え？）

「ううん・・帰ろうかなって思っていたけど・・」

（もしかして今ユリちゃんを無視した？）

普段の優しい堅からは想像もできない行動だった。まるでユリが存在していないかのように振舞う。ユリは驚いて固まった様子で立っていた。

「じゃぁ。僕も仕事が終わったから一緒に帰ろう」

「う、うん」

「陸、由香。後で詳しく話すね、今日はもう帰るからまたね」

「あ・・うん・・またね」

大きく口を開けたまま呆然とする陸達を残し背を向けた。

見上げると堅はニッコリ微笑み腰に手を添えるように車のドアにエスコートされた。

ドライバーがドアを開けると二人が乗り込む。ドアが閉められると車は静かに走り出した。

柔らかなソファー調のレザーシートに身を沈ませて直ぐ横に座った堅を見た。その表情はなんとなく微笑んでいるようにすら見えてホッとして安らぐ気持ちを感じた。

堅が運転席と後部座席を分けるパーテーションを手元で操作すると

ゆっくりと仕切
りが閉まり車内と言うよりリビングに居るような空間の中で二人きりになる。
視線を感じたのか堅が優しい顔で微笑んだ。

（堅は無口な人だ。多くを語らない。でも気持ちも、優しさも凄く伝わってくる）
そんな風に思うと愛しくて心が熱くなるのを感じた。

綾香との距離が僅か１０センチ。堅は久しぶりに綾香に逢えて幸せな気持ちだった。
瞳を見ると仕事の疲労感もストレスも何処かに消えうせ名前を呼ぶと堅を見上げて
ニッコリと微笑む。その笑顔は何よりも安らぎを感じた。

「今日は一緒に夕食を食べようか」

「うん」
と満面の笑み。その顔があまりにも可愛らしくて顔がにやけそうになる。
「じゃぁ、今日は僕のお勧めの店に行こう」
「あは、楽しみ～」
突然何かを思い出したように堅の顔を見上げて口を開いた。

「あ！家に戻らないと猫にごはん」
「あはは。じゃぁ僕の家に行って車乗り換えてから行こうか」と笑った。
初めて展望室で綾香に対する特別な想いを感じた時の事を思い出していた。

（あの時も、猫にご飯で帰ったんだよな）苦笑いすると今隣に座っている綾香との
心の距離が随分近くなった事を嬉しく思った。

第15章　共有

大きな交差点をシルバーメタリックの車がボディに街並みを映し込みながら優雅に
曲がる。さらに少し狭い道に入ると急な上り坂を上った。助手席の綾香が口を開く。

「あ、そこのマンションだよ」と指差して堅を見た。

堅は綾香の顔をチラッと見ると少し微笑んでマンションの前で車を停める。

「まってね、直ぐに戻るね」

微笑むとバックを片手に降りる準備をした。

「綾香」

「どうしたの？」不思議そうな顔で体勢を戻す。

「いや、その」堅は目が合うと眉を顰めて視線を彷徨わせる。
「どうかした？」何かを言いたそうな顔で居る事が気になって聞いてみる。
「・・・いや、なんでもない」
口籠るように黙り込むとハンドルから右手を外して口元に当てフロントガラスに
目を向けた。

「ほんとう？」

「あぁ」
その態度は気になったが狭い路地で何時までも停車しておくわけにも行かず
「じゃぁ～直ぐに戻るね」と微笑んで車を降りた。

一人になった車内で堅は心の中で悶々としていた。
（何をやっているんだ、僕は！）
そう思うと顔から火が出るんじゃないかと思うほど頬が熱く感じた。
（今日は綾香を帰したくない、だから1、2日帰らなくてもいいように猫に餌とか。
着替えとか言いたかったのになぜ言えない？！）
ハンドルにもたれ掛かり頭を抱えると綾香の顔を思い出した。
（あんな風に何の警戒心も無く、あどけない顔で見られると言えなくなるんだよな。
言い出してどんな風に思うだろう。やましい事じゃないのに一緒にいたいのに）
今迄。感じた事の無い気持ちを処理しきれずに心の中で持て余していた。どうしたら
良いのか分からなくなるまで相手を好きになる事も、自分から相手に気持ちを伝えた
のも生まれて初めての経験だった。

（この年になってこんな風に思うことになるなんてな）
そう思うと自分の不甲斐なさを感じながらもくすぐったい気持ちが込み上げた。

部屋に戻って猫に餌を与えながら綾香は堅が何を言いたかったのか考えていた。

（堅、何を言いたかったのかな）考えながらガラスの器に猫餌を入れた。

ふと、堅がニューヨークに行く前にいった言葉を思い出す。
【休暇が取れそうなんだ、そしたら一緒に過ごせる？】

（一緒って、過ごすってつまりお泊りって事？！それってさっき言いたかったこと？）

堅の顔をパッと浮かぶように思い出す。

（イヤ！イヤイヤ・・待て待て私！あはは、まさかね。食事って言っていたし。それに
お泊りのつもりで着替えとか持っていったらドン引きされそうだし
私ってば何考えている
んだろう～、あーもぉーー！何悩んでいるんだろう。恥ずかしいなぁ）
「あ～～、変な事考えているうちに餌てんこ盛り、これじゃぁ2日分くらいあるよ」

（2日かぁ意識しちゃうよぉ～。バカだなぁ私）そう思って苦笑いした。

「今迄、こんな風に考えることなんてあったかなぁ～？どうして堅の事だと分からなくなるんだろう」

堅を待たせていることを思い出してバックを掴むと慌てて部屋から出た。

戻ってきた。（やはり、何も持ってこないか）顔に出さないように思いながら

乗り込んだ綾香に微笑んだ。

「ごめんね、おまたせ」とニッコリ堅を見た。

「いいよ、じゃぁ行こうか」

その笑顔を見ると自分が何を考えているのかと恥ずかしくなった。

車は静かに走り

出し街の中心部に近づく、綾香と最初に再会した展望室のあるビルに着いた。ビル

の裏側から車を入れるとそこには堅専用の駐車スペースがあった。

車から降りると直ぐにエレベーターが見える。

「ここも堅専用なの？」

堅は車のドアを手元で操作してロックすると綾香を見て微笑んだ。

（うひゃ～なんかつくづく、世界が違うって思い知らされちゃうな

ぁ）
そんな風に思って少し寂しさを感じた。エレベーターに乗り上昇するとまた驚く。
エレベーターの壁がシースルーになっていて上昇と共に街の夜景を望めるの
だ。目をパチパチさせて堅を見る。

「すごぉい〜！綺麗だね」

きらめく無数の明かりが次第に小さくなり群れを成して輝いているように見え、宝石
箱の中に迷い込んだような気持ちになる。
そんな綾香を見て微笑み、初めて友達になってほしいと言った日の事を思い出して
いた。（【時々、ここで話しでもしない？】って僕が言って綾香が
【え？ここで？人が
いっぱいだよぉ〜これからは】って交わされたんだよな）思い出して苦笑いした。

上昇するエレベーターの中で透明な壁に両手を当ててはしゃぐ綾香を見る。
（あの時。工事中だったこのビルのレストランに食事できるスペースや夜景の好き
な綾香に見せたくてこのエレベーターを追加工事した事を思い出すな、何時かきっ
と一緒にこられると思って）

こうして一緒にこの場所に来られた事が堅にとって特別な想いがあった事を綾香
は知る筈も無く、夜景を見て瞳をキラキラさせている。

展望室の1フロアー下にエレベーターが到着してドアが開いた。降り口の左右にウ
エイターと黒服の男性が4人立っていて2人を見ると「いらっしゃいませ」と頭を下げ
た。少し戸惑う綾香はさりげなくエスコートされてエレベーターから降りた。

部屋は広く30帖はありそうだ。窓は前面ガラス張りで夜景が一望できる。柔らかな
暖色系のライトが上品に室内を照らし外の夜景を邪魔しないように計算されていた。

窓際に4人がけのテーブルが1セットありテーブルクロスの上には綺麗にセットされ
た食器やグラスが室内のライトに照らされ上品に輝いて見える。

慣れない空間にいきなり緊張してきたが外の夜景を見るとまた心が和んだ。
テーブルに着いても落ち着かず「ここって・・レストラン？」と堅の顔を見た。

「うん、レストランは向こうにちゃんとあるよ」

「ここは僕が食事をしようと思って作ったんだ」
と言いながら（まさか、綾香を連れてきたくてとは言えないよな）
そんな風に思った。

「ここも堅専用？」と堅の顔を覗くように聞く。

「そのつもりだよ」

（あは。そのつもりってなんか凄すぎて頭真っ白）苦笑いすると堅が優しく微笑む。

「綾香、ワイン何飲む？」

「え？堅車だしいいよ」

「いいよ、少しくらい大丈夫だろう」

「だめだよぉ～、飲酒運転は良くないの！」と頬を少し膨らませた。

その顔が可愛くて堅は苦笑いした。

「じゃぁ、後で僕の部屋で飲もう」と笑いながら、つい口走ってしまった事をほんの少し悔やみながらも綾香の反応を窺ってドキドキした。

「あは。うん」

戸惑いながらも頷いた綾香を見て今すぐにでも引き寄せて腕の中に抱きしめたい気持ちが渦巻いた。

返事をしてしまった後に緊張が身体を駆け巡る。チラリと堅の顔を見ると優しさが溢れたその顔から覗く瞳が、部屋の照明のせいか夜景の煌めく灯りのせいか深く優しい中にも妖しい輝きを放っているように見える。心の中で突きあがるようなときめきが渦巻くのを感じた。

（変に意識しちゃうよ。堅はそんなつもりじゃないかもしれないの

に)

運ばれてくる食事はどれも美味しく、食べたことの無い高級食材がふんだんに使われていた。

「美味しいね」

子供みたいな顔で微笑む綾香。

「そうだな」

普段と変わらない食事でも綾香と一緒にすることでこんなにも美味しく楽しい事だと感じていた。向かい合って座る綾香に触れたくて抱きしめたくて切なさが溢れ出しそうだった。

食事を済ませて車に戻ると車内で体がくっつきそうになる。意識しすぎて堅は感じた事の無い緊張感に包まれていた。綾香がバックを足元に置くために少し前かがみになる。

「綾香」

綾香が顔を上げながら堅の方を見て「なぁに?」と体勢を戻すと二人は見詰め合う。

距離がぐんと近くなって綾香の心臓が大きく脈打つと堅の瞳の光が妖しげで切なげ

で吸い込まれそうになった。
綾香の唇が可愛らしくて愛おしくて無意識に指で触れていた。
唇をなぞるように触れる指先。見詰め合った綾香の視線が驚きと戸惑いで彷徨うと
堅は指を頬に移して顔を近づけた。

唇まで数センチの距離で綾香の瞳が静かに閉じたのを確認してからそっと唇を重
ねる。唇はそっと触れ合うように次第に密度を増して絡み合う。気持ちを確認し合
ってから仕事が忙しくて触れ合うことすらままならなかった。
触れたくて抱きしめたくてじれったい気持ちを抑えながら過ごした数日間。

（ずっとこうしたかった）堅は強く想うと唇を重ねたまま綾香の髪の毛を撫でるよう
に体を引き寄せる。唇から吐息が漏れると刹那が堅の体の中に溢れ出す。
堅は唇をゆっくり離すと綾香を抱きしめた。

「綾香。帰したくない」

堅の囁く声が耳元で聞こえる。また鼓動が大きく体を揺らすのを感じながらも食事
の時感じた戸惑いも迷いも何処かに消えうせ心の中で（堅と離れたくない）と想って
いた。

「うん」

その言葉を聞いて綾香の細くて柔らかい髪の毛を頬で撫でるように摺り寄せた。

体が離れると、恥ずかしさが綾香を襲う。シートに戻ると柔らかいレザーに身を沈ませ堅を横目で見上げた。

堅はそんな綾香を見て優しく微笑むと車を静かに走らせた。

第１６章　密度（１）

夜の街を車は静かに走り抜ける。緊張と感じたことが無いほどの高揚感が綾香の中に渦巻いていた。ハンドルを握りしなやかにギアを操作する堅を横目で見上げるとその顔は何処か優しげでホッとする。

車がウィンカーを点けて路肩に寄ると静かに停まった。

（え？まだ堅のマンションより大分遠いけど）

そんな風に思っていると堅は優しく綾香を見た。

「少し付き合ってくれる？」とニッコリ笑い車から降りた。

「え？」

車の外をキョロキョロ見ると堅が回りこんでドアを開ける。不思議に思いながらも車を降りると手を引かれて車の直ぐ横にあるショップに入る。照明が眩しく照らす広い店内は2階まで店舗のようで幅の広い階段が店の奥にある。女性物の洋服やバックに靴、よく見るとブランド品でセレクトショップのようだった。

「いらっしゃいませ」

華やかな声が聞こえ店の奥から女性が出てきた。声の持ち主は黒のスーツを着て胸元にネームプレートをつけ綺麗な顔立ち、モデルのようなスタイルの４０歳前後の女性だった。

堅を見た途端「社長」と深々とお辞儀をする。

「今日はプライベートで来た」

店員に近寄りなにやら耳元で話しかけて女性は何度か軽く頷いている。

綾香は何がなんだか分からずに店内をキョロキョロ見ていた。

（こんなすごいお店、入った事ないよ）

すぐに目の前に店員が歩いてきて雑誌モデルのように綺麗に立ち止

まる。

「いらっしゃいませ、こちらへどうぞ」と階段付近に手を差し向けて完璧な
ほどの営業スマイルでニッコリ微笑んだ。
「え？」

訳分からず堅を見ると優しく微笑む。
「大丈夫だから、その人について行って」
店員について2階へ上がる。階段は広く、磨き上げられ店の照明が映しこまれて
上品に輝いて見えた。
2階に着くとそこにはルームウエアー、パジャマらしき物から下着がぎっしり並んでいた。フロアー中央の陳列棚まで来ると店員が立ち止まりクルリと振り返る。

ニッコリ微笑み「サイズのほう測らせて頂きますね」と言ったかと思う
と呆然としている綾香の体に手際よくメジャーを回す。

アンダーバスト、トップバスト、ヒップと測り終える。
「お好きな色はございますか？」
「えあ、えっと白とかピンクとか・・」
とたどたどしく答えると店員はニッコリ微笑む。フロアーの中を無駄の無いうごきで歩きながら手際よく下着やルームウエアーを何点か手に取る。

すぐ横の少し低い陳列棚の上に並べた。目の前に置かれた下着の値札が
チラリと見えて、つい目が行く。

（5っ5万?！パンツとブラで?！）目を点にしていると。
「如何ですか？」

「えっ、あ」と驚きで答えにならないような返事を返す。
「え、あのそれ・・・」（まさか、買うとかじゃないよね？）
「では、下のほうでお待ちください」

と並べた商品を丁寧に集めながらニッコリ微笑んだ。ピカピカの床を歩き階段の足元を見ながら下りる。

（あんな高価なもの。まさか買うつもりじゃないよね？聞いてみなきゃ）
堅が何かを手にしていた。綾香が近寄り堅を見上げる。
「堅。あのね」
「これ着てみて」
「え？あ、あのね」
戸惑う綾香の両手に強引に服をのせて直ぐ横にある試着室に入れられた。
（どうしよう）腑に落ちないと言った顔をしていると。
「一応着てみて、似合いそうだから」と微笑んで試着室のドアを閉めた。
堅の強引さや馴染めない雰囲気の店内に戸惑いながらも言われるままに
手渡された服を試着すると誂えた様に体にフィットした。桜色で手触りが
柔らかく、光沢があり上質なシルクで出来ていた。
胸元が少し深めのスクエア型に開いていて、レースが可愛くあしらってある。胸の直ぐ下が絞ってあって小さなリボンが付いている。布

が何
枚も重なっていて、ふんわりと膝まで丈があった。
見た目が重そうなのに凄く軽くてフワフワしている。（ドレスみたい）
あまりにも綺麗な服に見とれていると堅の声がした。
「着られた？」
「う、うん」
「あけてもいいかな？」
ゆっくりとドアが開くと目の前に堅が立って此方を見下ろしていた。
綾香を見るなり白い歯を出してニッコリ笑い。
「似合うな」と呟く。
堅の笑顔で胸を揺さぶられるようなトキメキが襲うがどうしても馴染めない空気に耐えられず切り出した。
「堅、お店出よう？」
「？良いから、他のも着てみて」
と優しく言うと手早くドアを閉めた。どれも可愛くてとても綺麗なデザ
インだった。
（パンツとブラで5万でしょ？この服値札付いていないけどきっと凄く
高いのよね）等と思いながら自分の服に着替えて試着室を出る。
試着室から出ると先ほどの店員が堅の横で待っていた。手際よく服を試着
室から出すとそのまま手に取り店の奥へと消えていった。ふと堅の横顔を

見上げる、高級店でこんな風に洋服を選ぶ彼がまるで知らない人のように
感じた。
（なんだか慣れている）
そんな風に思うと馴染めない場の空気と堅が自分とは全く違う感覚を持っている事に寂しさを感じた。奥から先ほどの店員が手に大きな紙袋を2つさげて現れると堅に手渡す。
「行こうか」と優しく話しかけられて店から出た。
綾香が車に乗ると堅は後部座席に紙袋を乗せ運転席に乗り込む。
思い切って話しかけた。
「堅さっきの洋服って買ったの？」
「うん、着替え必要だろ？ドレスは後で届けさせるから」
と優しく微笑む。その笑顔は優しかったが心は寂しさで溢れていた。
（こんな風に、私が頑張っても手が届かないほどの高価なものを何の躊躇も無く買うんだ）
堅を好きになればなるほど高価なものを買い与えられる事が綾香にとって堅との距離を思い知る事だと実感していた。
（本当に私、堅と違いすぎる。高級レストランにプライベートスペース
を持っている堅も、こんな風に買い物しちゃう堅も私には遠い存在だよ）
そんな風に思うと切なくて涙が出そうだった。
「綾香？どうした」堅が不思議そうに顔を覗く。
「着替えなら家に戻ればあったのに」少し俯いて答える。
「はは。僕の家に置いておくのも必要かと思ってさ」
その一言、一言が綾香の心に重く圧し掛かる。
（堅は私の何処が好きなんだろう）
「堅私ね、こんな風に買って貰うの好きじゃない」

堅の顔が見られないまま俯いて言った。
「え？」
綾香の反応に堅はまた戸惑いを感じていた。
（今迄、他の女に何か買うと喜んで礼言われたのにどうしてだよ！嬉しくないのか？綾香？）綾香の横顔は俯いていて髪の毛が頬を隠し表情が窺い知れない。不測の事態にどうしたら良いのか分からないで居た。
「綾香？」問いかけも綾香は俯いたまま。
（私ったら、どうしてこんな風に思うのかな？堅がお金持ちだって始めから知っていたはずなのに、堅をどんどん好きになる。でも堅を知れば知るほど、堅がすごい人だって思えば思うほど相応しくないって思い知らされているみたい）
そんな風に思うと、どうしようもないほど寂しくなった。
「ごめんね」
堅は黙って綾香の横顔を見ていた。
「堅がせっかく買ってくれたのに」そういい終わるとまた少し黙る。
「こういうの、慣れてなくてなんか苦手なんだ」俯いたままぎこちなく笑う。
「だめだね・・・なんか場の空気読めないよね、私」
と言い終わると精一杯微笑み堅を見た。
堅の顔は眉を少しだけ顰めていてその瞳は切なさで溢れていた。
（そんな顔しないでよ、堅が遠いよ）そう思うと涙が出そうになる。
（僕は。他の女達と違うから綾香を好きになった。それなのに、いつの間にか
その女達と同じように扱っていた。自分の考えばかり押し付けて綾香の気持ち

なんて考えていなかった）
「すまない。綾香を困らせるつもりじゃなかったんだ」と呟くように言った。
「ううん、私もごめんね。なんだか・・・」
（なんだか私、堅に全然相応しくないよ）

最後まで口に出来ず心の中で思った。胸を締め付けるような痛みが綾香
の心に走る。切なくて今にも泣きそうだった。
「今買ったのは着てくれるかな？凄く似合っていたし」と申し訳なさそう
に言うと綾香は少し涙を溜めた瞳で堅を見上げた。

「うん。ありがとう」

第１６章　密度（１）（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありませんでした。今後ともＡ　Ｓｏｎｇ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕをよろしくお願い致します。

第16章　密度（2）

堅は部屋の灯りを点けた。間接照明が柔らかく室内を照らし奥にあるカウ
ンターのライトがつくとまるで貸切りのお洒落なバーにいるような錯覚に
陥った。リビングの大きな窓には夜景が広がっていて綾香は部屋に入るな
り眼下に広がる夜景を見て微笑んだ。
「わぁ～綺麗～」
その顔を見て堅はホッとしていた。泣きそうな顔だった先ほどの綾香を
思い出し切なくなる。綾香が堅との違いに戸惑い悩んでいるのと同様に
堅もまた綾香に対してどう接したらよいのか考えていた。
これほど強く女性を愛した経験が無い堅にとって愛しく思えば思うほど
気持ちが空回りしてしまう。困らせたくない幸せにしたい。その笑顔を
守りたいと思うのにその手段が分からないでいた。
「前来た時は雨だったけど、今日は晴れていて綺麗に見えるね」
と瞳をくりくりさせて隣に立つ堅を見上げると優しく微笑む。
「何か飲む？」ゆっくりとした口調で話しかける。
その瞳が夜景に照らされて煌めいて見え、綾香はまた堅を意識して
緊張した。
「あ、うん」とぎこちなく微笑む。
（やだっ、なんか意識しちゃうよぉ。緊張でトイレ行きたくなって

きた）
「あ、化粧室借りてもいいかな？」
何気に言った言葉を口にした後、堅の顔を見てまた緊張する。
堅はいつもの優しい微笑みで綾香を見た。
「じゃぁ、ついでにシャワー浴びて着替えてきたら？」
さりげなく言ったつもりの言葉が思いのほか大胆だったと綾香の顔を窺う。
（なんか。不自然だったな）
「あ、うん」（やだ、なんか余計に緊張）
綾香が俯いて頷くと堅は先ほど買ってきた紙袋を手渡す。
「バスルーム分かるよね？」
「うん」

返事をするつもりで堅の顔を見るとその瞳が妖しげでまたドキドキした。
気持ちを落ち着かせようとトイレに入る。洗面所にある大理石で出来たカ
ウンターにもたれ掛かると深呼吸して鏡を見た。
（顔が赤いよ～）ふと、体に汗をかいている事に気がつく
（今日は緊張の連続で、そう言えば汗でべとべとだぁ）
シャワーを浴びて髪を乾かし体を拭くとバスタオルを巻いて袋を開けた。
下着やルームウエァーが何点か入っていてもう一つの袋には部屋用のミュールが2足入っている。下着を身につけてルームウエアーを着る。

白の上質なシルク。全体的にゆったりとした感じだったが胸元が少し大きめに開いていてレースが重なるようにあしらってあり、ウエストのラインから下は体の線が綺麗に出るデザインだった。
（これってルームウエアーって言うよりも、ワンピースだよね？な

んか
お姫様チックで私のイメージに合わないかも）そんな風に思いつつおそ
ろいの色の可愛いミュールを履いた。
緊張感に包まれたままリビングに出る。
足元を柔らかな光に照らされ、広いリビングの奥にあるバーカウンターに
ゆっくりと歩く、堅がカウンターの中で何かをしている。どんな反応をさ
れるか少し心配になった。
（似合わないとか思われたらどうしよう）
深呼吸をして一歩一歩ゆっくりと近寄る。堅は綾香を見ると真顔のままカ
ウンターから出た。
（やだ。なんだか、やっぱり似合わないのかも。堅、真顔）
堅の目の前で立ち止まると薄暗いライトで陰り遠目でははっきりと窺え
なかった眼差しがドキッとするほど優しく、そして妖しく輝いて見えることに気
がついた。また白い歯を見せてニッコリ微笑み「似合うな」と呟くと綾香の頭を
大きな手のひらでポンポンと優しく撫でた。
「ほんとう？」と堅の顔を覗き込むように聞く。
少し胸元が大きく開いた服の隙間から白い肌が見えて堅は緊張していた。
覗き込むように聞く顔がたまらなく可愛く見えて、抑えているつもりでもコントロールが効かないと自覚するほどにやけている事を実

感し
ていた。
「うん、似合うよ」
さらに深く微笑んで堅のゴツゴツした顔は柔らかく緩み、頬に笑窪が出来た。その笑窪が意外なほど可愛く堅がまるで子供のように見える。
「座って」
イスに座ると堅はカウンターの中に入り空のカクテルグラスをカウンタ
ーの上に置く。鮮やかな手つきでシェイカーからカクテルを注いだ。
カクテルを丁度グラス1杯分きっちり注ぐと、ゆっくりと滑らせるように差し出す。
「あは、カクテル作れるんだ」
その手つきも感心したが意外な一面を見られて嬉しさがこみ上げる。
「酒は好きだからね」と優しく微笑む。
「それ、飲んで待っていて僕もシャワー浴びてくるから」
少し俯いてカクテルグラスを口に近づけると、その言葉を聞いて堅の顔を
見上げた。目が合って恥ずかしくなる。（なんだか私意識しすぎ）
「うん」
と微笑むと直ぐに俯いた。　カクテルは淡い綺麗なブルーで微かに甘く
柑橘系の味がした。
「美味しいなんて言うカクテルかな？」
グラスから唇を離して一人になった広いリビングを改めて見回す。
（広いなぁ～。これってどのくらい広さがあるんだろう？さっきのレス
トランの倍以上はあるよね）

家具や観葉植物一つ一つが間接照明によって上品に照らされ、まるでショール
ームに居るような気分にさせる。一面の大きなガラスからの望める夜景がこの
部屋にはまるでインテリアの一つの様に輝いて見える。

（お金も掛けてあるんだろうけど厭らしさを感じさせない、シックで上品で凄
くセンスがいい）

バスルームの方からドアが開く音がした。カウンターに腰掛けたまま回転するイスに座り振り返ると、白い襟がついてゆったりとしたシャツ
とおそろいのズボンを着たラフな格好の堅が歩いてきた。髪がセットしていない
ままの洗いざらしで少しだけ幼く見える。いつもと違う姿にまた胸が高鳴るのを
感じた。

歩み寄り近づいてくる堅は綾香の視線に気が付くと笑顔になる。
「おまたせ」と微笑んでそのままカウンターの中に入り、空になったグラスを下げてシェイカーに手際よく何かを入れて振った。
別のグラスに葡萄色のカクテルを注ぐと静かに差し出す。
「ありがとう」
「さっきのカクテルってなんて言うの？」

「これはカシスソーダー。さっきのはオリジナルだよ」
「オリジナル？すごい～作れるんだね」
「綾香をイメージして作った」悪戯気に笑う。
「あはは、私のイメージ？ってどんなだろう？」

笑ってから首を傾げる。堅は綾香を見て不敵に笑うと。
「聞きたい？」と綾香を見つめた。
「意地悪だなぁ～、んー聞きたい！」堅の覗きこむ様に身を乗り出した。
堅は綾香の顔を見て、少し真顔に戻ると意地悪な顔で
「やっぱり、教えない」と笑った。
「なによ、それぇ～」（堅やっぱり意地悪）と少し頬を膨らませる。
「あはは。そう言う事は言わない主義」と白い歯を見せて笑う。
「聞きたい？って言うんだもんっ」とさらに頬を膨らまして堅を見ると
「じゃぁ～私も堅のイメージ言わない！」とグラスに口を運んだ。
堅はロックグラスに氷を入れてバーボンを注ぐとカウンターから出て隣に腰掛ける。
「それは、聞きたい」とマジマジと綾香を見た。
その距離が近くて、子供みたいに瞳を見開いて顔を近づける堅が可愛くて
思わず噴出しそうになる。
急いでグラスから口を離すと「聞きたい？」と少し上目使いで堅を見た。
「うん！」と普段の堅からは想像も出来ないような顔で頷く。

「あはは、内緒～！ぜーったい言わないもん」
「・・・意地悪だな」
堅の顔がふと真顔になり戸惑った。その瞳がまた妖しくそして深い優し

く煌めいている。隣に座る堅との距離が近い事を急に意識し始める。視線を逸らすと、少し膝が堅に向き合っていたのに気がつき直ぐに正面
を向いた。カクテルを口に運び胸に突き上げるように感じる高鳴りを抑
えようと必死になる。平静を装いながらも横顔に視線を感じていた。体を揺らす胸の高鳴りはグラスを持つ指先にまで伝わる様で微かに震え
ている。（やだ。急にドキドキしてきちゃったよ）
「綾香」
「な、なに？」

（なんだか堅の顔見られないよ）
そのまま正面を向いてカウンター奥の棚に並べてあるアルコール瓶に目が行く。

「綾香どうかした？」
「ううん、どうもしていないよ」

ぎこちなく笑うとグラスを置いて手を膝の上に置いた。不自然なほど堅を見ないように視線を逸らしたまま。

堅は綾香の右手をそっと握る。
「震えている」
そう言って口元まで運ぶと、唇を押し当てるように優しく手の甲にキスをした。
驚いて堅を見るとまた不敵に笑って「やっと僕を見てくれた」そう言って悪戯
気に見た。

その瞳に吸い込まれそうで堅と見つめあったまま視線が外せなくなる。
少し笑顔が消えるとその表情は驚くほど切なくなった。軽く眉を顰めて
瞳は潤んでいて唇は寂しげで。顔がそっと近づくとそのまま逃げられなくなる。
触れ合わなくても肌の温度を感じ取れるほど近づくとそっと目を閉じた。
少し酔っているせいか堅の唇が激しく動く。下腹部から熱くこみ上げる
何かが瞬間で全身に行き渡ると、唇の隙間から吐息が漏れた。

頭が真っ白になり何も考えられなくなる。絡み合う唇がほんの少し離れ
ると堅が呟くように言う。
「綾香、僕の肩に手を回して」
言われるままに両手を肩に回すと堅の唇がまた激しく絡みつく。
そのまま堅が立ち上がりながら、綾香の膝の裏に手を入れて持ち上げると軽々
と抱きかかえられ腕の中に居た。驚いて唇が離れる。胸に顔を埋めたまま下を
見て慌てた。
「えっ、重いよ?！私?」
（やだ。どうしよう本当に重いのに）
恥ずかしくて体が硬直するように力が入る。堅の瞳が優しくそして妖し
く煌めいていてまた戸惑うと堅は微笑み、そのままカウンターから離れ
てリビングの奥に歩き出した。

安らぎを覚える堅の暖かい温もりが伝わってくるとその心地よさに力が抜けて胸に顔を埋めた。
薄暗い部屋に入り、足元の小さなセンサーライトが点く。その微かな灯
りが漏れると広いベッドルームだという事が分かった。体中に突き動く
ような緊張感が走る。大人が４人くらい横になれるベッドにゆっくり下
ろされると仰向けになった。

堅は見詰め合うように上に覆い被さる。
体に負荷が掛からないように体は僅かに離れていたがその両手は綾香の指と絡み合い、再び唇を重ねる。

堅の体に高揚感と刹那が溢れ出し止まらなくなっていた。
切なくて、愛おしくて
（出来る事なら、綾香の体を僕の中に取り込んで一つになってしまいたい）
そんな風に想いながら唇を重ねる。二人の唇から漏れた吐息が絡み合うと
堅がそっと頬に唇を動かし、ゆっくりと耳下へと移動していく。

そのまま首筋から鎖骨へと動く堅の唇が綾香の体に心地よい刺激となっ
て伝わり意識していなくても唇から声が漏れる。
肩紐を外す堅の手の平が熱く感じ、少しずつ肌が露出していく。

気がつくと二人の呼吸が速くなり裸で何も纏わない体が重なり合った。
高揚感と切なさがどうしようもないほど二人の体に溢れる。

堅の指と唇が綾香の体を辿ると普段の何倍も敏感になったかの様に体
が反応する。下腹部を過ぎて堅の唇が下に移動すると綾香の口から
声が漏れた。
「け・・・ん」
堅は体を浮かせると綾香の左太ももを右手で持ち上げながら体を上に
移動させ、綾香の震えを押さえるように唇を重ねた。激しく絡み合
い舌
先が触れ合うと堅はゆっくり体を押し付けた。
僅かに離れた唇から綾香の艶やかな声が漏れる。
もう誰にも止められないほど高まる感情。二人の体から放たれる熱は
広く静まり返ったベッドルームに充満するように広がる。
次第に早くなる堅の動きが綾香を突き上げ激しく揺さぶり、普段の
殺伐
とも言える空気が充満している冷たく乾いたこの部屋に、綾香の甘
い吐息と
ベッドの軋む音が響き渡った。体の鼓動が一つになって二人は幸せ
な気持ちで満
たされていった。

第17章　幸福（1）

ブラインドの隙間から漏れる朝日が綾香の白い肌に当たり、堅の胸の上に
頭を乗せて静かに寝息をたてている。

堅は背中にクッションを重ね、頭を少し起こして綾香の寝顔を見ていた。
広いベッドの中央、ほんの僅かなスペースに二人は体を寄せ合う。
1時間ほど前から目を覚まし触れたい気持ちを抑えながら綾香を起こさ
ないように息を潜めていた。シーツが綾香の胸から下に掛かっていて何
も纏わない肌が触れ合い温もりが伝わる。一つになれた喜びと今まで感
じた事の無い満たされた感覚が体の中に溢れていた。

細くて柔らかな髪に朝日が当たりツヤツヤと輝いて見える。綾香の寝顔
は子供のように幼く見えて口をほんの少し緩ませ穏やかな表情だった。

（まるで、子供だな）

そんな風に想うと可愛くて愛おしくてたまらなくなる。
綾香の寝息が変わった。
　ゆっくり頭が動く「ん・・・」
綾香が目を覚ますのをずっと待っていた堅は起きたのを確認すると細く
て柔らかい髪を撫でた。

「おはよう」
胸に頭を乗せたまま、ゆっくりと堅を見ると重そうに瞬きをする。
その顔
がなんとも言えないくらい無防備で笑みがこぼれた。
目覚めて直ぐ堅が見ている。

（・・やだ、もしかして寝顔見られていた？）

意識がハッキリしてくると途端に恥ずかしさがこみ上げる。無言で
ゆっくり瞬きして顔を下に向け頭からシーツを被った。
「綾香？」
「いつから起きていたのぉ？」眠そうな口調で話す。
「1時間くらい前かな？」
「やっ、やだ寝顔見ていたの？」
「うん、ヨダレたらして大口開けて寝ていたね」と笑いながら意地悪を
言ってみた。それを聞いて、瞬間で顔が熱くなる.

「え～どうして見るのよ。恥ずかしいなぁ」とシーツを被ったまま顔
を出さない。
（今どんな顔をしているんだ？）

その顔が見たくなって頭に掛かったシーツを剥がす。
「きゃっ」
シーツを剥ぐと背中が見えた。そのまま覆いかぶさるように上に
なると綾香は仰向けになり胸元をシーツで隠す。　白い頬が紅潮して
て大きな瞳が潤んで見えた。唇が微かに震えていて堅と目が合うと
顔を
逸らし恥ずかしそうに目を伏せた。

その顔がたまらなく愛おしく、昨夜の薄暗い部屋では分からなかった綾香
の顔がどんな風に変わるのか見たくなる。

胸元にシーツを被せていた綾香の右手をゆっくり解く。綾香は恥ずか
しそうに瞳を揺らして堅を見た。
シーツに手を掛けてゆっくりと体から捲っていくと豊かな胸が露になる。
肌が露出して恥ずかしそうに目を伏せると右手で隠そうとした。
「綾香」

名を呼ぶと堅を見た。瞳を見つめて視線を捕らえると唇を重ねて激しく絡ませる。　綾香の手から力が抜けていくのを感じた。そのまま
シーツを体から外していくと白い体が朝日に照らされてベッドの上に現れた。
「見ちゃ・・だめ・・」
「綺麗だよ」
紅潮した頬が愛おしくて堅は悪戯気に微笑むと綾香の胸に顔を埋めた。
次第に息が荒くなり綾香の艶やかな吐息が部屋を満たしていく。

シャワーを浴び疲れては眠り。目覚めて食べ物と飲み物を口にしては飽きる事無くベッドで絡み合う。　愛おしくて綾香を離したくなか

った。
濃密な時間がゆっくりと過ぎ、やわらなか肌の感触と甘い声が、瞳が堅を満たしていく。
日差しが傾き始め部屋に西日が差し込むと腕の中に顔を埋めている綾香が堅を見た。
「堅。そろそろ起きようぉ」
「そうだな、何か食べに出よう」と綾香の髪を撫でる。
「堅はいつも外食なの？」
「あぁ。そうかな、でもここで食べる時もあるよ」
「え？堅の家で？」と驚いた様子で聞くと堅は少し微笑み。
「シェフを呼んで作ってもらうんだ」
「キッチンあるの？ここ」
「ああ、シェフが使うように最低限のものはそろえてあるよ」
「堅って、手料理とか食べた事あるの？お母さんとかの」
堅は少し考え込む。
「母親は僕が１０歳の時に他界して、まぁ。それまでも使用人が作って
いたけど時々キッチンに立って作っていたな」
綾香はそれを聞いてベッドから体を起こして堅を見つめ
「どんな料理？」と瞳をキラキラさせる。
「野菜が沢山入っていてスープみたいなポトフって言うのかな？シンプルな味の」
「そうなんだぁ」
「あまり、料理は上手ではなかったけどアレだけはうまかったな」
遠い記憶を辿るように瞳を輝かせて言った。
（堅って、手料理あんまり食べた事ないんだなぁ。確かに豪華な食事は
美味しいし、きっとシェフも一流の人で味も食材も完璧なん

だろうけど、なんだかそれって寂しいかも）
少し考え込むと唇に人差し指を当てた。
「ねぇ、今日私が作ってもいい？」
「え？綾香が？ほんとう？作れるの？」
「私、お料理得意なんだよ。これでも家でちゃんと作っているんだから」

得意げな顔で微笑む綾香が可愛くて笑いを堪えた。
「じゃぁ、作ってもらおうかな」
堅の顔を見てニンマリ笑うと頬に素早くキスをして「お買い物行こう！」
とベッドから飛び起きた。　その素早さに驚き目をパチパチさせていると体
にシーツを巻きつけて着替え始めた。子供のようにはしゃぐ後姿を見て笑い
がこみ上げる。

（本当に、綾香と居ると退屈しないな）

第17章　幸福（2）

都内の高級スーパーにやってきた。オーガニックや輸入食材を専門に取
り扱う店内を、買い物かごを下げて2人で歩く。隣を歩く堅の横顔をチラリ
と見上げると何時も落ち着きのある堅が物珍し気に店内を見ている。

「堅。もしかしてスーパーに来るの、初めて？」
「あ、あぁ。初めてだね」と微笑んだ。
「あはは、そっか～」（だよね～）予想通りの答えに苦笑いした。
綾香は手際よく材料を選んでカゴに入れていく、マジマジと寄り目にな
りながら真剣な顔でトマトを裏返して見たりする姿が可愛くて堅は笑い
を堪えるのに必死だった。
「何を作るの？」
「えっとね、ポトフとガーリックトースト、あとは生ハムとチーズのサラダ
にしようかと思って」

しばらく店内を歩き回りベーカリーコーナーでフランスパンを手に取りかごに入れる。
「あっ！」
「どうした？」
「生ハム忘れた～」とばつが悪そうに堅を見た。
「え？」
（さっき生ハムを置いている大きなコーナーがあってハムを見ながらあ

まりにも堂々と素通りするから、てっきりメニュー変更したのかと思っ
たが。この調子で本当に大丈夫なのか？）
そんな風に思うと笑いを堪えきれずに噴出す。
「ぶっ、あはは」
噴出す堅を見て頬をパンパンに膨らまし
「どうして笑うのぉ？！」と睨む。その顔もまた何処か愛嬌があって笑いが止まらない。
「あはは。ゴメンゴメン。生ハムな、持ってくるよ」とカゴを提げたまま直ぐ後ろのコーナーへと戻っていく。
どうしてそこまで笑われたのか腑に落ちない。
（も～あんなに笑わなくても良いのに）と思うとまた頬を膨らませた。
堅が戻ってきて「これでいい？」とかごに入れたハムを見せた
「パルシュートね、うんうん」と満面の笑み。

部屋に戻ると綾香はキッチンに入り手際よく料理を始めた。ふと視線に
気がつくと堅がキッチン入り口に立って見ている。
その顔が優しくてドキドキし、横目で堅を見上げた。
「珍しい？お料理しているところ見るの？」
「いや、うん」と戸惑いながら頷く。
（母さんに似ている綾香。死んだ時そういえば同じくらいの年だったな）
微かな記憶を思い出し母親の面影を重ねていた。
ふと電話が鳴り堅はリビングに戻っていく。視線を感じなくなると妙な
緊張感から開放されてホッとした。
（ふぅ～なんか妙に緊張する。見られていると）

「綾香、これから平尾が来て仕事の話をするから」
ジャガ芋の皮を剥いていると声がした。
「うん」
微笑むと料理を手際よく進めていく、気がつくと堅の姿は無かった。
　食器を
探してキッチンカウンターに並べ、ふとリビングを覗くとソファーに座って
堅と平尾が話をしていた。

時折メガネを片手で直しながら仮面を付けているかのように冷静に
頷く平尾。
そして、真剣な顔で話をする堅の顔。　初めて出会ったときの堅の
鋭い眼差
しを思い出していた。
（堅。仕事の時はあんな顔なんだ）
綾香に見せる笑顔とは全くの別人のように淡々と話しをている。

　邪魔をしては悪いとキッチンに戻る。一通り作り終えて後は並べるだけ
だった。
鍋を見て思った。
（ちょっと、作りすぎたなぁ）

洗い物を片付けようと振り向いた時カウンターの上
に置いていた銅製の鍋蓋を足の上に落とした。
　蓋が縦になり足を直撃する。
「いった〜〜ぁい！！」
大理石の床にバウンドして大きな音が大げさに響く。
「ガシャーーーン！！」
（あー！またやっちゃった）

料理は好きだ、でもそそっかしい綾香はよくこうして物を床に落とすことがあった。
大きな音はリビングまで届いていた。堅は勢いよく立ち上がると平尾が驚くほどの速さでキッチンに向かう。

平尾も後に続いた。
「綾香！大丈夫か！？」
大きな声で叫ぶと、床に座り込んで足をさすっている綾香に慌てて近寄る。
「あ、うるさくしてごめんね、蓋落としちゃって」

「大丈夫か？！」
「うんうん、大丈夫」と微笑んだ。
「立てるか？」
「うん」と子供のように頷くと堅は綾香の両腕を抱えるように立ち上がらせる。
「他には？何処か打ってないか？！」
真剣な面持ちで手や足をキョロキョロとチェックしている。その慌てふ
ためく様子に驚いたが、先ほどの仕事に打ち込む堅とは全く違う表情に
嬉しさと可笑しさがこみ上げてくる。
「大丈夫だよぉ～心配しすぎ～」

堅はホッとした様子で綾香を見下ろし、顔を緩めたかと思うと少し眉を吊り上げた。
「気をつけてくれ、まだ蓋だったから良いようなものの、これがナイフ
だった・・！」

と、言いかけて顔が固まる。堅の顔を見て首を傾げた。
「堅？」
堅は綾香の後ろに視線を向けたまま真剣な面持ち。
「綾香、動くなよ」
と言いながらゆっくり綾香の後ろにまわる。不思議に思い顔を後ろに
向けて視線で追うとその先にナイフが落ちていた。

僅か２０センチくらいの距離だ。
「あ」
綾香が間の抜けた声を出すと、堅は慎重にナイフを手に取りカウンターに置い
て深いため息をついた。

少し沈黙する。
「綾香、危ないだろう」
「ごめんなさい～」
「まったく、これじゃあ、危なっかしくて料理なんてさせられない」
「え～大丈夫だよぉ～こんなこと何時もだし」
つい口走ってから慌てて手で口を押さえた。
（あ、やば）
堅の顔が見る見る青ざめていく。
「あやか何時も？蓋やナイフを落としているのか？」
と、口をパクパクさせて聞いた。
「あは。う、ううん時々だよ」目を泳がせて笑ってごまかす。

「あはは！」
その様子をみて後ろから笑い声が聞こえた。
「あはは・・」
何時も仮面を付けている様に表情を変えない平尾が、口に手を当

てて笑っていた。見たことも無い慌てふためく堅と飄々としながらも子供みたいに謝る綾香のやり取りを見て、あっけに取られ笑いがこみ上
げてきたのだ。
綾香は平尾を見てから堅の顔を見る。冷静になって考えると真剣な顔で
慌てる堅が可笑しくなってきて笑いがこみ上げる。
「ぷっ、あはは」
笑い出すと堅も綾香のおもちゃみたいに笑う顔を見て釣られて笑う。
「はははは」
平尾は笑いを堪えると我を取り戻したかのように咳払いをして
「失礼致しました」と頭を下げた。その顔はまだ可笑しさが残っているようで
いつもの顔には戻っていなかった。
「いや。いいんだ」堅は笑いながらこたえる。

平尾は二人を見て思った。
（代表がなぜ、綾香さんの事になるとあんなにも取り乱されるか分かっ
た気がする）あのホームでコレットに歌を聞かせていた事、今の綾香を
見て明らかに今までの女性達とは違うことを感じていた。
（自然体で、安らぎを感じる）
綾香がふと真顔に戻り堅に話しかける。
「ねぇ、良かったら平尾さんに夕食一緒に食べてもらえないかな？ちょっと作りすぎちゃって」
堅が鍋をのぞく。
「平尾もしこのあと予定が無いなら、食べて行ってくれないか？」
「え？しかし・・」

予定は無かった。何時も業務に追われ夕食は一人で外食かコンビニ物で済ま
せる事が殆どだった。
「頼むよ、この量じゃ3日はポトフを食わされそうだ」
と笑いを堪えて平尾を見た。
「あ、ひどい～」と笑いながら堅を見てから
「平尾さんお願い」と覗き込むように見た。
平尾はまたこみ上げる笑いを抑えた。
「では、お言葉に甘えて」

堅がポトフを口に運ぶのを綾香と平尾が食い入る様に見つめた。
「あ、うまいな」と気が抜けたような返事をした。
「本当？よかったぁ～」とホッと胸を撫で下ろす。
「平尾さんもどうぞ大丈夫みたい。召し上がってください」
と、ニッコリ微笑んだ。
「僕は、毒見か」とボソッと呟くと
「あはは。冗談だってば」

そんなやり取りを見てまた笑いがこみ上げた。

（代表に仕えて12年余り今迄、こんな風に笑いあうことなど一度もな
かったな）そんな風に思うと嬉しくなった。

「ご馳走様でした」
平尾に頭を下げられ、綾香は戸惑うと
「あ。いいえ、粗末な物でごめんなさいね」とニッコリ微笑んだ。
「いいえ、とても美味しかったです」

「代表、それでは明日」頭を下げると振り返り部屋を出る。
「気を付けてな」
平尾はその言葉にまた驚き、ハッとすると振り返る。
「し、失礼いたします」
【気を付けてな】そんな言葉を掛けられたのも、もちろん初めての事だった。堅に背を向けていつもの様に部屋から出る平尾の顔が穏やかに
微笑んでいた。

キッチンで洗った食器を拭いていると視線を感じて振り返った。
「どうかした？」。
「またナイフ落とされたらたまらないからな。監視」

と意地悪な顔で笑う。
「もぉー意地悪」
と頬を膨らませ棚に食器を戻し終わると堅に近づいて笑い混じりに睨んだ。堅は綾香を抱き寄せる。
微笑む綾香が愛おしくて可愛くてニッコリ微笑んだ。　唇を重ねると、お
どけていた感覚は消えうせて体が熱くなる。堅の舌先が綾香の唇を促すように優しくなぞると唇がほんの少し開き舌先が絡み合う。
「んっ・・ぁ・・」激しい口付けに綾香の吐息が漏れる。
堅は　このままベッドへ運んで肌の感触を確かめたい衝動に駆られた。
綾香はこのまま唇を重ねていると、止まらなくなりそうで堅の唇からゆ
っくり離れる。
その瞬間が堅には、たまらなく切なかった。

「もう帰らないと」と綾香が少し潤んだ瞳で堅を見上げた。
「そうか・・」
「明日仕事だし、堅も仕事でしょ？」
「あぁ」
返事をすると綾香をきつく抱きしめた。綾香の耳元で囁く。
「送るよ」
「ワイン飲んだし、タクシーで帰れるよ？」
と腕の中で笑い混じりに答える。
「大丈夫、運転手が待機しているから」
「あは、そうなんだ」見上げて微笑むと堅は綾香の額に軽く口付けをした。

リムジンに乗り込むとパーテーションで仕切られた車内で2人は寄り添う、　左側に乗り込んだ堅が綾香の左手を握ると親指と人差し指でなぞるように指を触っていた。

柔らかいシートに身を沈ませて、くすぐったくて笑いがこみ上げた。
「あは。くすぐったいよ」
堅が笑窪を作って微笑むと綾香は肩にもたれた。

窓の外を眺めて、幸せで満たされていた休日の終わりを寂しく感じた。
（ずっと一緒にいたいな）心の中で願いながら車は静かに綾香の家へと向かった。

第18章　暗礁（1）

綾香を送り終えて一人部屋に帰るとバーカウンターに座った。ロックグラスにバーボンを注ぎゆっくりと口に運ぶと、後ろを振り返りリビング
を見渡す。ついさっきまで綾香が居た部屋。
今迄、この部屋は堅にとって唯一安らぎを感じる空間で誰かの痕跡など必要なかった。一人で過ごすこの部屋の時間が心地よかった。それなの
に綾香が居た僅かの時間が、この部屋の温度を変えてしまったかのよう
に感じた。
心地よかった筈のこの部屋の冷たい空気が今は耐えられないほど孤独を放って堅を包み込む。今までと変わらない空間なのに無性に広く感じた。
綾香が座っていたカウンターの椅子。リビングのソファー、立っていた
キッチンそしてベッドルーム。今は虚しい残像のように瞳の中に浮かんでは消える。

カウンターの椅子から立ち上がりウォークインクローゼットに足を踏み入れた。特別お気に入りの時計を入れておくチェストを開けると、古
びた小さな箱を取り出す。箱を開けると赤いベルベットの布で包まれた指輪が入っていた。
シンプルなプラチナリングにブリリアントカットされた2カラットダイヤモンドがついた指輪。これは母の唯一の形見で亡くなった時身に付けていた指輪を思い出に隠し持っていたものだった。
当時、堅が家を留守にしている間に母親が誰にも触らせないほど拘

っていた
庭も服も写真も、父親が処分してしまった。堅が自宅に戻った時には母
親を感じられるもの全てが家の中から消えていた。墓参りすら許してくれなかった父親の目を盗み、家出して墓参りに行った事が原因だった。
今ではこの指輪と記憶の断片で２０年以上前に微笑んでいた母親の顔を思い起こす事が唯一つ堅に残された母親の温もりだった。苦々しい思い出を封じ込めるように失笑すると、指輪を大事に布に包みそれをポ
ケットに入れて部屋を出た。

「フローレスで大変状態の宜しいダイヤです」

白髪で短い髪、スーツを着込んだ上品な初老の店員がルーペを片手に指輪を丁寧に戻す。老舗の宝石店の広いＶＩＰルーム。堅は応接セット
に腰掛け指輪の鑑定依頼をしていた。
「デザインを換えて、他の石を追加して欲しい」
「リメークでございますか？」
「ああ」
「それでは、デザインのほうをデザイナーに依頼しまして追加の石は
如何なさいますか？」
「時間を掛けたくない、今あるデザインで何か良いものは無いか？」
店側が用意した数枚のデザイン画から１枚の紙を手に取る。中央にダイヤを
置き両脇に少し小さめの石を幾つか配置していて綾香に似合いそうなデザイ
ンだった。

「これにしよう」
「承知致しました。指輪のサイズのほうはこのままで？」
堅は少し黙ると先ほど綾香の指の感触を思い出していた。
「何か、基準になる器具はないか？」
店員は少し考え込むと５センチほどの長さで筒状の棒が並んだ箱を持ってきた。
「こちら右端から7号～１５号までございます」
一本一本手にする。
「これにする」と9号の棒を店員に手渡した。
綾香にサイズを聞くほうが安易で確実だったが、サイズを聞くと直ぐに「指輪」と分かってしまいそうで驚かせたくて聞かないでいた。
「こちらが、サンプルの石になります」
黒いベルベットの布に小さな石が２０石ほど並んだケースを持ってきた。　淡い
ブルーの綺麗な石を目に留める。
「これは？」
店員は落ち着いた声でニッコリ微笑む。
「関村様、さすがお目が高い」
「そちらはブルーダイヤモンドでして、美しさも然る事ながら価値が大変高く、主な採掘鉱山で全採掘量の１／１００万の確立でしか採掘することの出来ない、大変希少で奇跡の天然ダイヤモンドと言われ
ております。その程度の物でも、一般のダイヤの最高品質と言われてお
りますDカラーよりも数倍の価値がございます」
「直ぐに用意できるのか？」
「はい、先日入荷したばかりの色の深い最高のブルーダイヤがございます」
「それで頼む。出来上がり次第秘書に連絡してくれ」
「かしこまりました」

心の中に何か焦りを感じていた。幸せが逃げそうで、この晴れやかな気持ち
に暗雲が何処かに立ち込める気がして、出来るだけ早く綾香にプロポーズする
事を考えていた。

第18章　暗礁（2）

シャワーを浴びて横になり部屋の灯りを消して瞳を閉じた。昨日から堅
とずっと一緒にいて、包み込まれるような温もりと幸せを感じながら過ごした休日。
（楽しかったな～。堅、今何をしているのかな）
シルバーの携帯を見て想う。
レストランやセレクトショップで感じた寂しさもあったが、堅との距離が
随分近くなれた気がして満たされた気持ちを胸に眠りについた。

「ドンドンドン！！」
けたたましくドアを叩く音で目が覚めた。
「？！」
「ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！」今度はドアチャイムだ。
何が起きたか分からずに枕時計を見ると、起きる予定より少し早い午前
7時を少し過ぎた時間だった。
「何だろう？こんな早くに」
ゆっくりベッドから降りると、けたたましい音に脅える猫の間を通り抜け
玄関に向かう。ドアについている覗き窓を見た。
「！？」
ドアの前にあるスペースに詰め込まれるように覗き窓の狭い視界では確認できないほどの人が立っている。
「高橋綾香さんのご自宅ですよね？！」
「綾香さんいらっしゃいますか？！」

「日東テレビです、記事についてお聞きしたいのですが！」
ドアの向こうで何人もの声が一声に叫ぶ。
「なっ！なに？テレビ局？！記事？」
予想も出来なかった事態に驚きドアの前から退くと、事態を把握できず
に混乱する。その間もドアの前から叫び声が続く。
「綾香さん！いらっしゃいますか？！」
「カタン・・」
ドアポストに何か入れる音が聞こえ、恐る恐るポストを開けると薄い
週刊誌が入っていた。　郵便受けから週刊誌を取り出す。
「おい！居るぞ！今音がした！」ドアの向こうで誰かが叫ぶ。
「！」
（やだ！なに？）怖くなって部屋に戻ると立ち尽くす。
手にした週刊誌をゆっくりめくると１ページ目のカラー見開きでデカデ
カと大きな見出しが躍っていた。
【関村グループ代表、華麗なる女性遍歴！】
（え？！）
その下に何枚ものカラーの写真が載っていて、見知らぬ女性と堅
が写っていた。
１枚１枚違う女性で目元が黒く塗りつぶしてあったが車に乗り込む
場面
や堅のマンションの前そして。
「！」
あのセレクトショップの前で取られている写真もあった。
一緒に写っている女性は目元こそ隠してあったが、その顔立ちやス
タイ
ルからとても綺麗な女性だと見て取れた。そして２ページ目
に綾香の写真も載っている。記事にはこう書かれていた。
【関村代表は若くして才能豊か、その経営方針には世界中の投資家

から
定評があり、計り知れないほど日本経済に与えている影響は大きい】
書いてある下に続いている記事は綾香が目を疑うものだった。
【有り余るほどの資産を持ち、独身で若くそしてルックスもモデルの様だ
大企業の代表を務める傍ら、女性関係は派手で一部の関係者からは懸念
の声も上がっている】
【気分で女性を選び、何度か密会を重ね飽きると次々と相手を変えていく
まるで関村社長の愛用している高価なブランド品のように女性達もまた
身につけるアクセサリーに過ぎないのか？】

【関係者A氏の話だと、関村代表は女性に飽きると一方的に連絡を絶っ
て手切れ金を渡し関係を絶つ。以前も妊娠騒ぎ等がありその際も大金を
積んで女性を黙らせた】
【今、関村代表が夢中になっている女性は、介護福祉士のT・Aさん。珍し
く地味で極普通の女性だ、今までの華やかなパリコレモデルとの付き合いが殆
どだったのに】
【関係者A氏＝地味な女性に珍しく興味が湧いたようです。その興味も
何時まで続くか分かりませんが】
記事は続いていたが、そこまで読むと力の抜けた手から週刊誌が滑り落ちた。
（うそ、どうなっているの？）

気が着くと指先が震えていた。その場に座り込むと今読んでいた記事
のことを考えた。
【関係者Ａ氏＝地味な女性に珍しく興味が湧いたようです、その関係も
何時まで続くか分かりませんが】
【気分で女性を選び、何度か密会を重ね飽きると次々と相手を変えていく】
（うそよ！堅がそんな人じゃないって私がよく知っているもん）
頭の中に記事が反復して木霊するように響き渡る。
堅がくれた携帯を手にすると電話を掛けた。
コールがなり続けるが、出る気配は無い。
（堅。出て、嘘だって言って）
祈るような気持ちで携帯電話を耳に当てる。
やがて留守電に変わる。一度切ると直ぐにもう一度電話を掛けなおすが同
じだった。
（どうして出てくれないの？！）
不安が増幅して波のように襲い掛かる。
「ドンドンドン！！」
「いるんでしょぉ～？！高橋さん～」
「出てくださいよぉ～」
玄関から聞こえる叫び声が途絶える事無く続く。　ベッドに潜り込むと
頭に枕を当てて耳を塞いだ。
（嫌！どうなっているの？）不安で怖くて涙が出てくる。
何時間経っただろうか、気が着くとドアからの物音が消えていた。
時計を
見ると１０時をまわっている。

会社に連絡していなかった事を思い出し電話を掛ける。ホームにも報道陣が殺
到して大混乱を引き起こし、所属しているケアセンターの所長から
【事態の収
拾が着くまで自宅待機してください】と言い渡された。
ボーっとする頭で何も考えられないで居た。
（堅、どうして何も連絡をくれないの？）
テレビを付けてみると関村グループの話題で持ちきりだった。
どのチャンネルも関村グループ代表と画面の端に出ていて関連のニュー
スが流れている。お決まりのポジションで同じような顔をした芸能リポ
ーターや評論家が口をそろえるように発言を繰り返していた。
堅のマンションの前ではリポーターが忙しそうに口を動かす。【関村グル
ープの株価が下落傾向にあり・・】すぐさまチャンネルを変えた。
【アメリカの大衆番組から火がついた報道で日本でも】どうやら報道の
発端はアメリカのゴシップネタが原因の様だった。
チャンネルを変えると報道陣に囲まれた若い女の口元から下が映っていた。身を乗り出して画面を見ると声こそ替えてあったが間違いなく
ユリだった。
【え～～っとぉ、私もぉ心配して居たんですぅ】
【だってぇ、関村社長には何度かお会いしましたけどぉ。どう見てもぉ
○○さんとはぁつりあわないっていうかぁ】
【なんとなく、遊ばれているのかなぁって・・】
綾香はすぐさまテレビを切ると画面にリモコンを投げつけた。
息が上がり、涙が止まらない。

（嘘よ！堅は好きだって言ってくれたもん！好きだって）
冷静な自分が心の中で囁く。
（じゃぁ、どうして連絡をくれないの？着信を見ているはずでしょ？）
【地味な女性に珍しく興味が湧いたようです。その関係も何時まで続くか
分かりませんが】
【関村代表は女性に飽きると一方的に連絡を絶って】
悪魔の囁きのように綾香の頭の中で木霊する。
（嘘よ！あの堅が、あんな風に優しい堅がそんな人のはず無い！）
携帯が鳴った。綾香のピンクの携帯電話だった。
着信を見ると知らない番号だ
（誰だろうテレビ局？でもこの番号知らないはずだし）
「もしかしたら！」
「堅！？」慌てて電話に出た。
「もしもし」
【あ、高橋綾香さんですか？こちら東都スポーツの真田と申しますが
お話聞かせてもらえませんか？】
驚きで声が出ない「どっ、どうしてこの電話が？」
【あ～、お友達の女性が教えてくれましてね～。えーっと柴田ユリさんと
おっしゃる方が】
（ユリちゃんが・・！？）
確かに数ヶ月前まではユリの本性を知らず、とても仲良くしていて番号
交換していた事をすっかり忘れていたのだ。無言で電話を切ると電源を
落としベッドにもぐりこんだ。
外に出られない恐怖感。いままで感じたことの無い不安な気持ちで

いっ
ぱいになり、おかしくなりそうだった。
（堅助けて、怖いよ。私どうなっちゃうの？）涙が溢れる。
どれだけの時間が流れただろう気が着くと眠っていた。
不気味なほど静まり返った玄関からチャイムの音が聞こえた。
「ピンポーン」
（さっきまで静かだったのに、また）
起きて玄関の様子をドアの隙間から窺うと、どうせまたマスコミだと思い
聞こえない振りをしてベッドにもぐりこむ。
「綾香！」
その声は堅だった。慌ててベッドから飛び降りると玄関に走りドアを開けた。
玄関に堅が立っていて綾香を見下ろしていた。その表情は逆光で陰って
いたが眉を顰めて優しい眼差しだった。
「堅」
「遅くなってすまない」
綾香は俯き、首をゆっくり振る。
「入って」
堅の声が不安だった心に暖かく響く、ホッとして泣きそうになった。
堅に
背を向けたままベッドのある部屋に入るとその場に立ち尽くした。
背中
に視線を感じながら黙り込む。
（何て聞いたらいいの？私の事は遊びなの？って？そんな事聞けな

いよ）
　静かに口を開く。
「電話・・・したんだよ？」
「すまなかった、早朝から色々処理に追われていて、電話するより直接来
たほうが早いと思って」
「この記事に書いてある事、本当なの？」
「それは・・・」
堅は週刊誌を読んでは居なかった。しかし何が書かれているか大体の事は平
尾から聞いていた。自社の株価の下落に対して重役達からの反発の対応。週刊誌
の出版元やテレビ新聞各社に圧力を掛け、報道の沈静化を図っていた。
（どうして？違うって言わないの？）ゆっくり振り返り堅を見上げた。
「嘘・・だよね・・？」
「この記事嘘でしょ？」
堅は眉を顰め黙り込むと視線を彷徨わせた。
週刊誌に書かれているように、綾香に対してそんないい加減な気持ちで居
る事など一度も無かった。確かに記事はかなり不愉快に堅を書きたてていたが、今まで女性達に対する態度は堅自身でも自覚するほど冷たいものだった。
　手切れ金も妊娠騒ぎも女性達が堅から大金をせしめる為に言い出した事
だったが。そんな人間に囲まれて育ってきた堅にとって自分の考えを主
張して言い合う事が一番嫌だった。多少の金を払う事で事態が収まるなら。

今迄の自分の態度に対する償いもあった。
何を口にしても言い訳の様で何と言ったら良いのか分からないで居た。
「この手切れ金も？妊娠も？」
信じられない事態に口が重くなるが聞かずには居られなかった。
堅が否定しない
そのことが不安だった心に追い討ちを掛ける。呼吸が上がり手足の先から冷たくな
る感覚が綾香を襲う。
「否定してよ」
綾香の頭の中で記事が木霊する。
（【地味な女性に珍しく興味が湧いたようです、その関係も何時まで続
くか分かりませんが】）
言葉を和らげようと作り笑いするが直ぐに真顔に戻る。
「違うって言って・・・」
（【気分で女性を選び何度か密会を重ね飽きると次々と相手を変えていく】）
唇が震えてうまく声が出ない
「堅？！」
（嘘・・・）
今迄心のどこかで感じながらも抑えてきた、なぜ堅が自分を好きになっ
てくれたのか。堅との距離そして価値観の違い、あのセレクトショップで服
を選ぶ姿。全てが頭の中で木霊し記事の内容と溶け込んで綾香に襲い掛かった。
（【地味な女性に珍しく興味が湧いたようです】）
綾香は震える口で堅を見上げた。
「それじゃぁ・・私の事も・・？」

堅はその言葉を聞くと綾香の両肩を鷲掴みした。
「違う！綾香、僕は！僕は綾香のことを本気で！」
その言葉を聞いて何処かで安心できたが、記事に関して否定しない事で
芽生えた不信感を払拭する事が出来なかった。
綾香の曇った表情を見て堅の声が高まる。
「僕が信じられないのか？！」
（信じてくれ綾香？！）両肩を激しく揺さぶる。
綾香は堅の顔から目を逸らすと溢れ出る涙を見せまいと両手で顔を覆う。
（何を信じたらいいの？）初めて堅に会った時を思い出した。
（あの時の堅は・・・）
堅が急に遠い存在に感じることを抑えきれない。
「この部屋が」
「堅の家のエントランスほども無いこの狭い空間が私の生活の場なの・・・」
そこまで言い終わると涙が指の間から零れ落ちる。
必死に肩で息を吸い込んで呼吸する。
「堅とは・・違いすぎるよ・・」
（どうして？こんなに好きなのに、なのにどうしてこんなに遠いの？）
触れていた腕から力が抜けていくのを感じた。堅の両手が綾香の肩から
力なく離れると、黙って背を向けてそのまま玄関から出て行く。
虚しくドアが閉まる音が聞こえて、その場に崩れるように座り込んだ。
張り詰めていた何かがドアの音ではち切れた。大粒の涙溢れ出ると
悲しみを抑える事ができず嗚咽となって体から流れ出した。
（堅が、堅が行っちゃった・・・）

今迄どんなに悲しくても声を出して泣く事なんて無かったのに声が堪え
きれずに出る。
（終わっちゃったの？私達）
「堅・・行かないで・・」

震える唇で咽び泣きながら声にしても、堅の香りが無常にも部屋から消え
ていく。そのまま動く事が出来ずに泣き続けた。
「け・・ん・・堅・・」
名を呼び続けても、目の前にあるのは堅が出て行ったという現実だけだった。

第19章　真実（1）

どれだけの時間が経ったのか、今日が何日か何曜日かピンと来ない状態だった。
枕の時計を見る。
（あれから2日過ぎたんだ）

堅からは連絡も無く、無気力なまま体を縮ませて横になり時間を過ごしていた。
朦朧とする意識の中で堅が出て行く後姿を思い出しては涙が溢れ出る。
どれだけ泣いても涙が枯れる事が無く、はれぼったい瞼で宙を眺めていた。
堅と過ごした僅かな時間、楽しかった記憶が嫌でも思い起こされる。
（大好きな堅の笑顔もう見ることが出来ない。どうして？どうして否定し
なかったの？嘘でもいい否定して欲しかったよ）
頬から涙が伝う。泣きすぎて皮膚が炎症を起こし涙ですらヒリヒリと痛
みを感じた。
「お風呂入りたい」
ゆっくり立ち上がると2日間何も口にしていない体がふらつく。
壁にもたれ掛かるように移動してバスルームに入るとシャワーを浴びた。
ふと、堅の家に初めて行ったとき手を引いてくれた事を思い出す。

（あの時の堅は凄く優しくて・・なのに・・）
「うぅ・・ひっく・・」

頭から浴びるシャワーの音にかき消されそうな泣き声が虚しく響いた。

昼下がり堅はオフィスで業務に追われパソコンに向っていた。
何かを忘れるかのように慌しく電話を取っては流暢な英語で話をする。
自覚していた。いつもと違う自分に苛立ちを感じながら無駄な動きをたびたび繰り返す。その都度イライラしては引き出しを乱暴に閉めたり
受話器を必要以上に強く置いたりした。

綾香の言葉が、泣き顔が胸を締め付けて頭から離れない。
ノックの音がした。
「失礼いたします」
「代表、準備が整いましたので会議室のほうへお願いします」

ゆっくりデスクから立ち上がり会議室へと向かう。
５０人ほどが楕円形の大きなテーブルに座り堅を待っていた。関村グループの役員達だ。無言でいつもの定位置であるテーブルに着くと役員の一人が急き立てるように発言をした。
「代表、わが社の株価の下落を一体どうなさるおつもりですか？！」
堅の父方の叔父だった。父親の事業と遺産を引き継いだ際に会社で役員
をしていた。周りの役員数人からもざわめきが起こる。
叔父はあの週刊誌を手にすると堅の横まで歩き、目の前に雑誌を広げた
状態で無造作に置いた。

「これは、どう説明なさるおつもりですかな？」
「このように、わが社のイメージダウンに繋がるような報道をされては
株価の下落に少なからず影響があるのでは？！これは関村グループトッ
プの代表らしからぬ行為ですぞ！」
周りの役員達のざわめきが大きくなりやがて黙りこむ。堅の様子を窺う
ように静まり返ると沈黙が流れ、緊迫した空気が会議室に漂った。
堅は目の前に置かれた週刊誌に視線を移し、瞳を閉じると失笑した。
「ふっ、こんな記事で株価が下落？」あざ笑う。
堅の隣に立ってふんぞり返るような姿勢で見下ろす専務を横目に見る
と視線を会議室中央に移しゆっくり立ち上がる。
その瞳からは鋭い眼光が放たれていた。
その権力を誇示するかのように、こう言い放つ。
「わが関村グループでは2日前に株式史上前代未聞の超大型分割を行った」

「短期急騰への高値警戒感から利益確定売りが優勢となりこの下落も一
時的に過ぎない！」

そういい終わると目の前に置かれた週刊誌を手に取り楕円形のテーブル中央に
投げ置くように放った。
「こんな報道に一々左右されるようでは困る。わが社の役員である以上
もっと的確に状況を判断してくれ！」それだけ言い終わると会議室から

足早に出た。
オフィスに戻るとデスクに座り煙草に火をつける。
ゆっくりと煙を吐きながら口を開いた。
「調べは進んでいるか？」
「はい、こちらをご覧ください」
そう言って平尾は堅の座るデスクにＡ４サイズの茶封筒を置いた。
その
中から十数枚の書類とクリップで留められている写真を取りだした。
あれほど強く抑えていたマスコミに火をつけた火元である伊倉の調査と
その後ろ盾である専務を調べていた。
「この男どこかで・・」一枚の写真を手にして呟く。
「見覚えがあるのも無理はありません。その男は先代が亡くなられた際
代表がお父上の愛人関係を調べた時に出てきた人物です」
「そうか、この男・・・」
父親が亡くなったとき数知れない愛人の調査を行っていた。
「自分は父親の隠し子だ」と名乗る女が現れたからだ。結局財産目当て
の狂言だった。今後そのような事が無いようにと念のため調べをしてい
たのだった。
「それで、証拠は掴めたか？」
「はい、今のところアメリカの大衆紙ＡＢＢ社と国内の週刊誌の編集者へ
話を持ちかけた男が同一だと分かりました」

「伊倉か？」
「はい」
（何が目的だ、金か？それとも親父に関係している事か？）
「伊倉を徹底的に調べてくれ」
そう言いながら少し短くなった煙草を灰皿にねじ込んだ。
「はい。それから」
「代表こちらを受け取って参りました。」
そういうと手に提げた小さな紙袋をデスクに置き後ろに一歩下がる。　堅はデスクの端に置かれたショップのロゴが入った光沢のある紙袋を横目で見た。
（綾香・・・）

綾香の笑顔を思い出した。プレゼントしようと思ってリメークを頼んでいた指輪だった。
（こんな風になってから、届く事になるとは）
ゆっくりパソコンの画面に視線を戻す。
「もう必要ない、捨てておいてくれ」低い声で静かに語った。
平尾は予期せぬ言葉に驚いた。
（店員の話だとこれは代表のお母様の形見と、そして婚約指輪と聞いていたのに）
「しっ、しかし！」
「聞こえなかったのか！？処分してくれ」
イライラした様子で噛み付くように言った。
（まさか代表は綾香さんの事を諦めてしまわれるのか？！）
「代表、差し出がましいようですが綾香さんの事を諦めるおつもりですか？！」身を乗り出すように言った。こんな風に口答えする事など
平尾は始めての経験だった。
「ドン！」

堅が厚みのある机を握りこぶしで力いっぱい叩いた。
平尾はその音と堅の形相で我に帰る。

「も、申し訳ありませんでした」そういいながら頭を下げる。
「一人にしてくれ、しばらくの間電話も取り次がないでくれ！」
堅は机に置かれたパソコンの画面から視線を外さず黙々とタイピングを始めた。
平尾は机に置いた袋を手に取ると頭を下げて部屋から出て行った。

独りになったオフィスで堅は深いため息をついた。イライラして平尾に
八つ当たりした事も綾香の事も、自分の不甲斐なさを感じて行き場が無い。

立ち上がるとオフィスの窓から雑然としたビル群を眺めた。

第19章　真実（2）

シャワーを浴びてお茶を口にする。まだ食べ物を噛み砕く気力が湧いてこない。擦り寄ってくる猫の頭を撫でながら、ベッドの横で膝を抱え
て座り込み黙々と喉を潤していた。
何も無い部屋の宙を眺めてはただ時が過ぎ去るのを待っていた。

（時間が経てば忘れられるの・・かな・・）
堅の笑顔を思い出す。（堅はもう忘れちゃったのかな）無意識に涙が溢れ、思い出したくないのに脳裏に焼きついて離れない。
（無口だけどいつも優しくてそして時々意地悪で）
（高望みしちゃったから？身分相応を考えなかったから？だからバチが
当たったのかな？でも堅と一緒に居たかった傍に居たかった）
「ふっうぅ・・っ」

「ピンポーン」
玄関のドアチャイムが鳴る。
（またテレビ局とか週刊誌かな）
恐る恐る玄関に近づき覗き窓を見た。
（どうして？！）
慌てて服の袖で涙を拭き、チェーンと鍵を手早く外すとドアを開けた。
「平尾さん」
「突然訪ねて申し訳ありません、お話したい事が」
驚いたが中に招き入れた。ラグマットの上に座布団を敷き、勧めると会釈を
して無言で座る。少し離れて向かい合って座ると沈黙が流れた。

（どうして平尾さんが？堅に頼まれてきたのかな）

「今日こちらへは、私の独断で伺いました」

「え？」

少し俯いていた綾香が顔を上げて平尾を見た。

「代表には何も報告せずに来ました」

しばらく沈黙するとメガネを右手でゆっくりと直し静かに口を開いた。

「代表は、無口な方です」

「・・・はい」

「側近の私にすら必要以上の事は話されませんし、綾香さんもご存知かと思いますが、それでも表面には出されないだけで内面では常に状況を冷静に捉えて行動なさいます」

「代表を冷血、冷酷等と言う方もいますが、本当は性根の座った真っ直ぐな方です」

「ですから、一連の報道に関しても綾香さんにどれだけ説明されたのか私には察しがつきます」

「週刊誌の事ですか？」

「はい」

「私が代表の下で働き始めたのは１２年ほど前になります、その頃から代表は経営等に関して才能を発揮され、若き企業家として世間から注目を集めていました。しかし、当時の共同経営者の裏切りにより代表は窮地に立たされ」

「当時、プライベートの事は私も把握しておりませんでしたが。交際し

ていた女性も権力や注目度が薄れたと言った理由で代表の目の前から去
られたと他の側近から聞いています」
平尾は淡々と続けた。
「当時から、無口で表情を殆ど変える事の無い方でしたがそれ以来、代表
は変わってしまわれました」
「事業が軌道に乗り、世界中からも注目されその権力も地位も確かなもの
になるにつれ代表に取り入ろうと善人の様に近づいてくる輩も多く」
「報道で取り上げられた女性達は皆、代表へ取り入りそして物品やその
ステータスを貪ってきました。どうやっても代表を操れないと悟ると今度
は何かにつけて手切れ金を要求してくる」

「そんな事の繰り返しです。報道にある妊娠も相手の女性の狂言でした」
「どうして？やましい事が無いならどうして手切れ金なんて！？」
「代表は、それでも孤独になりきれずに言い寄る女性達でも傍におい
ていたのでは無いでしょうか？」

「生まれた時から資産家の一人息子で沢山の使用人に囲まれていたとは
いえ、お母上が亡くなられてから多忙な先代は殆どご自宅には戻られない
状態ですし、成長してからは若手実業家として常に周りから一目置かれて来た

方です」
「代表を一人の関村堅として見て接してきた人がどれだけ居たでしょうか」
平尾はそこまで言うと口を閉じゆっくり息を吸い込み、話を続けた。
「私を含め少なくともこの１２年間１人の人間も存じません」
「手切れ金はその人に対するある種の諦めだったのかもしれません」
平尾の言葉を聞いて初めて会った頃の堅の顔を思い出していた。
（あの時感じた。必要以上に近寄ると切れそうなほど鋭い眼差し、そして時々凄く寂しそうな瞳をしていた事。堅が孤独な人なんじゃないか？そんな風に思ったこと）
「代表は、綾香さんに何も申されなかったのでは無いですか？」
綾香は黙って頷いた。
「仕事では考えられないな、不器用な方ですね・・代表は・・」
「代表は、綾香さんに逢われてから本当に変わられた。以前街の中でいきなり車から飛び出されて」
「職務中にマンションに戻られるし本当に。私は正直どうしてそこまで代表が綾香さんの事になると取り乱されるのか理解できませんでした」
「でも、私もようやく分かった気がします」
「え？」
「あなたが、代表を一人の関村堅として見ていたからですよ」
「代表は初めて、そしてようやく見つけることが出来たのでは無いでしょうか？自分が愛せる人を、一人の人間として愛してくれる人を」

綾香の頬に涙が伝っていた。
平尾はスーツのポケットに手を入れると小さな箱を取り出した。
綾香の目の前に置いて箱を開く。そこにはプラチナのリングの中央に
ダイヤ、まわりに綺麗なブルーの宝石がついたリングだった。
「これは？」
「代表がお母様の形見を、リメークして綾香さんにと作った指輪です」
「え？」
「代表は、これを婚約指輪になさるおつもりだったようです」
「婚約？」
（堅がお母さんの形見を？）
「私に、処分するようにと・・託されました」
（やっぱり堅は、堅は・・私の事をもう）
「綾香さん。これはここに置いていきます。これをどうなさるかあなた
に考えていただきたい」
平尾はそこまで言うとメガネを直し立ち上がり、背を向けて呟くように言った。
「代表を諦めないで欲しいのです」
「では、失礼いたします」
と言うと足早に玄関に向かい、座り込む綾香を見る事無く部屋から出て行った。

平尾が出て行った部屋で綾香は一人考えていた。　溢れ出る涙を拭きも
せず。平尾の言葉の意味を、堅がこの部屋で言った言葉を思い出していた。
（堅の気持ちは確かなものだったのに）

箱の中にきちんと収まっている指輪を右手の人差し指で撫でた。
堪えきれずに声に出る。
「け・・ん・・堅」
咽び泣き名を呼ぶその声は狭い部屋にむなしく響いた。両手で顔を覆っ
て感情を抑える。呼吸が浅くなって肺の中に滞留した酸素を吐き出す
ように口にした。

「堅の笑顔も優しさも私だけが知っていた筈なのに、私は信じよう
としなかった」
部屋の片隅に無造作に置いていた週刊誌に目が行く。瞳は涙で滲
んでいたが
微かに記事が見えた。呼吸を整えるとまた頬に涙が伝った。
「私は・・・あの人たちと何も変わらない」

そう思うと指先から体が冷えていくのを感じた。
いろいろな事を次々と思い出す。
(街で孤独に苛まれ泣いていた時堅が来てくれたこと、友達になって
ほしいといきなり言われた事、書店でビジネスマンにぶつかられた時
の事、一緒にお茶を飲んで安らいだ気持ちになれた事、ずぶ濡れに
なった時優しく包み込んでくれた事)

(そして好きだって言われた事)

頬から伝った涙が零れ落ちて、手にした指輪の箱に落ちる。
(私は堅に相応しくない。今度の事で良く分かった。どんなに堅を
想っていても傍に居たいと願っても私だけに見せてくれた素顔を感
じ取る事が出来なかった)
(私は堅を信じる事が出来なかった)
深呼吸して、溢れる涙を止めようと天井を見上げる。

（この街には堅との思い出がありすぎて辛いよ）
吸い込んだ息をゆっくりと吐き瞼を閉じると決意した。

この街から去るそう心に決めた。
２日ぶりに自分の携帯の電源を入れる。留守番電話が３０件も入っていた。内の２０件は新聞社からの取材依頼で他の１０件は実家と友達からだった。おそらく報道を見て心配していたのだろう。綾香は履歴の中からひとつ選択すると電話をかけた。
「はい、高橋です」

久しぶりに母の声を聞いて何処かホッとした。
「もしもし、お母さん？」
「綾香！！？心配して居たんだよ～どうしていたの～？！」
綾香の声を聞いて母は声を張り上げた。
「ごめんね」そう言うと涙がこぼれそうになり声が上ずる。
「綾香、大丈夫？」

母はそれ以上何も聞かなかった。辛い事を察してくれているようだった。
「心配掛けてごめんね」
「ちゃんと食べているの？」
「・・うん」
「お母さん・・」
「どうしたの？」
喉に詰まるような何かを押し出すように言葉を吐く。
「戻っても良いかな？実家に」
母は少し沈黙した後に優しい口調でこう言った。

「帰っておいで、部屋片付けておくから何時帰れるの？」
「出来るだけ早く帰るね、準備が出来たらまた連絡するから」
電話を切った後、直ぐに所属している会社に電話した。退職の旨を伝え
ると上司は厄介払いしたかのように「あ～、そうかそうか。退職願？！ああいい、要らんよ。じゃぁ本日付退職でいいね」
と、綾香の返事もろくに聞かずに一方的に電話を切った。

（今迄、私なりに一生懸命頑張ってきたけどなんだか虚しい終わり方だなぁ。こんなのでいいのかな、本日付ってなんだかアッサリしすぎ
ていてピンと来ないや）
不動産屋や運送会社に連絡して明後日引っ越せる事になった。

（早くこの街から去りたい、ここに居ると苦しいよ）
マンションの窓から外を眺めた。隣のビルの外壁と僅かに外の道路が見
える。夕暮れの日差しに染まる窓ガラスを見て堅の笑顔を思い出しまた
切なくて胸が痛んだ。

第２０章　黄昏の中で（１）

「では、以上で宜しいですね？」
「はい、お願いします」
「毎度どうも！失礼します！」
中年のがっちりとした体格の男性が【白ねこ引越しセンター】と
社名が大きく入った帽子のつばを右手でつまみ、勢い良く脱ぐとお
辞儀をしてトラックの運転席へと戻って行った。トラックを見送り
何も
無くなった部屋に戻ると、がらんとした部屋の真ん中に座り込む。
部屋で過ごした短い日々を思い出した。

（あっけない幕切れだったなぁ～）
部屋の片隅に置いたバックの中には平尾が置いていった指輪の箱が
入っ
ていた。バックを左手に提げると指輪の箱を取り出す。中をあけて
眩し
いほどの輝きを放つダイヤモンドを見ると無性に切なくなる。
鼻がツンとなって今にも涙が溢れそうになり、どれだけ泣いても枯
れる事の
無い涙を疎ましくすら思った。
瞳を閉じて深く息を吸い込み気持ちを振り切るように部屋を後にし
た。

伊倉は隣のビルの屋上から綾香の住むマンションを見た。無精ひ
げを蓄え
よれよれのシャツを着て首からカメラを提げている。不気味に微笑

むとカメ
ラのファインダー越しに綾香の部屋の窓を覗いた。
（あの女は関村の一番のお気に入りだ。関村に張り込んで今迄見てきたが
一番入れ込んでいた女だ）
堪えきれずに声を出して笑う。

「ふっ、あははは」
（あのユリって女を買収して正解だったぜ、まさか国内のマスコミに対してガードが固い関村もアメリカのゴシップ記事から火がつくなんて
想像していなかっただろうな。あの女、マスコミの容赦ない攻め立てでとうと
う参っちまったか。大方実家に帰るとかだろうな）
「ざまぁみろ、関村」
（おまえもあの薄汚い親父と同じなんだよ！俺のお袋をゴミみたいに捨
てやがって！そしておまえも・・・！）

「もっと苦しめ！関村！このまま株価の急落が続けば責任問題になりか
ねない。あとはあの専務が追い詰めてくれれば」
伊倉の母親は１５年に渡り堅の父親と愛人関係にあった。伊倉は母親の連れ子
で父親の温もりを知らない。幼心に父親の面影を堅の父に見出していた。
しかし１５年尽くした母親を簡単に捨てて堅の父親は悪びれる様子も無
く伊倉親子の前から姿を消していた。
（あの親父は機嫌が悪いと俺を邪魔者扱いして殴ったりした。お袋

は陰
で15年もあいつを支えてきたのに苦労した挙句癌で死んでしまった）

堅の父親が来ると真冬で雪が降っていても夜中、何時間も外に放りださ
れたのを思い出す。優しかった伊倉の母も堅の父親には逆らえず虐待行
為を咎める事が出来なかった。

堅の父親に対して憎悪がこみ上げる。
（15年も尽くしてきた女の見舞いにも、葬式にすら来なかった）

そして成人してから結婚を直前に控え、付き合っていた女性が堅に入れあ
げ伊倉を捨てた。その事が記憶に封じ込めた憎悪に火をつけたのだった。
伊倉の目に堅は何一つ不自由なく父親の愛情を受け、今の地位に上り詰め
すき放題生きているように映っていた。　何よりも同い年で対照的な生き方
をしている堅が許せない。

胸ポケットに入れていた携帯電話が鳴る。電話を手に取ると着信を見てニヤ
リと微笑み電話に出た。

「これは、これは、専務さん」
「伊倉君、金のほうは香港の架空会社の口座に振り込んでおいたよ」
「はは、そりゃぁどうも、で？あいつは？順調ですか？」

「あぁ、これだけの騒ぎになっているのに堂々としたものだよ。
まぁ
このまま下落が続いたら他の役員も株主も黙っちゃ居ないだろう」
「頼みますよ～、あいつが落ちてくれないと俺もあんたも困った事になる。トコトン追い詰めてくださいよ」
「もちろんだ！あの若造め！私を散々コケにしおって！」
「まぁ、私は専務と言う立場だが、関村の血縁と言うことで派閥も私に傾いている。このままで行けば次の代表の座は私に決まりそうだ」
「あはは、そいつは楽しみだ。まぁせいぜい頑張ってくださいよ」
「金を確認したら、直ぐに香港に飛べ！何時までもここでうろうろする
なよ！足が付いたらまずい事になる」
「わかっていますよ、では」
電話を切ると真顔に戻り舌打ちをする。
「いけ好かねぇ親父だぜ！まぁ、関村を叩き落せるならなんでもいいや」
マンションを眺めて何かを考えるとビルの屋上を後にした。

綾香がマンションから出ると通りへ出ようといつもの道に体を向けた。
道の向こうから一人の男が歩いてくる。気にも留めないで歩いていたが男の視線を感じて顔を見た。
（もしかしてテレビ局の人かな）
そんな風に思うと早く男から遠ざかりたくて早足に歩き始めた。
「こんにちは」

見ず知らずの男に声をかけられて不思議に思う。眉を顰めて警戒した態度を取ると男は目の前に立ちはだかり不気味に微笑んだ。
（なっ、なにこの人？！）
目の前で見ると無精ひげを生やし、首からカメラをぶら提げていたが着てい
るシャツもよれよれで皺だらけだ。どうみてもテレビ局アナウンサーの清潔な
イメージとはかけ離れていた。
「なんでしょうか？！」怪訝に思い返事をする。
「あなたに、プレゼントがありましてね」
そう言うと無精ひげやルーズな姿に似付かわしく無い、白い歯をちらりと見せて笑った。伊倉の不気味な笑みに身構える。
「プレゼント？！」
伊倉は片手に持っていた茶色いＢ５サイズの封筒を綾香に差し出す。
綾香は怪訝な顔のまま封筒を受け取ろうとせず後ろに退いた。
（な、何この人）
伊倉は綾香の顔を見て不気味に声を上げて笑う。
「あはは、そんなに脅えるなよ」
「まぁ、見てみろよ。面白いものが入っているからさ」
そう言って差し出した手をさらに綾香に近づけた。
恐る恐る封筒を受け取る。封はされておらず中を見ると写真が何枚も入
っていた。ゆっくり取り出すと写真に写されている光景に指先が震
える。
（この写真何時のだろう）
綾香と出会う前のものかもしれない、だが堅が他の女性と写っている写真
にショックを隠せないでいた。そこには堅とキスをしている女性の
写真があった。
他にも女性が抱きついている写真が映っている。おそらくマンショ

ンの
前だろうか夜に撮られた写真のようだった。
「この写真あなたが撮ったの？！」
伊倉はニヤリと笑うとその質問には答えずに
「なにせ、ベストショットが多すぎて週刊誌に載せきれなくてな」
「分かっただろ？！あの男は女をなんとも思っちゃいねぇ～あんたも
あの男に弄ばれたんだよ！」
動揺して震える指、週刊誌とは違う写真そして生々しさが伝わってきた。
（け・・ん・・）
写真の堅は仮面を付けたかのように無表情で綾香の知る笑顔や優しい眼差しは1枚も写っていなかった。　平尾の言葉を思い出す。
【代表はそれでも孤独になりきれずに、言い寄る女性達でも傍において
いたのでは無いでしょうか】
【代表を一人の関村堅として見て接してきた人がどれだけ居たでしょうか】
（堅・・・）
伊倉はショックを受けている綾香を見て笑い声を上げる。

「ひっでぇ～男だよなぁ～金にもの言わせて、アンタみたいに田舎っ気の
抜けねぇ擦れねぇ女にまで手を出すんだからよ」
「まぁ～あいつも何時まで関村グループの代表で居られるかなぁ」
俯いてゆっくり目を閉じて深呼吸した。　震える指が止まると両手で
写真を掴み真ん中から破り捨てた。
「なっ！」綾香の行動に驚き伊倉の目が大きく見開いた。
鋭い目で伊倉を見上げる。

「だから何?!」
「強がるなよ、実際関村の態度が変わったんだろ?」
(確かにあの記事はきっかけにはなったけれど、でも)
あの日部屋を出て行く堅の後姿を思い出し、目を伏せた。
「私も」堅の笑顔を思い出す。
(堅・・・)
もう一度伊倉を見上げて声を張り上げる。
「私も記事を信じた。でも!本当の堅を知ったから。あんな記事で堅を
追い詰められるなんて思わないで!」
言い切った綾香の揺ぎ無い態度と強い口調に伊倉は一瞬たじろいだ。
それだけ言うと伊倉の前を避け足早に通り過ぎた。

第２０章　黄昏の中で（２）

堅のオフィスで緊迫した空気が流れていた。堅はデスクに着き机に両肘をついて手を組み、目の前に立つ専務を睨みつけるようにこう切り
出した。
「どうして呼ばれたか身に覚えがあるだろう？」
「私には、何の事だか」
血縁関係で叔父と言う立場なのに、口調は蔑みを露にしていた。
叔父の様子を見てから、デスクの横で息を潜めるように立っていた平尾を横目
で見る。
「平尾」
平尾は手にしていた書類を堅に手渡した。書類を手に取るとデスクの前
に立つ専務に向けて放り投げた。デスクを越えて書類が散らばる。そこ
には伊倉の写真や架空で作った会社の名義人、伊倉の名前そして会社の銀
行口座に振り込んだ専務の名前が記載してあった。
「その伊倉と言う男は、出版社に話を持ちかけた男だ」
堅は顔を少し下げてきつい目つきで専務を睨みつけ、落ち着き払った低い
声で言った。
「これは、どう言う事だ？」
「こっ、これは」熱い季節でもないのに専務の額から汗が滲んでいた。
（馬鹿な！なぜ、ばれた？！）
「専務、君の主張していたように一連の報道で株価が下落したのだ

とし
たら今後、その責任の取り方は分かっているな?!」
専務は苦虫を噛み下したような顔をして、お辞儀をすると項垂れた様子
で部屋から出て行った。

午後の日差しが傾き始めた夕暮れ、綾香は街の中心部にいた。大型　家電
量販店の前を通ると、ショーウィンドーに並べられた色々なメーカーの液晶
テレビが映画やニュースを流していた。映し出された光景に驚いて、そのいく
つかの液晶画面に釘付けになった。
「け・・ん」
そのテレビの画面に堅が大きく映って夕方のニュースで流れている。
店内に慌てて駆け込みテレビコーナーに行くと音が聞き取れるテレビを
見つけ耳を澄まして画面を食い入る様に見つめた。
【関村グループの株価は株式市場前代未聞の超大型分割により前日まで
短期急騰の高値警戒感から利益確定売りが優勢となり急落が続いていま
したがこれも一時的との見方が強まり】
【売り上げ単位数が急増し現在、他の企業の単位を大きく上回り日本一
高い流動性を・・・】
【では、本日昼に行われた記者会見の模様をご覧ください】
綾香は息を飲んで画面を見続けた。沢山のフラッシュがたかれ堅がテ

ーブルに着き堂々たる口調で発言をしていた。
（堅）
【更なる流動性の向上により投資未経験者による新規投資なども含め株主数の増加を目的にしている・・】
目を顰めるほどのフラッシュが一斉にたかれる。
その姿は綾香の知っている優しい堅とは全く違う別人のよう遠い存在に
感じた。

（よかった、堅元気そう）
関村グループの話題が次のニュースに変わるまで切ない気持ちを感じな
がらも画面を見続けた。涙で滲んで堅の顔が見えなくなり次のニュース
に変わってしまうと俯いて店を出た。

「ここがオフィスって言っていたなぁ」
何時か偶然に再会した書店が入っているビルの前にきた。
（この場所で、あの時堅が来てくれたんだ）
そんな風に思い出し微笑んでみたが、胸に突き上げる痛みが心を締め付ける。
バックからシルバーの携帯電話を手にすると開いてアドレスを見た。
【関村堅（携帯）０８０－６０××－××××】
表示を見て綾香は電話を閉じるとバックに入れた。
（突然訪ねて逢えるか分からない。でも、電話かける勇気が無いや。どうしても逢えなかったら会社の人にこれを預けて帰ろう）
（表情のわからない電話から聞こえる声が冷たかったら如何しよう）
そんな事を考えるとコールボタンを押す事ができなかった。
ビルのテナント表示に目を向けた。

（えっとあった！これだ！関村グループ）
エレベーターに乗り込むと6階までしかボタンがなかった。
（あれ？このビルもっと高いのに）
一番上の6階を押しエレベーターが付いた先は、関村グループの受付ロビーだった。ホールの奥にカウンターが置いてあり中央には噴水があって控えめに水が流れている。
受付カウンターには綺麗な女性が2人前方をじっと見て人形の様に座っていた。そのカウンターの向こう側に別のエレベーターが見える。ゆっくりと近寄るとすまして座っている受付嬢に近寄る。
「あ、あの関村堅さんにお会いしたいのですが」
二人の受付嬢は顔を見合わせ不可解な顔をすると綾香を見上げる。
「失礼ですが、お約束はされていますか？」
「いいえ、でもすぐ済みます」
「そう申されましてもお約束が無いとお通しする訳には」
「あのっ。高橋綾香が来たと伝えてもらえませんか？」
（やっぱり無理かな）
諦めかけた時、受付嬢は少し考え込んだ様子で受話器を取る。
「高橋様ですね少々お待ちいただけますか？」
と言い何処かに電話をかけた。
受付嬢は受話器を置くと「少々お待ちください」とだけ告げてまた視線を前方に向け人形のように黙り込んだ。
（堅が来るのかな）
淡い期待を胸にドキドキしながら受付の横まで移動すると、その場所においてある観葉植物の葉を眺めた。堅が来るかもしれないそう思うと

期待感と共にとてつもない不安が襲う。
緊張で微かに指が震えていた。

（どうしよう、堅に会ったらなんて言おう）
「綾香さん」
聞き覚えのあるその声に振り向くと、そこには少し柔らかな表情の平尾が
立っていた。
「平尾さん」
（堅じゃなかった）何処かホッとしていた。
「平尾さんどうして？」
「すみません。代表は今、会議中でしてこちらへどうぞ」

そういうと受付のカウンターを通り過ぎて歩き始めた。綾香も慌てて後に続く、エレベーターに乗ると平尾が言った。
「会議はあと１０分ほどで終わると思います」
「私がここへ来た事、堅は知らないの？」
「はい」
綾香は昇降ボタンの前に立つ平尾の背を見た。

（これほど忠実そうな人が私のために）
そんな風に思うと平尾に対して感謝の気持ちが湧いてきた。エレベーターが３５階で止まると静かにドアが開き赤い絨毯が敷かれたホールが
広がる。ホールの奥に大きな扉が見えた。両脇にはアンティークの置物がある。
平尾はエレベーターから先に降り扉の前まで行き、ゆっくりと扉を開けた。
その部屋は広く黒い磨き石が奥にある重厚なデスクと一体化して観葉植物が置いてあった。今迄踏み入った事の無い空間に綾香はたじろ

いだ。

第２０章　黄昏の中で（３）

「こちらで、おまちください」
平尾はそう言ってドアを閉めようとした。
「あのっ！」
「はい？」
「平尾さんありがとうございます」
頭を下げると平尾は無言で会釈を返し、扉をゆっくりと閉めた。

一人になった部屋を見回すと隅にエレベーターがあった。
（堅、専用かぁ）
そんな風に思うと行く先々で堅専用のエレベーターや通路にたじろいだ
あの日を思い出す。
（あのエレベーターから来るのかな）
（ここが、堅が働いている所なんだ）
堅が来る。そしてさよならを言う。
そんな風に意識しただけで涙が出そうだった。
深呼吸して瞳を閉じると心の中で呟いた。
（どうか、泣き虫な私）

（最後まで泣きませんように、我慢できますように）
エレベーターの扉の向こうでワイヤーが動くような音が微かに聞こえ
た。
（動いた！）
心拍数が上がるのを感じた。真っ直ぐ前を向いて窓に視線を移すと
呼吸

が速くなるのを抑えるように意識して深く息を吸った。

エレベーターのドアが静かに開き、堅が片足を踏み出すと綾香を見て信じられないといった顔で固まった。

「あや・・か・・」

ゆっくり顔を向け精一杯微笑んだ。

「ごめんね、突然」

綾香の顔を西日が柔らかく照らす。

「如何してここに？」

驚いた様子で立ち尽くしている。

「平尾さんが入れてくれたの」

「平尾が？」

堅はエレベーターから降りると目の前までゆっくりと歩いてきて立ち止まった。

「平尾さんから、全部聞いたよ・・・」

堅は眉を顰めて視線を彷徨わせる。

「平尾さんを怒らないでね、私、平尾さんが教えてくれなかったらずっと苦しかったから」

そう言って微笑む綾香がとても切なく見えた。

「言ってくれなきゃ分からないよ。私、鈍感だからさ」

精一杯微笑んだまま堅を見上げて視線を逸らさずに続けた。

「ごめんね」

「堅の笑顔も優しさも特別なものだったのに私、気づこうともしなかった」

そこまで言うと俯く（泣かないで、泣かないで！あと少しだから）

震える声で続ける。

もう微笑む余裕なんて無くなっていた。

「私ね。怖かったんだ・・・、堅みたいな人がどうして好きって言ってくれたのか分からなくって、お金も地位もあって女の人と付き合うことなんて苦労もしない人なのに」
「どうして、私みたいに普通に地味で美人でもない女を好きになってくれたんだろうって」
「・・綾香・・」
「不安だったの、堅を好きだって、大好きって思えば思うほど相応しくないって思い知らされるみたいで」
「ずっと堅の傍にいたくて堅の笑顔見て居たかったけど」
そこまで言うと声が上ずる。涙が出そうになり言葉を一瞬止めた。
深呼吸して続ける。
「私ダメだね・・・」瞳に涙を溜めながら必死に堪えていた。
「好きな人を信じる事もできなかった。自分の不安ばかり先に立って堅を信じる事が出来なかった」
「私も、あの週刊誌の人たちと何も変わらないって分かった」
俯いている間も堅の視線を感じる。しかし綾香は見ることが出来ないで居た。
目の前に立つ堅の右手をそっと手に取る。その大きな手のひらに指輪の箱と携帯電話を乗せた。
「これは！」
「それもね、平尾さんが持ってきてくれたの」
堅の顔をやっと見ることが出来た。凝り固まったかの様に重くなった頬を必死で動かして笑顔を作る。
「堅ダメだよ？お母さんの形見なんでしょ？」
「そんな大切なもの捨てたりしたらダメだよ」
「私ね、田舎に帰る事にしたから」

「荷物も全部送ったの。後は帰るだけなんだ」
（だめ！涙が出そうもう少しだけ、もう少しだけがんばれ）
自分に言い聞かせて俯くと深呼吸をしてもう一度堅を見上げた。
「今度はちゃんとその指輪に相応しい人見つけてね」
とニッコリ微笑んだ。
（早く、ここからでなきゃ、じゃなきゃ・・・泣いちゃうよ）
俯いて最後の言葉を口にした。
「さよな！」
突然体に軽い衝撃が走って頭が真っ白になった。
気がつくと堅に抱きしめられていた。

綾香を抱きしめて以前より痩せている事を感じていた。はれぼったい顔でやつれた体きっとこの数日間苦しんでいたのだろう。
「け・・ん？」
「相応しいって何だよ！」
その大きな声に綾香は驚く。
「勝手に決めるなよ！」
「あやか・・」
「綾香！」
腕の力がさらに強くなる。
「はい・・」
綾香の耳元で堅が震えるように息を吸い込むのが分かった。
「愛している」
「何処にも行くな！」
「け・・ん」
その言葉が強く心を揺さぶると堪えていた涙が溢れ出だしていた。
「でも、私堅を信じなかったのよ？」
「綾香は悪くない、僕が弱いから今のままじゃ綾香を守れないと思

った。
こんなバッシング一つからも守れないようじゃ・・・」
「だから、仕事に打ち込んでもっともっと大きな力を手に入れなくては
僕はもっと強くなる、もっと大きくなるから」

「だから！・・・だから僕の傍で」

力強く息を吸い込む。心を落ち着かせ秘めていた気持ちを全て込め、静かに
口を開いた。
「僕の傍で笑っていてくれないか？」
「今のままの綾香でいい、そのままで良いからこれからは僕が全力で守るから」

「傍にいて欲しい」
涙が溢れてとまらない、震える唇を必死に動かした。
「けんの・・・傍にいてもいいの？」
堅は綾香をゆっくりと離す。優しく深い瞳でゆっくり頷いた。
「綾香、愛している。僕と結婚して欲しい」
「堅・・・」
堅は箱を開けると指輪を取り出した。綾香の左手をそっと掬い優しく握ると
薬指に指輪をスルリと通した。
薬指で力強く光るダイヤモンドは二人の行く末を照らすようにキラキラ
と輝いていた。堅は左手を口元まで運ぶとそっと口付けをして体勢を戻す。

「行こうか」
「え？」
「綾香の実家。今日帰るつもりだったんだろう？ご両親に挨拶に行かないとな、急だがもう待てない」

そう言って悪戯気に微笑んだ。
「あは、仕事大丈夫なの？」
「あぁ、実はこれから綾香に会いにいこうと思っていたから」
堅の照れくさそうな顔を見てくすぐったくなって笑った。
「あは、うん」
頷いて見上げた堅の瞳がやさしくて見詰め合うと唇を重ねた。
久しぶりに感じる綾香の唇に熱いものがこみ上げるのを感じた。唇が離れると堅は出掛ける準備をしにデスクに戻る。

愛おしい堅の背中を視線で追うとデスクの隅に重ねてある書類と写真に目
が行った。
「この人？！」
「知っているのか？」
「うん、今日声を掛けられたの」
「何かされたのか！？」堅が慌てる。
「ううん、少し話しただけよ」
「なんだか感じの悪い人だったけど」
「その人なんでしょ？記事書いたの」
「あぁ。この伊倉と言う男が我が社の専務と共謀して・・・」
「堅を追い詰めたの？」
堅は少し微笑んだ。
「いや、それほどでもない事だったよ。仕事ではね」
「でも綾香との事は、効いたな・・・」そう言うと少し切ない瞳をした。

「話して何があったの？」
堅は少し戸惑った様子だったが、父親や専務の事そして伊倉との関係を話した。
「じゃぁその伊倉って人は堅のお父さんも堅の事も良く思っていないって事？」
「あぁ」
「それに・・・」と言うと眉を顰めて視線を彷徨わせた。
「なぁに？堅、教えて」そう言うと堅は重そうに口を開いた。
「それに数年前に2、3回会った事のある女性と伊倉が当時同棲して
いた事が調べたら分かった。その後二人は別れたらしい」
「二股？掛けられたって事？堅とその伊倉って人」
堅はゆっくり頷いた。
「そっか、じゃぁ堅のこと怨んでいるかもしれないの？」
「あぁ・・」
綾香が俯くと堅はこう言った。

「詳しい調べがつくまでは、専務が会社の金を渡していたこともあるし
対応や今後どうするかを弁護士と協議していたが」
「事情が分かると正直悩んでいる。彼の母親のこともあるし」
たとえ自分を貶める様な事をした男でも、伊倉の幼少時代を知ると自分の
辛い幼少時代を思い出す。それが自分の父親によってもたらされた物と知
ると伊倉に対して何処か躊躇していた。
綾香のやつれた様子を見て堅はその判断を委ねる事にした。
「今回の事で、一番傷ついたのは綾香だと思う。綾香はどうしたい？」
少し考え込むと堅を見て言った。

「今度の事はテレビ局とか携帯にまで電話が来て・・」
「本当に怖かった。許せない！」
「綾香・・・」
目を伏せてからもう一度堅を見た。
「でも」
「もういいの」
「え？」
「その、伊倉って人が色々あったこと堅の幼少の頃の思い出も少しだけ
ど分かったから」
「確かに、あんなふうに雑誌やテレビで取り上げられた事は許せないけど」
「これからは堅と一緒に居られる」
「見て触れて私が知っている堅を信じていく事にしたから、だからもう
振り回されないの。だから、私はもういいの」
「それにその伊倉って人も堅のこと知ったらきっと分かってくれるよ」
そう言ってニッコリ微笑む。
その言葉で堅は伊倉に対する迷いが消えていた。ニッコリ笑顔が愛おしく
なって綾香を抱きしめた。
瞳を閉じて綾香の耳元で囁く「やっぱり最高だよ、綾香は」
「何が？」不思議そうな顔で首を傾げる。
「いや、なんでもない」と意地悪に笑う。

「もぉ～また意地悪」頬を膨らませたがその顔は笑っていた。

静かなオフィスで黄昏色に包まれて二人は何時までも抱きしめあっていた。

END

第２０章　黄昏の中で（３）（後書き）

最後まで目を通して頂きまして、ありがとうございました。この小説はすでに完結していましたが、執筆者（私です・・・）の抜けたチェックにより１９章の真実（２）を掲載しない状態で完結しておりました。すでに読まれた方、ご迷惑おかけし致しました。

＊この小説はフィクションです。地名、団体等。実在しない箇所も含まれておりますのでご了承願います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6899a/

Ａ　Ｓｏｎｇ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕ

2010年10月21日21時10分発行